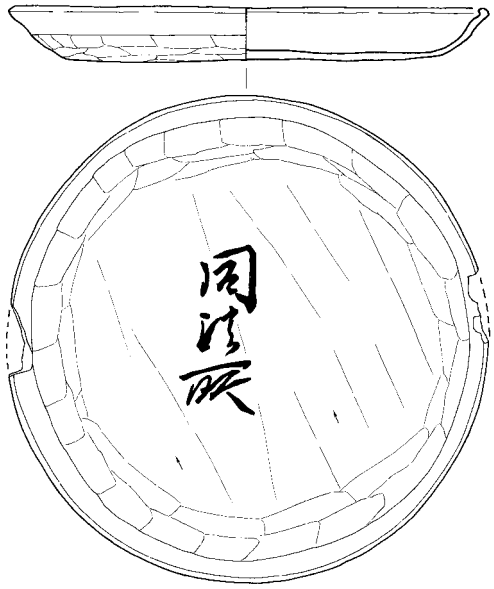
平城京右京一条三坊一坪

平成18年度発掘調査報告書



2008

（財）元興寺文化財研究所

平城京右京一条三坊一坪

平成18年度発掘調査報告書

2008

（財）元興寺文化財研究所

序

近鉄大和西大寺駅は、奈良・京都・大阪・橿原へ向かう各線の交差する地点で、奈良市内で近代早くから開発され、店舗や住宅が多数建築されて、発展してきたところです。そのうえ奈良市内では、平成22年1月から開催される平城遷都1300年記念事業に向けて、アクセス道路の確保・拡幅や近鉄大和西大寺・JR奈良駅前の再開発などが暫時行われており、大きく変貌しようとしています。同時に全国的なマンション購入者の増加にともない、市内でもJRや近鉄の駅周辺では集合住宅の建設がその数を増しており、今回の発掘調査もそうした大型集合住宅の建設計画に先立つものであります。

さて、その調査地は平城京右京一条三坊一坪にあたり、官大寺の西大寺旧境内東側隣接地で、「喪儀寮」の存在が想定されていた場所であります。しかし、調査の結果はその予想に反するもので、出土した遺構の変遷状況や「同法所」と記す墨書土器などから、むしろ西大寺と深く関連する敷地であったことが明らかになりました。

拙い冊子ではありますが、本書が平城京や西大寺の研究はもとより、文化財の保存、保護に少しでも役立つならば幸いに存じます。

本書を上梓するまでには多くの方々のご協力がありました。文末ながらここにお礼申し上げる次第であります。

平成20年３月

（財）元興寺文化財研究所

理事長　辻 村 泰 善

例　言

1. 本書は、平城京右京一条三坊一坪における発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 調査地は、奈良市西大寺本町187-1他で、開発対象面積は約3,450m²、建築平面積は約1,730m²で、発掘調査面積はのべ約1,300m²である。
3. 調査は、奈良県教育委員会及び奈良市教育委員会から依頼を受けた（財）元興寺文化財研究所が、平成18年11月27日から平成19年3月23日まで現地での作業を実施し、狭川真一・岡本広義・角南聡一郎・佐藤亜聖が担当した。整理及び報告書作成作業は、調査終了後速やかに開始し、平成19年度をそれに充てた。
4. 調査地の実測および写真撮影は、調査担当者のほか、西口智彦・福山博章・武田浩子・佐伯公子・新田いくみの協力を得た。出土遺物の実測及び浄書は、武田・仲井光代・奥田智代・榊真麻が行い、赤外線写真撮影は大久保治（情報管理室）、遺物写真撮影は狭川が担当した。調査地の基準点測量は、世界測地系2000を利用した。
5. 出土瓦に付着した赤色顔料の分析は、東京文化財研究所の北野信彦氏にお願いし、木製品の樹種同定は木沢直子（木器保存研究室）が担当した。
6. 本書の執筆は、4（1）を北野氏、4（2）を木沢が担当し、SK001出土土器組成の部分を佐藤亜聖が行ったほかは狭川が行い、編集も狭川が担当した。

目　次

1. 調査に至る経緯と調査体制
   （1）調査経緯 ―― 1
   （2）調査体制 ―― 1

2. 調査地点周辺の調査 ―― 3

3. 調査の成果
   （1）層序 ―― 4
   （2）検出遺構 ―― 4
   （3）出土遺物 ―― 22

4. 自然科学分析
   （1）平城京右京一条三坊一坪出土瓦に付着した赤色顔料の調査 ―― 62
   （2）平城京右京一条三坊一坪出土木製品の樹種同定 ―― 69

5. 総　括 ―― 75

1. 調査に至る経緯と調査体制

（1）調査経緯

平成18（2006）年9月、株式会社生和ホームズ（代表取締役黒田順一）から、奈良県教育委員会教育長あてに、（仮称）西大寺本町マンション計画に係る埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当該地は喪儀寮推定地にあたり、西大寺の寺地にも接することから、事前の発掘調査が必要と判断された。

同年11月に奈良県教育委員会、奈良市教育委員会及び（財）元興寺文化財研究所で協議を行い、当研究所が受託することでまとまった。その後、株式会社生和ホームズ（以下原因者）が発掘調査にかかる費用を負担することで合意し、契約を締結した後、調査を開始した。

同時に、調査に係る重機等の機器や機材類及び発掘作業員の手配についても原因者が準備を行い、平成18年11月20日付教文第1174号の通知に基づいて11月27日から調査に着手し、平成19年3月23日に終了した。調査終了後、遺物整理・報告書作成に関して別途原因者と当研究所が契約を締結し、速やかに作業を開始した。

発掘調査及び遺物整理・報告書作成については、原因者の全面的な支援や協力があり、順調に進めることができた。また奈良県教育委員会、奈良市教育委員会の適切なご指導を賜り、無事に終了することができた。関係各位に感謝する次第である。

（2）調査体制

発掘調査並びに整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

調査指導：奈良県教育委員会・奈良市教育委員会

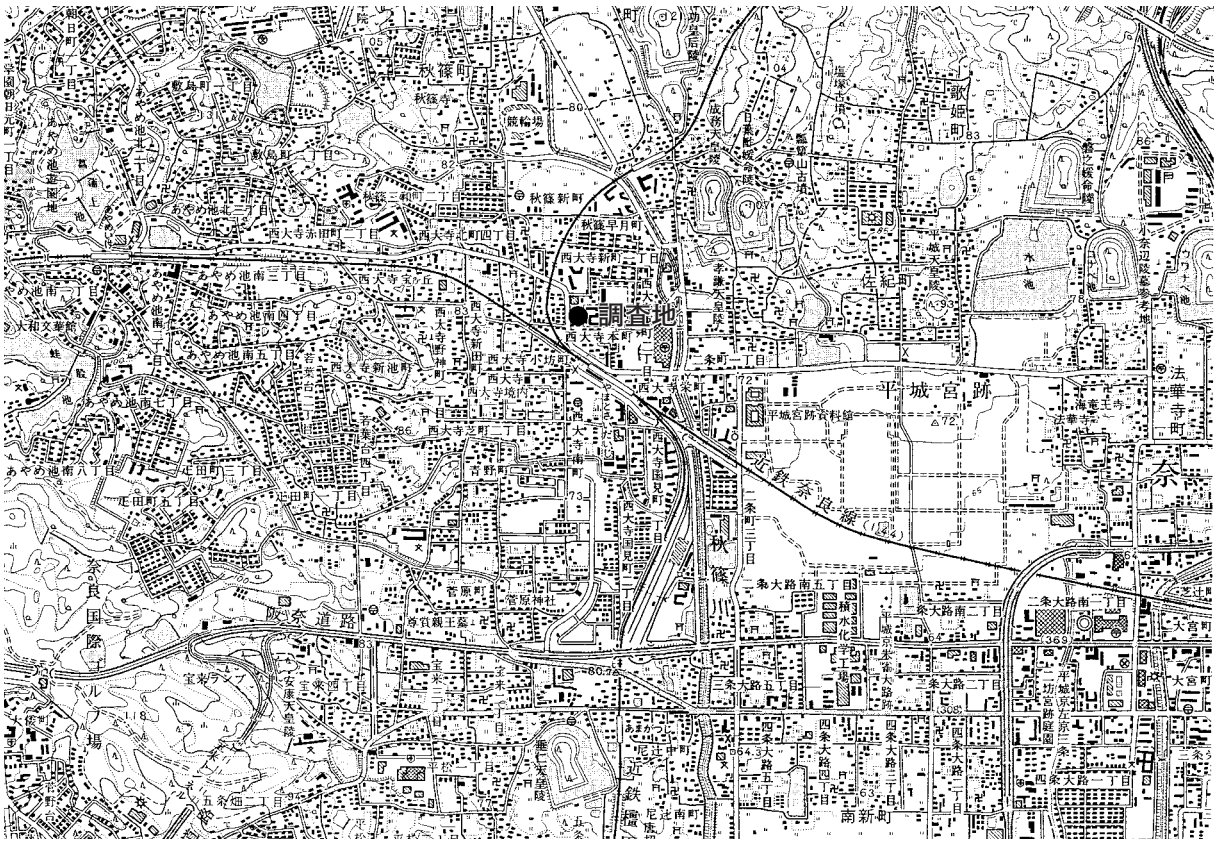


Fig.1　調査地点位置図（1／30,000）

調査主体：財団法人元興寺文化財研究所

理 事 長　　辻村　泰善

所　　長　　坪井　清足

事務局長　　奥洞　二郎

研究部長　　狭川　真一

人文考古学研究室（考古担当）

室　　長　　伊藤　健司

主任研究員　角南聡一郎　佐藤　亜聖

研　究　員　藤井　章徳

主任技師　　岡本　広義

現地作業員：有限会社ワーク

調査・整理補助員：武田浩子・仲井光代・神　明美・佐伯公子・奥田智代（人文考古学研究室）

福山博章・西口智彦・新田いくみ・榊　真麻（以上奈良大学）

発掘調査並びに整理・報告書作成に際し、次の方々からご指導、ご助言をいただいた。記して感謝申し上げます。（敬称略）

田辺征夫、井上和人、浅野啓介、大林　潤、金井　健、神野　恵、馬場　基、山本　崇、渡辺晃宏（奈良文化財研究所）、西藤清秀（奈良県教育委員会）、西崎卓也・篠原豊一・武田和哉（奈良市教育委員会）

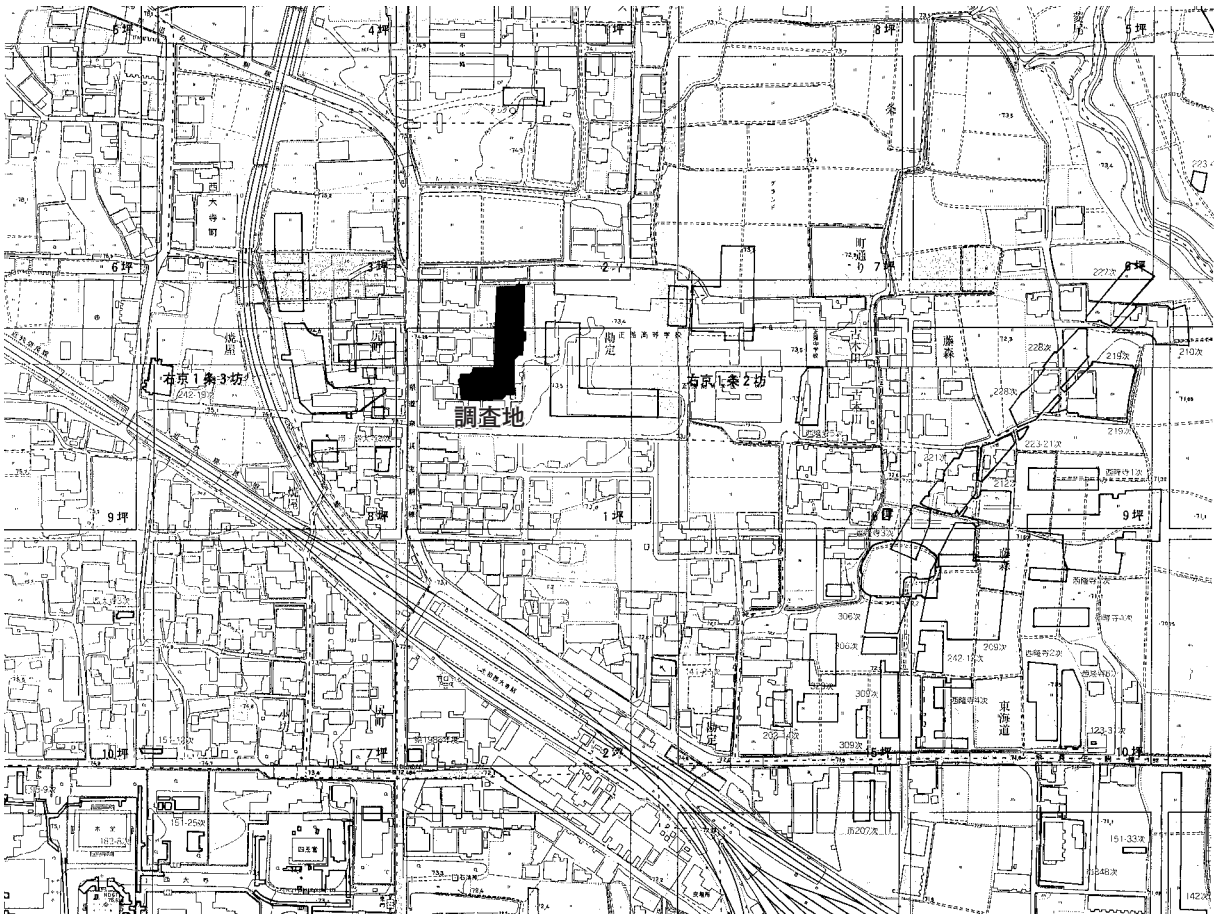


Fig.2　調査地周辺の調査状況（1／4,000）

奈良文化財研究所編『平城京条坊総合地図』2003年の「山陵」「西大寺」に加筆

2. 調査地点周辺の調査

今次の調査地点周辺は、近鉄大和西大寺駅北口近接地ということもあって早くから住宅地として利用されていたが、近年の建物の高層化に伴って工事着手前に発掘調査を実施する事例が急増している地点である。以下に近接する主要な調査成果を紹介することで、今次の調査地における課題を明らかにしたい。

当調査地の東側隣接地は、平成15（2003）年度に当研究所が調査を担当し、条坊関連遺構として、一条北大路（南北両側溝）、西二坊大路（東西両側溝）を確認し、いずれも両側の側溝を検出できたことから、その位置と規模を確認することができた。また、西二坊大路の北側延長線上にも小さいながらトレンチを設定することができ、そこでは側溝の延長部分が確認できず、一条北大路以北には延長されていなかった可能性が指摘できた。西隆寺関係の遺構は、位置から認識して北西隅部分に該当するが、土坑や溝を確認したほか、瓦溜まり出土の瓦の整理から築地に使用されていた瓦群である可能性を指摘でき、軒先瓦を使用していなかったことも確認できた。

また、この調査の2区（西側調査区）は平城京右京一条三坊一坪に該当しており、今次の調査と同じ坪内を調査したこととなる。その範囲には掘立柱建物をはじめいくつかの遺構が確認されているが、大きな撹乱があって情報が少なかったのは残念である。

当調査地から現行道路を挟んだ西側では、平成18（2006）年度に奈良文化財研究所が実施した成果が注目される（奈文研平城第404・410・415次調査）。当該地は、右京一条三坊八坪および右京北辺三坊三坪に該当し、前者は西大寺食堂院跡推定地に該当する。調査の結果、食堂の北側に存在した建物を確認することができ、『西大寺資財流記帳』（以下、『資財帳』）を参考にすると、南から「殿」、「軒廊」、「大炊殿」、「甲双倉」が主軸を同じくして配置され、「殿」と「大炊殿」の間には、大規模な井戸跡が確認された。また、条坊関係遺構では、一条北大路南側溝が検出された。この溝は、当研究所が確認した一条北大路南側溝の心より約3m北に位置しており、西三坊坊間東小路を境に規模が異なっている可能性が出てきた。

さらに、このすぐ東側を奈良市教育委員会が平成15年度に調査を行い（市15次調査）、南北方向の凝灰岩列を確認し、その東側に東西4列、南北13列以上の埋甕遺構が検出された。これらの遺構は奈良文化財研究所の調査でもその延長が確認され、南北28.5m以上となり、南北20列以上、総数80基以上の甕が整然と並んでいたと考えられている。西側の凝灰岩列と合わせて、『資財帳』記載の「東檜皮厨」が最有力候補だが、疑問点も指摘されている。

以上のように現行道路の西側は、古代においては西大寺の主要伽藍内であったことは明らかである。このことで今次の調査地が、西大寺とどのような関係にあるのかを明らかにすることが重要となってくる。平成15年度の調査では、前記したようにその性格を考えるだけの材料を提供できておらず、右京一条三坊一坪の地が『資財帳』にみえる寺の東北角に該当し、喪儀寮として認識できるのかどうか、この課題が調査前に課せられた最も大きなものであると言えよう。

（参考文献）

大林潤ほか　2007『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』奈良文化財研究所

武田和哉　2006「平城京跡（右京一条三坊八坪）・西大寺旧境内（食堂院跡推定地）の調査　第15次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成15年度』奈良市教育委員会

佐藤亜聖ほか　2005『平城京右京北辺』（財）元興寺文化財研究所

3. 調査の成果

（1）層序

調査前の現況は宅地として利用されておりまずその折の盛土整地があり、その直下には水田時の耕作土と床土が検出された。それを除去するとわずかに茶褐色土層が観察され、それが遺構面上に被る包含層と認識されたが、南半部分ではほとんど存在せず、北半部分でも明確に認識される部分は少なかった。

また北半部分では地山と認識される黄灰色粘土の上に、厚さ約15cmの整地層（淡茶色土層）が存在しており、中世を主体とする遺構は、この整地層の上面から切り込んでいた。ただし、南に移行するにしたがい薄くなり、素掘り小溝が顕著になるあたり（座標値：X=-144,637.0付近以南）では認識されなくなり、南半部分の調査区には確認されなかった。また、北半部分の最北部（座標値：X=-144,618.0付近以北）でも認識できなかった。

調査前の現状では同一平面の土地であったが、その直前の水田時にはこの南半部分は一段低い土地となっており、水田造成時もしくはそれ以前に何らかの削平を受けていることにより、残存しなかったものと考えている。しかも、この南半部分では中世に帰属する遺構（素掘り小溝）もほとんど検出されず、一部、深い遺構のみが若干確認されるにとどまったことも、このことの理解を助けている。

なお、古代の遺構は地山と認識した黄灰色粘土層の上面からすべて切り込んでいた。

（2）検出遺構

上記したように調査区の北半部分は2面の遺構面を調査したが、南半部分では1面であった。以下に上層遺構と下層遺構とにわけて報告することとする。なお、南半部分の南壁に近接して現代の貝殻を多量に包含する巨大な土坑（SK500）を検出した。上層遺構の報告に先立って紹介しておく。

土坑

SK500（Fig.3）　調査区南辺で確認した2基の大きな土坑で、撹乱と認識して重機で掘削したため、東西に並んで切り合っていたと見られるが、前後関係は未確認。掘削後の規模は、東西8.5m、南北5.0m以上、深さ1.0mである。この遺構は、現地表面のアスファルト及びその下位の表土層を除去する過程で見出された。埋土はすべて貝殻で構成され、貝殻どうしの隙間には未だ土砂の進入はほとんどなく、埋没からそれほど時間を経ていないことが知られる。

出土遺物（写真1・2）はすべて類似の貝殻で、ほぼ全点に直径1.0㎝前後で円形の穴が穿たれていた。穴は単独で穿たれるものや、連続して穿たれるものなど様々で、中には加工途中で断念したものも含まれている。近年まで行なわれていた貝釦作りに使用されたものと思われる。

貝の種類は、中国産の淡水性貝類群と考えられ、*Lamproutula* spp.が主体で、*Cuneopsis piscicuius*、

写真1・2　SK500出土貝殻

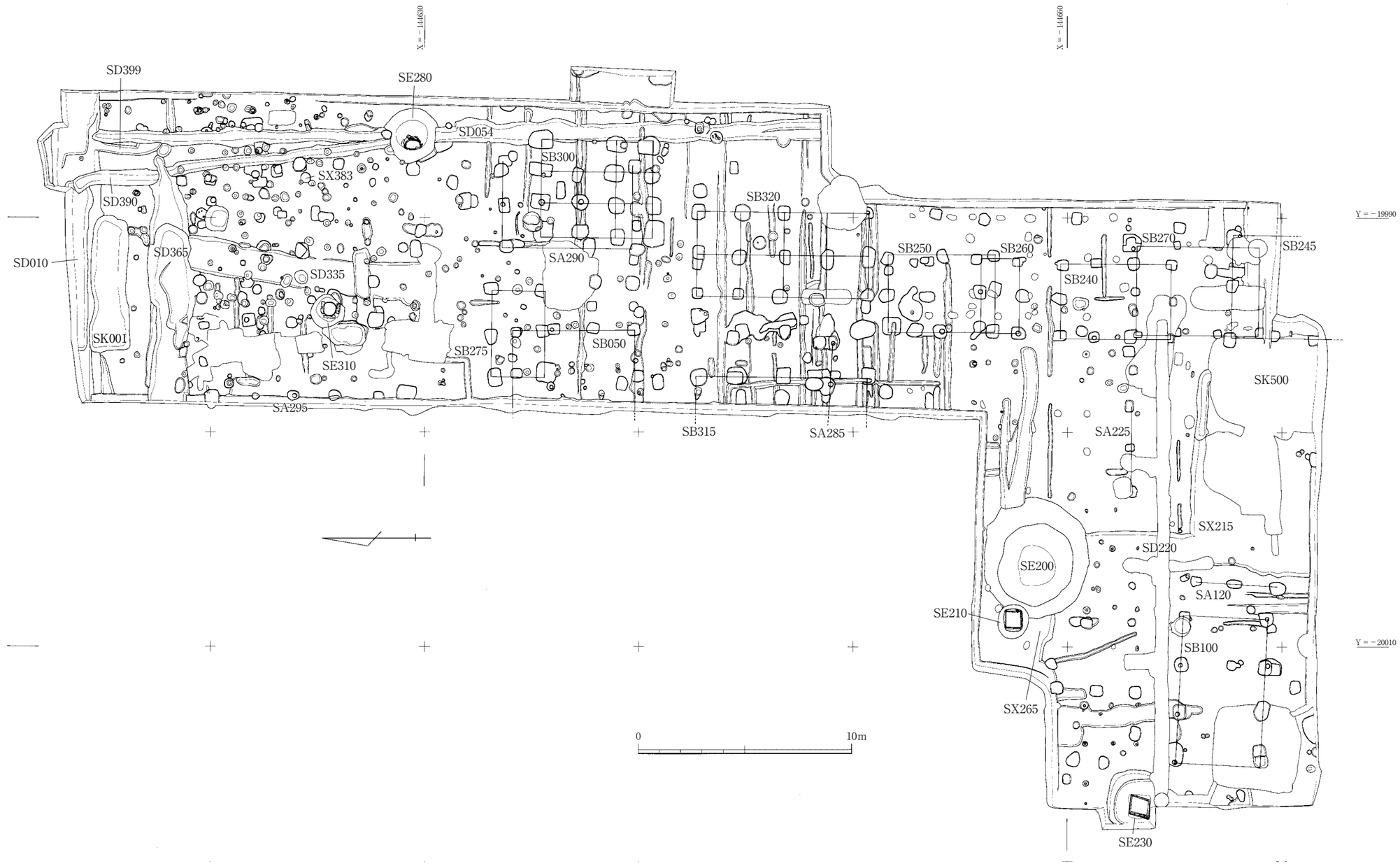


Fig.3　検出遺構配置図（1／200）

イシガイ*Unio douglasiae*、シジミ属*Corbicula* sp.などが含まれているとのことであり、日本での貝釦製作に、中国産の貝が輸入されていたことが知られる（貝類の鑑定所見は、奈良文化財研究所山崎健氏・豊橋市自然史博物館松岡啓二氏による）。

A）上層遺構

主として淡茶色土層とした整地土上面から切り込む遺構であるが、地点によっては出土遺物で認識したものもある。

掘立柱建物（掘方個別の数値情報は、付表参照）

SB075（Fig.4、Pla.2）　南北4間（8.05m）、東西1間（2.0m）以上の規模で、南北軸は、およそN-1°-W程度振れている。SB095・105と重複関係にあるが、柱穴同士は切りあっておらず前後関係は不明である。なお、SB095とは方位がわずかに異なるが規模は近似しており、どちらかの建物が建替えの可能性がある。また、SD002より古い。

SB090（Fig.4、Pla.2）　南北3間（5.75m）、東西2間（3.80m）の規模で、南北軸は、およそN-0°30′-W程度振れている。SB105と重複関係にあるが、柱穴同士は切りあっておらず前後関係は不明である。

SB095（Fig.4・5、Pla.2）　南北4間（7.65m）、東西1間（2.0m）以上の規模で、南北軸は、およそN-2°40′-W程度振れている。柱穴の規模は付表に示したとおりだが、柱穴a・c・gでは礎板が確認され、そのうちc・gは平瓦片を転用していた。また柱穴d・fでは、柱の根固めと思われる石及び瓦片が認識できた。なお、SB075・105と重複関係にあるが、柱穴同士は切りあっておらず前後関係は不明であるが、SB075とは方位がわずかに異なるが規模は近似しており、どちらかの建物が建替えの可能性がある。また、SD002より古い。

SB105（Fig.4・5、Pla.2）　南北2間（3.85m）、東西3間（6.55m）の規模で、南北軸は、およそN-0°30′-W程度振れている。柱穴d・g・iには礎板とみられる石及び平瓦片が確認された。SB075・090・095と重複関係にあるが、柱穴同士は切りあわず前後関係は不明である。

SB115（Fig.4、Pla.2）　今回検出した中

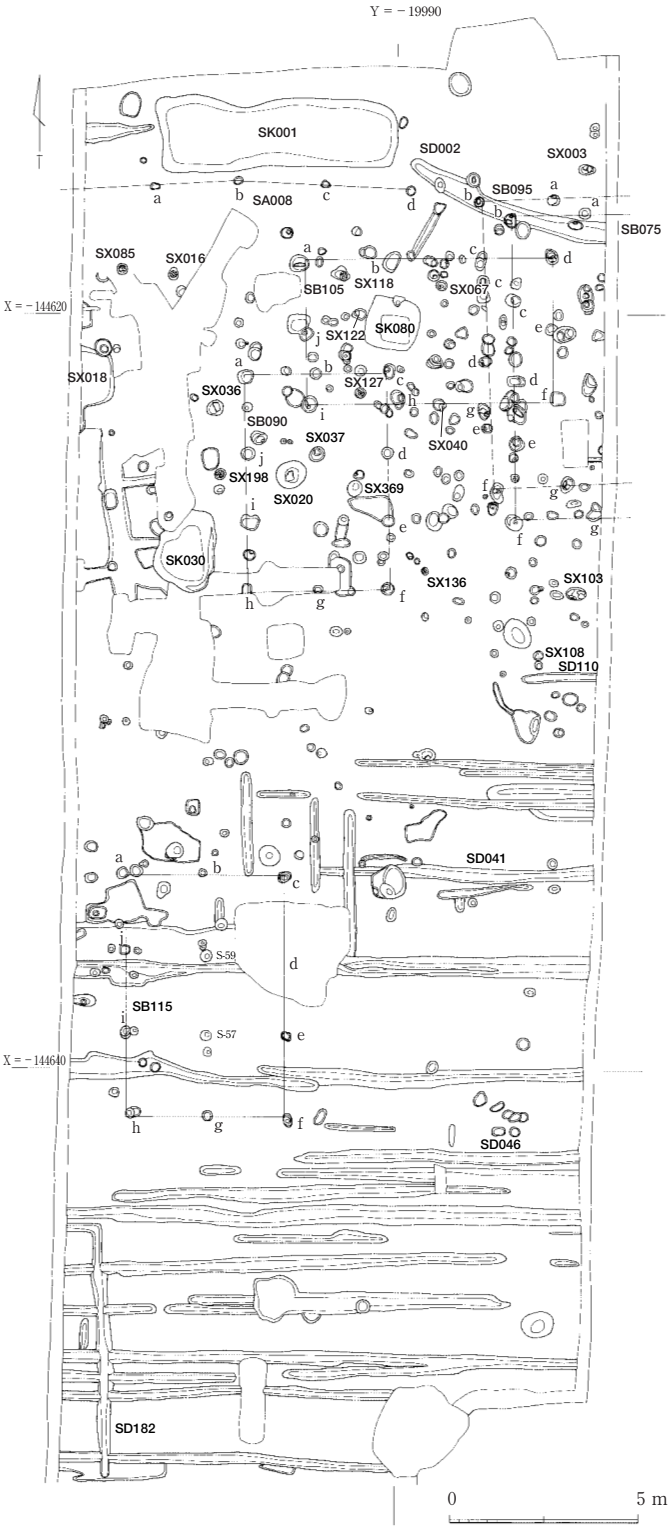


Fig.4　上層遺構配置図（1／200）

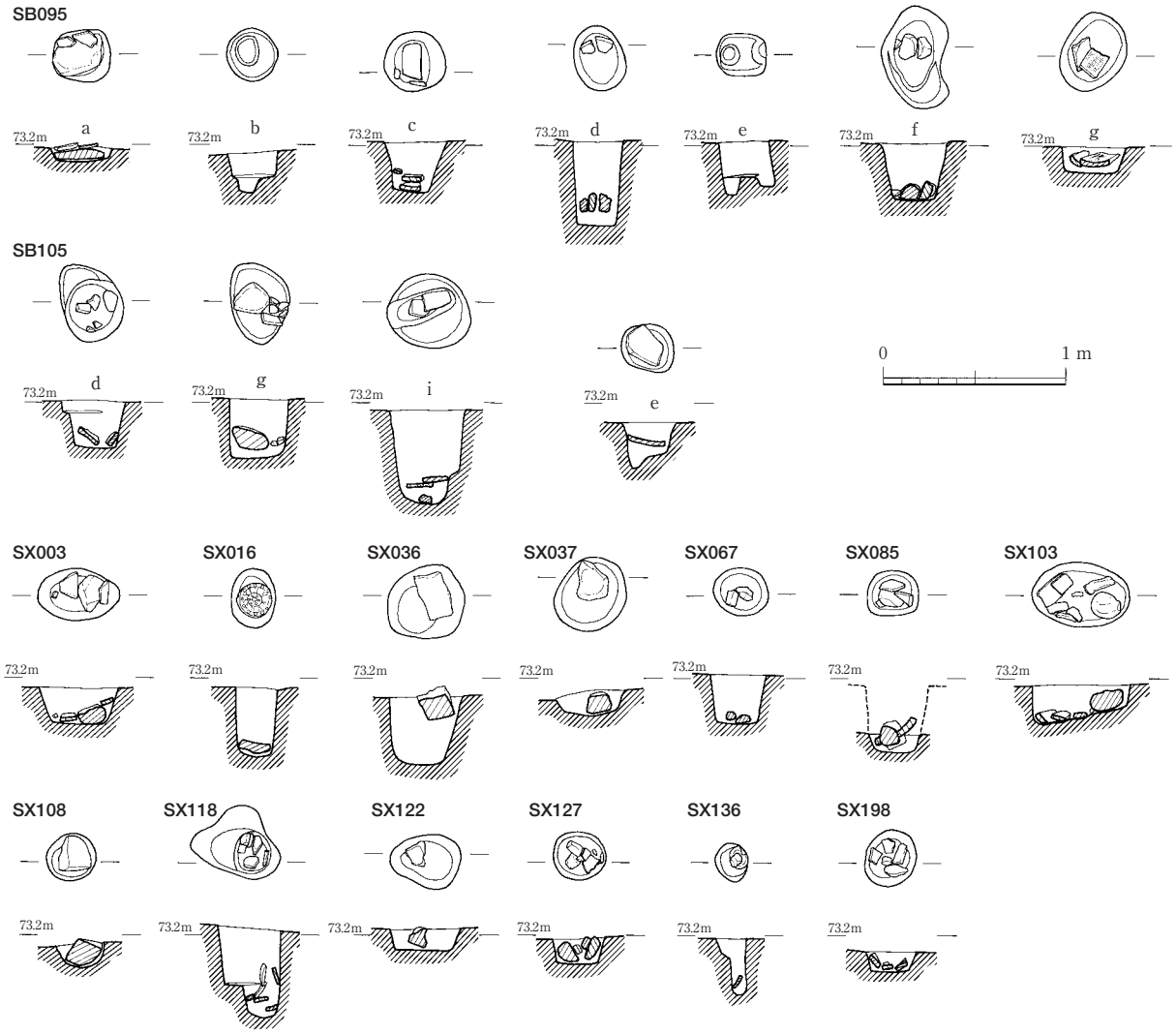


Fig.5　上層検出掘立柱建物主要柱穴等実測図（1／40）

世の建物のうち最も南に位置するもので、素掘り小溝がはじまる付近にある。柱穴こそ切り合わないが、小溝とは重複関係にあり、どちらかが新しい。規模は、南北3間（6.4m）、東西2間（4.2m）で、南北軸は、およそN-0°20′-W程度振れている。建物の中央に位置するピット2基（S-57・59）は、うまく柱筋に一致しており、総柱建物であった可能性も考えられる。なお、柱穴eには平瓦片を転用した礎板が確認された。

掘立柱列

SA008（Fig.4、Pla.2）　東西方向の小柱列で、3間（約6.8m）以上の規模を有するが、直線ではなく、簡素な板塀のようなものと考えられる。西側へ延長する可能性は否定できないが、東へはこれ以上延長しないものと思われる。

土坑

SK001（Fig.4・6、Pla.2）　東西6.25m、南北1.65～2.05m、深さ0.4～0.5mを測る隅丸長方形の土坑で、主軸はほぼ東西方向を向いており、近接するSA008とは切りあわず、並存していた可能性も考えられる。埋土は、土坑隅にわずかに堆積する明灰黄色粘土や灰色砂質土を除くと、大きく上下2層に分かれ、上層が茶灰色土、下層が暗灰色粘土層となり、遺物は下層に多く含まれていたが、一括して多量に投棄されたような状態は示していなかった。SD010を切っている。

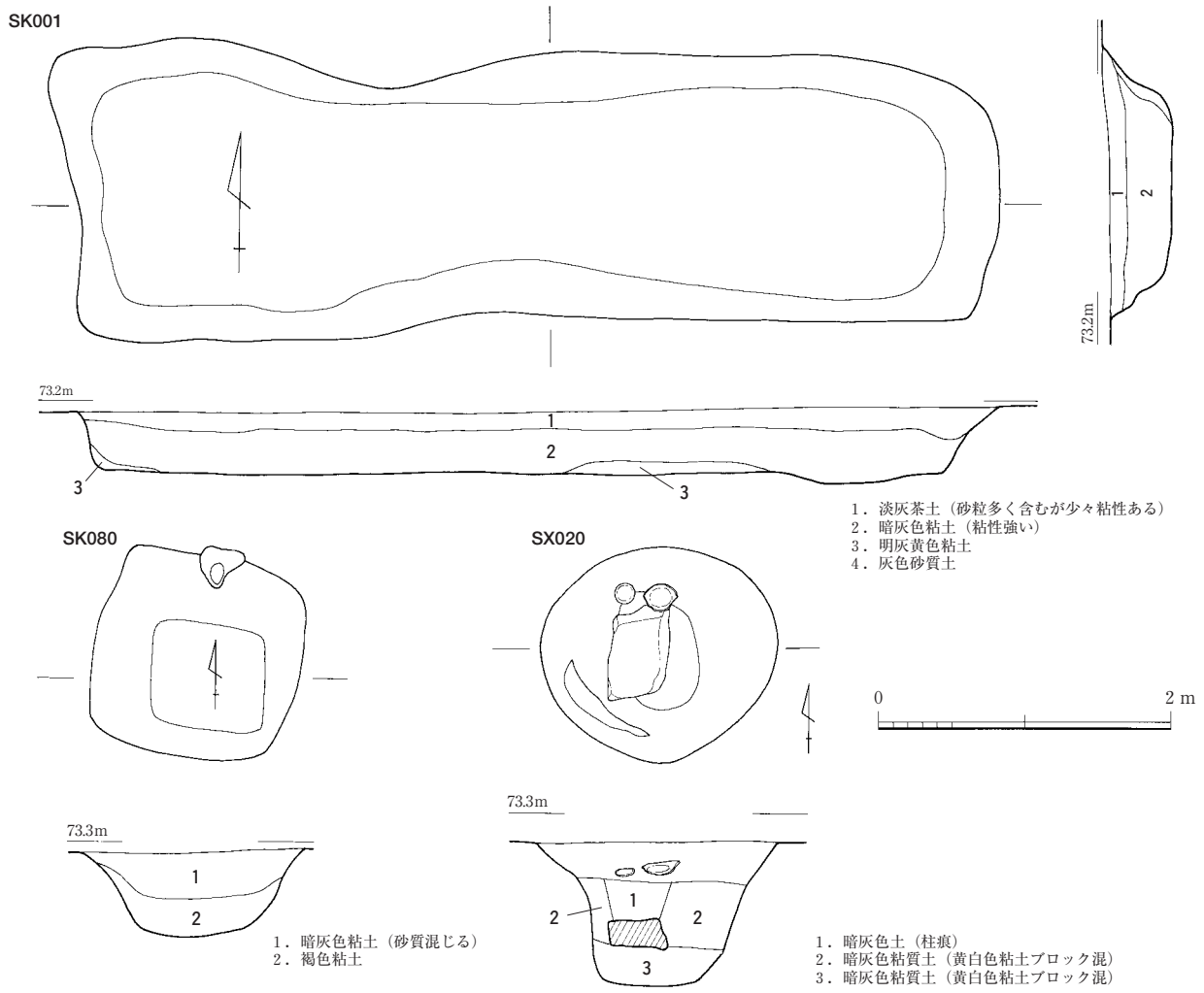


Fig.6　SK001・080・SX020実測図及び土層観察図（1／50）

SK030（Fig.4）　南北2.2m、東西1.6m、深さ0.4mで不整楕円形を呈する土坑である。周囲を撹乱されており本来の形状は明確ではない。埋土は粘性の強い黒灰色粘質土の単一層であった。

SK080（Fig.4・6）　東西1.45m、南北1.40m、深さ0.55mを測る隅丸方形の土坑である

溝

SD002（Fig.4）　調査区北東端で検出した小さく湾曲する小溝で、検出長5.6m、幅0.4～0.6m、深さ0.06mを測る。

SD041（Fig.4、Pla.3）　検出長7.3m、幅0.3m前後、深さ0.06m内外で東西方向の素掘り小溝である。これ以北の小溝は、調査区を東西に横断するものはなく、SB115を意識しているかのようである。

SD046（Fig.4、Pla.3）　検出長7.5m、幅0.3m前後、深さ0.08m内外で東西方向の素掘り小溝である。SD041以南にあるが、これも西側へは延びておらず、SB115との関係が注意される。なおこの溝以南は、東西方向の小溝の密度が高まる。

SD110（Fig.4、Pla.3）　検出長2.0m、幅0.25m前後、深さ0.1m以下で東西方向の素掘り小溝である。今回検出した小溝では最北端に位置する。SB115付近を除いて、建物や土坑といった遺構はこの付近以北に集中して検出されている。

SD182（Fig.4）　北半部調査区の南西隅あたりで検出した、L字形を呈する小溝である。東西方向は

0.9m分しか検出していないが、南北方向は9.8m分を確認した。幅は、0.25～0.35m前後で、深さは0.1～0.2mを測る。この遺構と重複する東西方向に走る小溝すべてに切られており、やや古く位置づけられる。

その他の遺構

SX003（Fig.4・5）　東西0.45m、南北0.3m、深さ0.2mを測る楕円形のピットで、底に石と平瓦片を置いて礎板としている。

SX016（Fig.4・5、Pla.4）　南北0.32m、東西0.25m、深さ0.38mを測る略円形のピットで、底に軒丸瓦の瓦当部分を礎板として置いていた。瓦当は文様面を上にし、やや東に傾斜する形で配置されていた。

SX018（Fig.4）　南北1.6m、東西0.9m以上、深さ0.2mの隅丸方形状を呈する浅い遺構。

SX020（Fig.4・6、Pla.3）　東西1.65m、南北1.45m、深さ1.0mで円形を呈する土坑状の遺構である。底から0.25m程度浮いた位置に0.6×0.4m、厚さ0.2mの方形状の石を据えている。石の上面はほぼ平坦で、その上に径0.3～0.45mの変色部分（暗灰色土）があり、それが柱痕とみられる。石の下位及び柱の周囲の埋土は暗灰色粘質土でほとんど変化はなく、底の位置を調整しながら、礎板となる石を置いたものとみられる。柱痕跡は上に至るほど大きくなっており、柱を抜き取った可能性が高い。また、埋土の上位で北に寄った位置に土師器皿3点が置かれていた。柱を据える段階での祭祀行為かと思われる。

SX036（Fig.4・5）　直径0.4m、深さ0.35mのほぼ円形を呈するピットで、埋土上位に一辺0.25m前後の石が検出された。柱の根固め用と推定している。

SX037（Fig.4・5）　直径0.4m、深さ0.15mのほぼ円形を呈するピットで、底に厚さ0.1mの石を置き、礎板としている。

SX040（Fig.4・7、Pla.4）　東西0.32m、南北0.35m、深さ0.1mの不整形なピットで、内部に土師器皿2枚と瓦器皿12枚の計14枚を埋納していた。皿は遺構底部に瓦器皿3枚を正位に置き（一部口縁部が重複する程度）、その上に瓦器皿4枚を互いに重なり合わないように配置。さらにその上に瓦器皿2枚を伏せた状態で、また土師器皿2枚を重ねた状態で正位に置いていた。この他、北東隅に瓦器皿1枚が立った状態で出土した。ただし、掘削開始直後に瓦器皿2枚を不注意にも取上げてしまったため、その2枚については原位置および向きが不明である。ただ、作業員からの聞き取りによって、平面実測図中の西側空白部分から出土したことは確認できた（向きは不明）。このことからやや大胆にその配置過程を推定復原すると、瓦器皿3枚を最下層に正位で置く（⑪・⑫・⑬）。その上にさらに正位で瓦器皿4枚（⑥・⑦・⑧・⑨）、さらにその上に伏せた状態で瓦器皿を4枚（③・④および不時取り上げ分／天地は推定）を置き、北端に寄せて土師器を重ねて置く（①・②で①が上）という状況ではなかったかと思われる。北東部に転落しているもの（⑤）は、土師器皿に被せられていた可能性を考えておきたい。

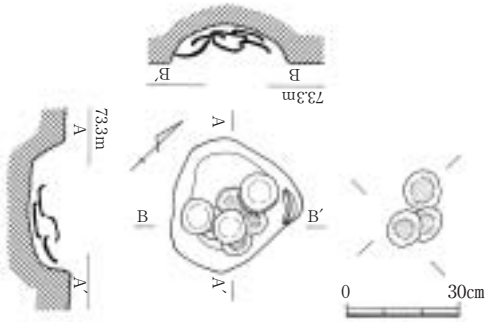


Fig.7　SX040遺物出土状況実測図（1／20）

SX067（Fig.4・5）　径0.25～0.30m、深さ0.25mを測る略円形のピットで、底に小石を2個置いており、礎板と考えられる。

SX085（Fig.4・5）　径0.25～0.30m、実測時の深さ0.1mを測る略円形のピットで、底に平瓦片と石を組み合わせて礎板としている。遺構の上半部を撹乱されており、少なくとも0.4m以上の深さはあったものと思われる。

SX103（Fig.4・5）　東西0.5m、南北0.35m、深さ0.2mを測る楕円形を呈するピットで、底の周囲に寄せるように石及び瓦片を並べていた。中央に空間ができるので根固め的なものかとも思われたが、すべて底に密着しており、礎板の可能性を考えたい。

SX108（Fig.4・5）　径0.25～0.28m、深さ0.15mを測るピットで、径にほど近い大きさの石を底に据え、礎板としている。

SX118（Fig.4・5）　東西0.5m、南北0.4m、深さ0.5mの不整形なピットで、東側が径0.25mほどの円形で深くなり、そこから平瓦片が出土した。瓦片は底に密着するものがなく、ピットの周囲に顕著にみられたため、柱の根固めに用いられたものと考えている。

SX122（Fig.4・5）　東西0.4m、南北0.3m、深さ0.1mの不定形なピットで、埋土中に0.1m大の石が認められた。出土位置から柱の根固めに用いられたかと思われる。

SX127（Fig.4・5）　直径0.3m、深さ0.15mでほぼ円形のピットである。遺構の中央にまとまって石が組まれており、礎板の役割を果したものと考えられる。

SX136（Fig.4・5）　直径0.2m前後、深さ0.3mの小ピットで、東側が直径0.1m程度の円形に深くなり、そこに平瓦片が埋まっていた。柱の根固め用かと思われる。

SX198（Fig.4・5）　直径0.3m、深さ0.1mの円形を呈するピットで、底に平瓦片を組み合わせて受皿のようにしており、礎板の役割を果したとみられる。

SX369（Fig.4）　直径約0.4m、深さ0.2mの略円形を呈するピットで、底に軒丸瓦の瓦当部分を敷いて礎板としていた。瓦は、記録取得以前に不注意で取り上げてしまったので、詳細な記録は無い。

B）下層遺構

掘立柱建物（掘方個別の数値情報は、付表参照）

SB050（Fig.10・11）　南北3間（5.7m）、東西1間（2.2m）以上で、南北軸は、およそN-1°-W程度振れている。柱掘方は、一辺0.4～0.6mの隅丸方形を呈し、aとしたもののみ直径0.2m弱の柱痕跡とみられる土層を確認した。SB275と重複しており、柱掘方cが、SB275柱掘方eを切っている。

SB100（Fig.8・11、Pla.5・6）　調査区南西隅に他の一群とは離れて存在する。東西3間（6.9m）、南北1間（4.0m）の東西棟で、東西の柱間平均2.3mに対して南北の柱間が異常に長い。現場で認識して精査したが検出できなかったので、これで成立するものとして報告した。建物の南北軸は、およそN-2°10′-E程度と大きく振れている。柱掘方は、一辺0.6～1.0m余りの不整長方形を呈し、状態の良いものは0.7～0.8mの深さを遺している。また、柱掘方a・b・c・eに柱根（径約0.3m）を残していた。樹種はいず

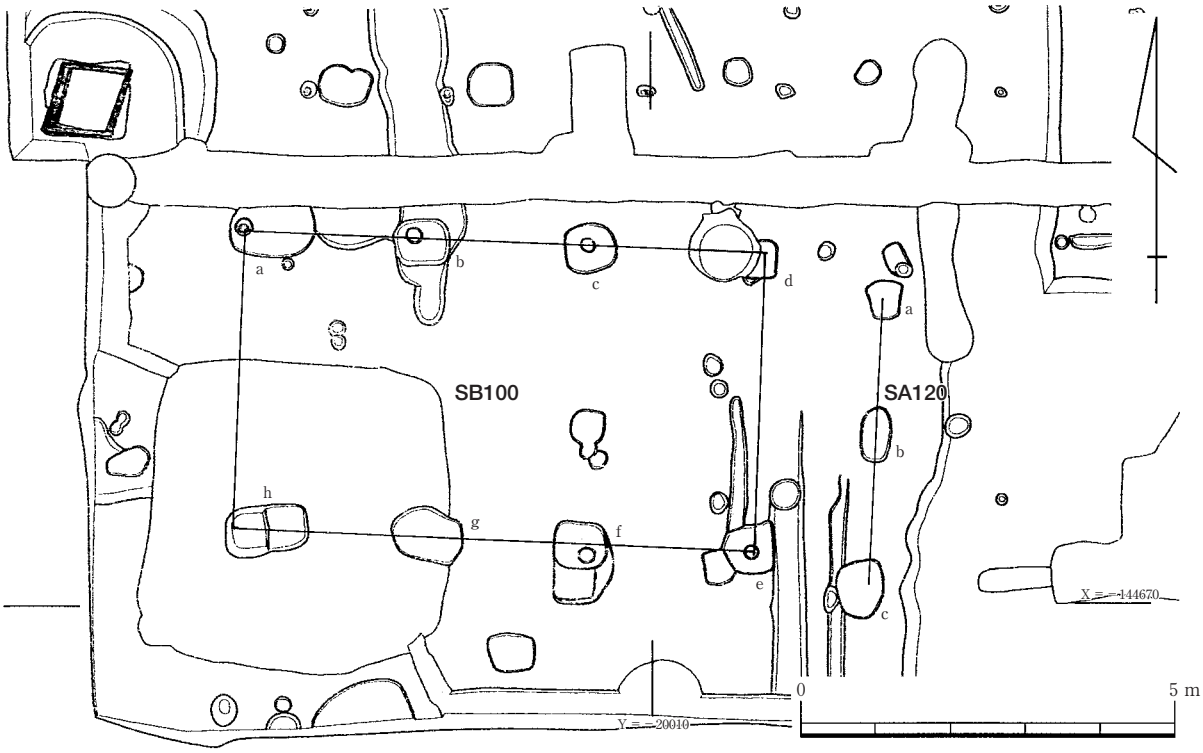


Fig.8　掘立柱建物実測図1（1／100）

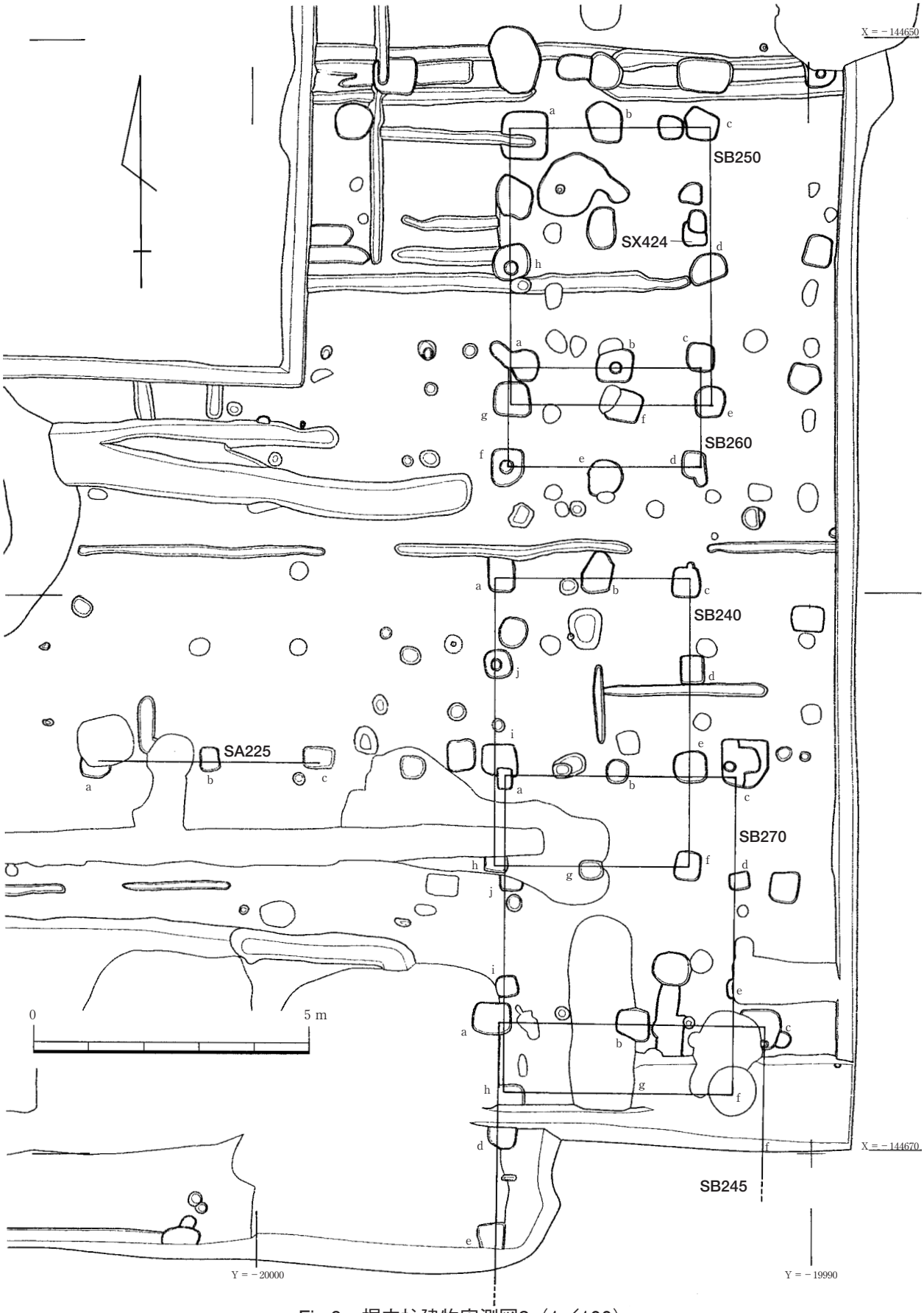


Fig.9　掘立柱建物実測図2（1／100）

れもヒノキであった（4章－(2）参照)。

SB240（Fig.9・11、Pla.7）　東西2間（3.5m)、南北3間（5.2m）の南北棟で、主軸はおよそN-1°30′-E程度振れている。柱掘方は、一辺0.4～0.5mの隅丸方形を呈し、dの底部付近に礎板とみられる板石が確認されたほか、i・jで直径0.15～0.2m程度の柱痕跡を確認できた。SB270と重複しており、柱掘方iが、SB270柱掘方aに切られていることから、SB270が新しい。

SB245（Fig.9・11、Pla.7）　東西2間（4.8m)、南北2間（4.0m）以上の南北棟とみられるが、南半部が調査区外にあり、東柱列の掘方fは撹乱により消滅し、調査区壁にその断面を確認できたのみである。主軸はおよそN-0°30′-E程度振れている。柱掘方で一辺の規模がほぼ正確に認識できたのは、調査区壁で確認した掘方fで、一辺0.7m、形状は概ね隅丸方形を呈していたとみられる。確認された掘方のすべてでいずれかの箇所が撹乱で失われており、当初の様相を伝えるものはない。SB270と重複しているが、柱掘方どうしの切りあいがなく、直接的な前後関係は明らかではない。ただ、SB240と西側の柱筋をほぼ揃えるように建てられていることから、SB240と共存していた可能性が考えられ、それが認められるならば、SB270を新しく捉えることができるだろう。

SB250（Fig.9・12、Pla.7）　東西2間（3.6m)、南北2間（5.0m）の南北棟で、南北の柱間のほうがかなり広い。主軸はおよそN-0°30′-E程度振れている。柱掘方は不整形な隅丸方形で、一辺0.6～0.8mを測り、a・c・d・g・hで直径0.15～0.2m程度の柱痕跡を確認できた。SB260と重複しているが、柱掘方に切り合いが見出せず、前後関係は不明である。

SB260（Fig.9・12、Pla.7）　東西2間（3.4m)、南北1間（1.8m）の小規模な東西棟で、南北軸はおよそN-1°20′-E程度振れている。柱掘方は一辺0.4～0.6mの不整形な隅丸方形で、深さは0.15～0.7mとかなりばらつきがある。

SB270（Fig.9・12、Pla.7）　東西2間（4.15m)、南北3間（5.75m）の南北棟で、主軸はおよそN-1°20′-E程度振れている。柱掘方は一辺0.25～0.4mほどの隅丸方形が主体で他より小さめである。ただ、柱掘方cは他のピットと切りあっており規模が不明瞭、f・gは撹乱により失われている。なお、前記と重複するが、SB240・245と重複しておりSB240掘方iを当該建物の掘方aが切っているので、こちらが新しい。

SB275（Fig.10・12）　東西2間（4.0m)、南北1間（2.5m）の小規模な東西棟で、南北軸はおよそN-1°50′-W程度振れている。柱掘方は一辺0.5～0.95mの不整形な隅丸方形である。SB050と重複し、柱掘方eがSB050柱掘方cに切られていることから、こちらが古い。

SB300（Fig.10・12、Pla.8）　東西3間（4.6m)、南北3間（5.2m）でやや南北に長い総柱建物と認識しているが、東側柱列の北から2番目（柱掘方hの位置）の柱穴が確認できなかった。また、gも別穴と捉え、3面庇の建物を想定して東側へ調査区を拡大したが、その可能性は否定された。したがって周辺の遺構の状況から、当初から東へは延びず、これで完結するものと考えたい。建物の主軸はおよそN-1°-E程度振れている。柱掘方は一辺0.6～0.9mの不整形な隅丸方形が主体で、明確な柱痕跡は見出せなかった。SA290と重複しているが、柱掘方に切り合いが生じておらず、前後関係は明確ではない。また、SD054を切っており、この建物が新しい。

SB315（Fig.10・13）　南北4間（8.0m)、東西規模は不詳の南北棟建物と考えている。柱列として捉えることも考えたが、隣接するSB320と柱筋が通っており、類似の規模の建物が並列している可能性も考え、ここでは建物として報告した。柱掘方は、一辺0.6～0.8mの不整な隅丸方形が主体で、主軸はおよそN-0°30′-E程度振れている。

なお、隣接するSB320との間にある掘方状の遺構SX294・482は、ほぼ両建物の中間に位置し、柱筋も揃っていると解釈できる範囲内にあることから、両建物を連絡する通路的な施設が存在したことも想定できよう。

SB320（Fig.10・13）　東西2間（3.95m)、南北4間（8.0m）の南北棟で、総柱建物と考えられる。柱掘方は、一辺0.5～1.0mの隅丸長方形が主体で、cでは直径0.2m余の柱痕跡を確認したほか、eでは柱の一

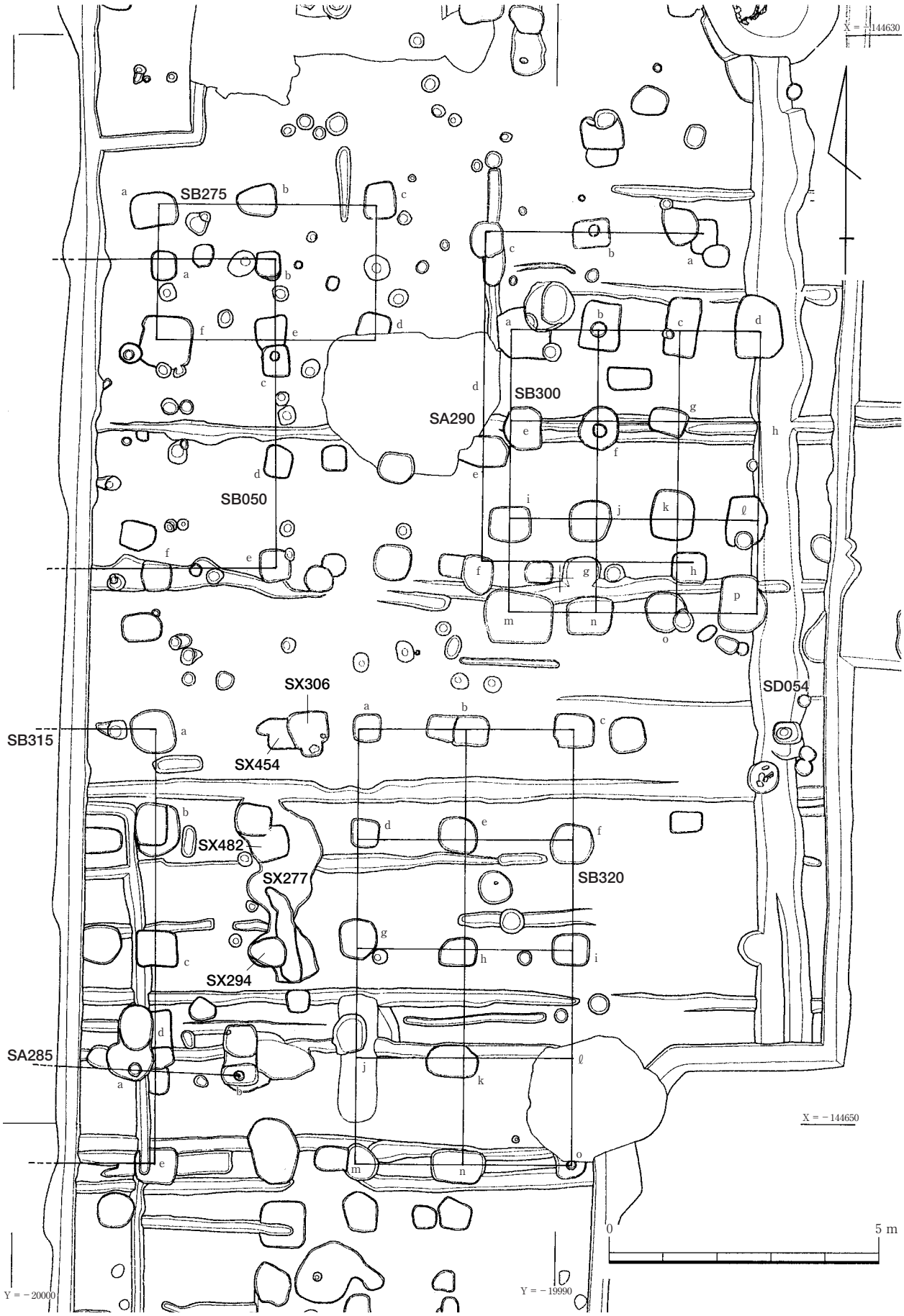


Fig.10　掘立柱建物実測図3（1／100）

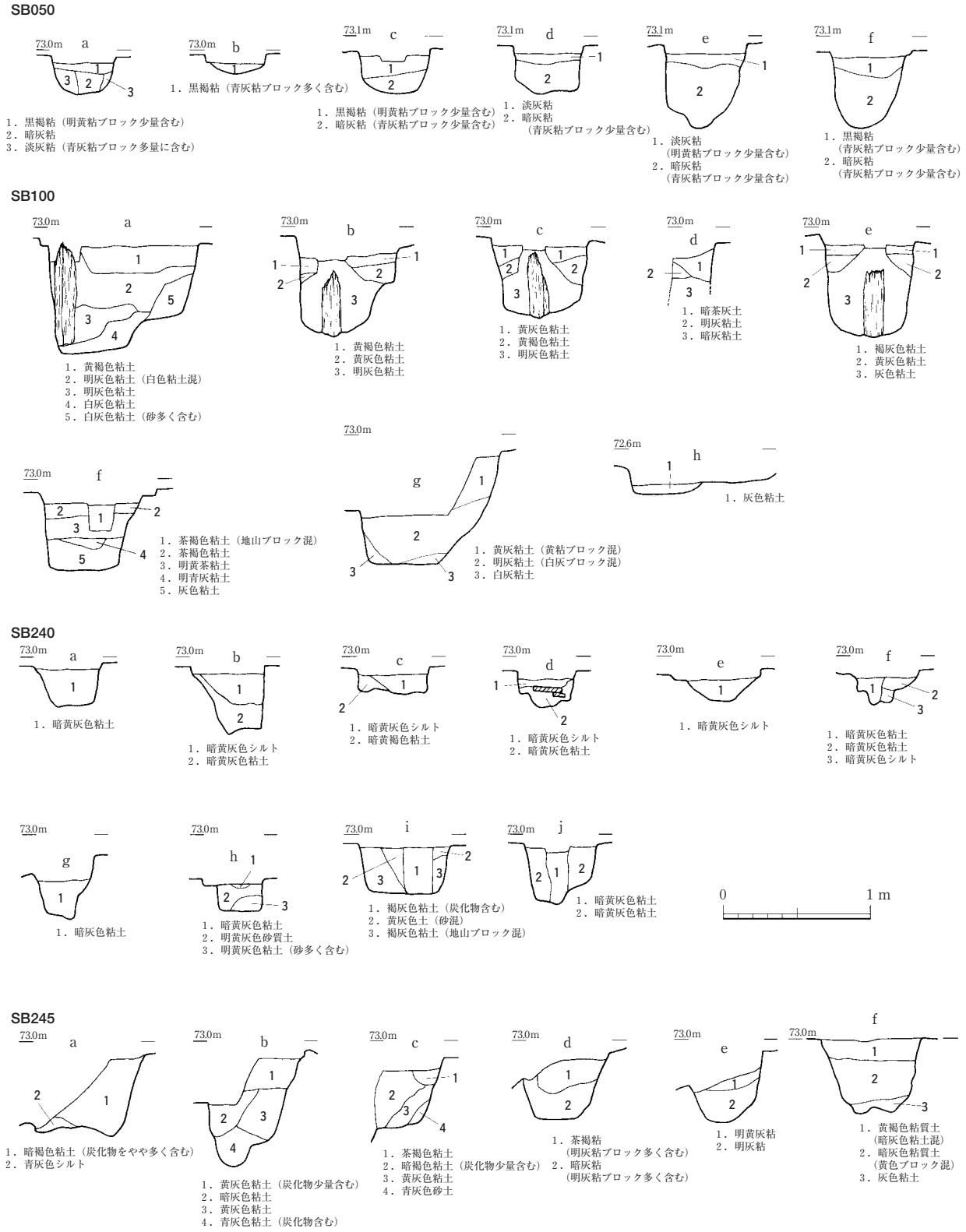


Fig.11　掘立柱建物柱掘方土層観察図1（1／40）

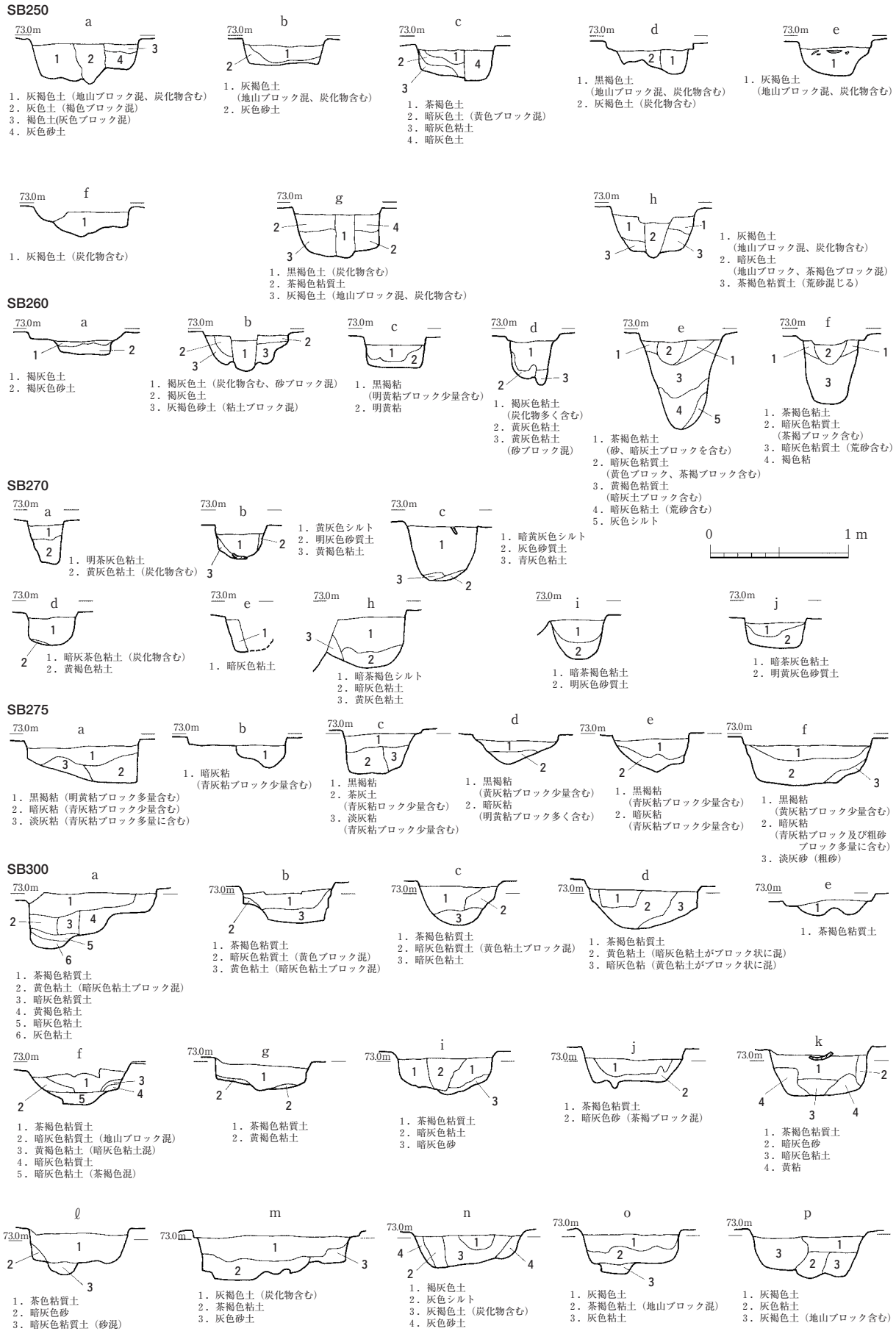


Fig.12　掘立柱建物柱掘方土層観察図2（1／40）

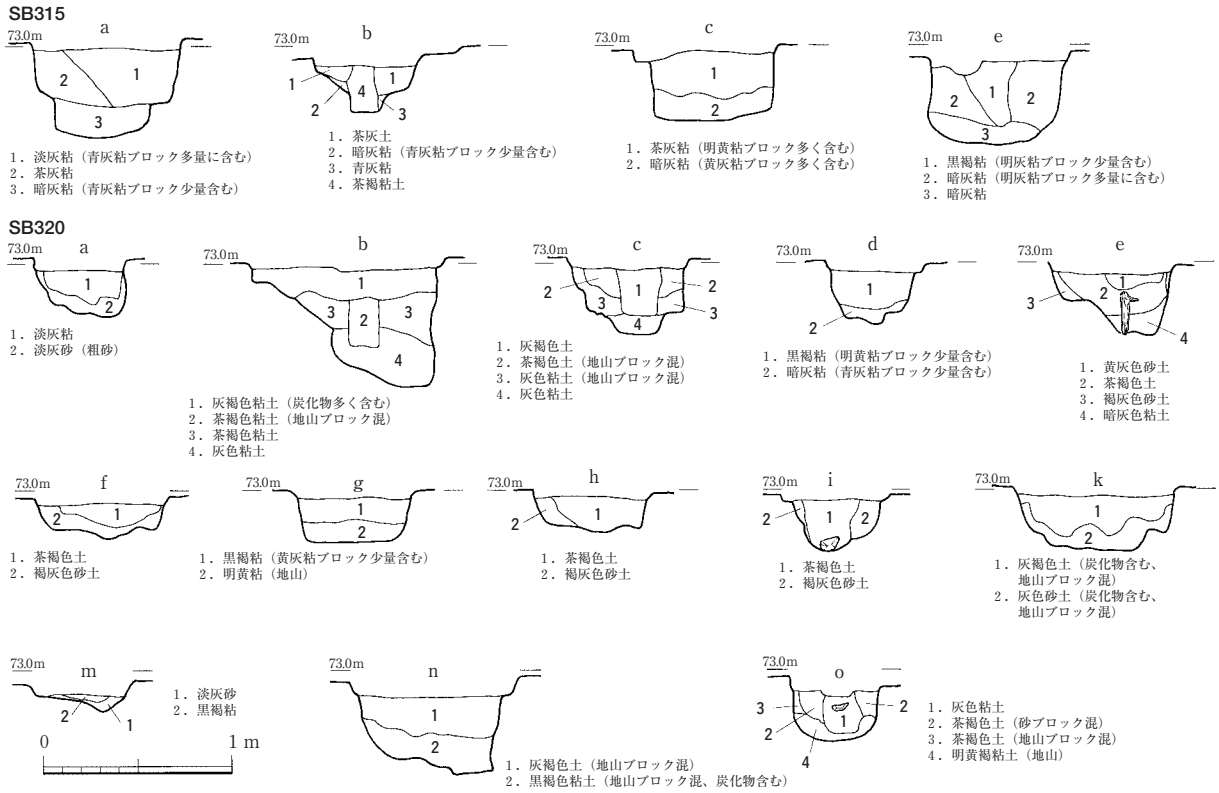


Fig.13　掘立柱建物柱掘方土層観察図3（1／40）

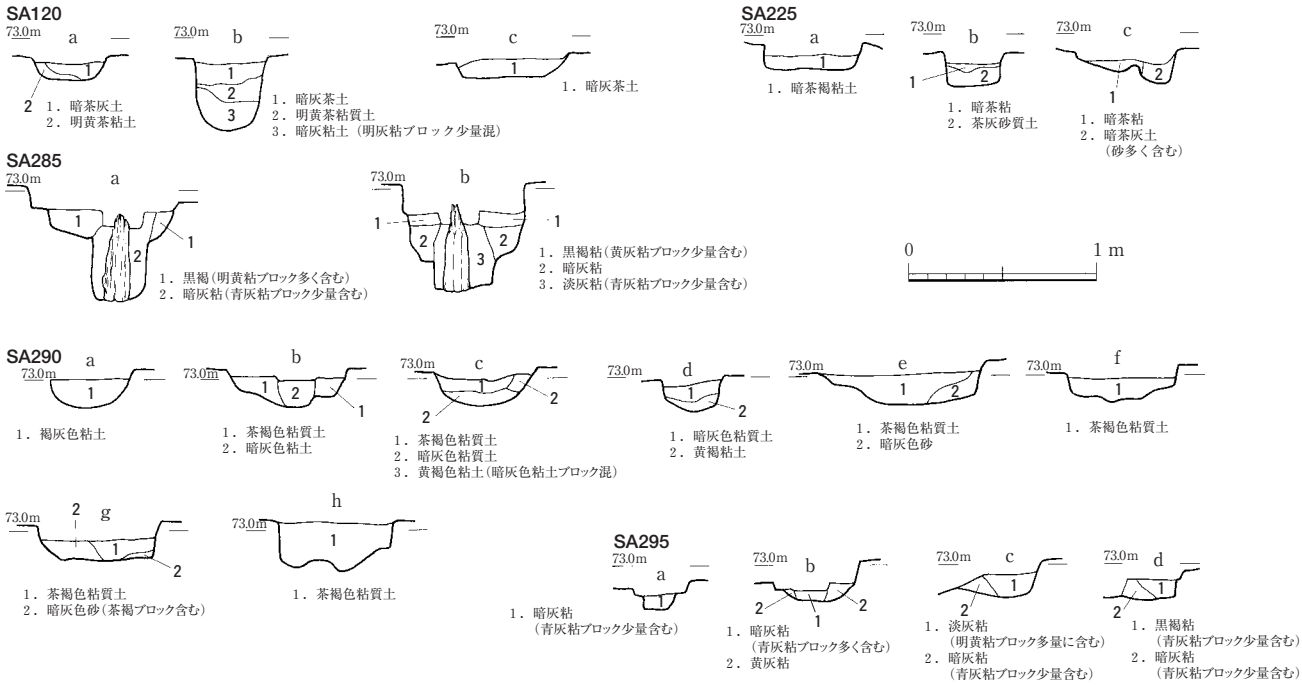


Fig.14　掘立柱柱列柱掘方土層観察図4（1／40）

部と思われる木片が残っていた。主軸はおよそN-0°30′-E程度振れている。柱掘方jとℓは撹乱によって失われている。

掘立柱列

SA120（Fig.8・14、Pla.5）　調査区南西隅で検出されたSB100の東側で、それに並行するように設置

された柱列である。南北2間（3.8m）で、主軸はおよそN-3°30′-E程度振れている。柱掘方は、一辺0.4～0.6mの不整長円形を呈している。

SA225（Fig.9・14）　東西2間（3.9m）で、主軸はおよそN-0°30′-E程度振れている。柱掘方は、一辺0.3～0.5mの隅丸長方形を呈している。

SA285（Fig.10・14、Pla.6）　東西1間（1.9m）で、主軸はおよそN-93°-E程度と大きく振れている。柱掘方は、一辺0.6～0.7mの不整長方形を呈しており、両者ともに径0.15m程度の柱根が残存していた。2本ともヒノキ材である（4章－(2）参照)。SB315と重複しており、柱掘方aがSB315掘方dと近接関係にあるが、別の遺構（S-288）に邪魔されて、切り合い関係は不明である。ただし、いずれの柱掘方もS-288より古い。

SA290（Fig.10・14、Pla.8）　東西2間（4.0m)、南北3間（6.2m）の南北棟建物と思われたが、東側に柱穴が確認されなかったため、逆コ字形を呈する柱列と判断した。柱掘方は、一辺0.3～0.8mで隅丸方形を呈している。西側柱列北から2番目が撹乱により失われている。SB300と一部分重複しているが、柱掘方に切り合いがなく、前後関係は不明である。なお、西側柱列で得られた振れは、およそN-0°30′-Eである。

SA295（Fig.3・14）　調査区の北西東端で検出したもので、西側へ延びる建物の可能性が強い。南北3間（5.9m）を確認し、柱掘方は略円形で、径0.3～0.5m程度と小規模であった。主軸はおよそN-0°40′-W程度振れている。

井戸

SE200（Fig.3・15、Pla.9）　調査区南半部北寄りで検出したもので、すでに井戸枠材はすべて抜き取られていた。掘方はほぼ円形を呈するもので、東西5.9m、南北5.2mを測る。深さは2.1m付近まで調査したが、危険なためそれ以上は中断した。掘方は、検出面から約0.5m付近で径3.6m程度まで小さくなり、底に向かうに従って徐々に狭くなる傾向があり、検出最下位では径1.45mであった。井戸内の堆積層は、枠が抜かれてから後に堆積したものと考えられ、数層認識しているものの歴史性を追及できるものではないと考えている。ただ、遺物は、最上層の茶灰色土から順に、暗褐色土、明灰色粘土、同下層として認識し取り上げている。

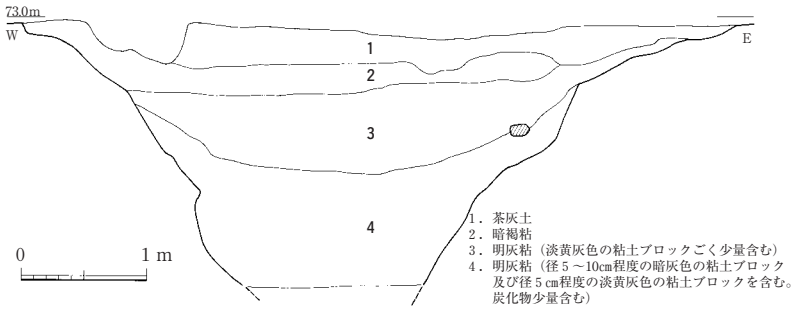


Fig.15　SE200堆積土層観察図（1／60）

なお、SE210・SD220に切られ、SX265を切っている。

SE210（Fig.3・16、Pla.9）　SE200の西端にあって、同遺構を切る井戸である。掘方は東西1.6m、南北1.45mの楕円形で、検出面から5～20cm付近で狭くなりやや胴張りのある一辺0.85mほどの隅丸方形となる。検出面からの深さは1.35mを測る（底の標高71.60m)。掘方内には木製の枠が残っており、その構造は、四隅に一辺8～10cmの角材を支柱として立て（長さ0.95m分が残存、支柱の心々間は0.75m前後)、それに横桟を上下2箇所（下部の1箇所のみ残存）通し、桟と掘方の間に幅6～17cm程度の板材を縦方向に数枚並べたものである。縦板の底部分はほぼ平坦に切り揃えられているが、隣合う板の底のレベルは一定でなく、おそらく当初の掘方の起伏に従って、接地したところのままで留まっているとみられる。また、縦板の長さはいずれも上半部が腐食しており、当初の規模は不明。

SE230（Fig.3・16、Pla.10）　調査区西端で検出されたもので、掘方は東西2.6m以上、南北2.0m以上を測り、胴張りのある隅丸方形を呈していたと推定される。検出面からの深さは2.35m（底の標高70.75m）で、掘方の西側に偏って、やや歪になった方形の枠が残存していた。枠は一辺0.9m前後で、一辺に対して幅0.2m前後、長さ1.85mほどの板材を4枚程度並べて構成し、背面にはその隙間を埋めるよう

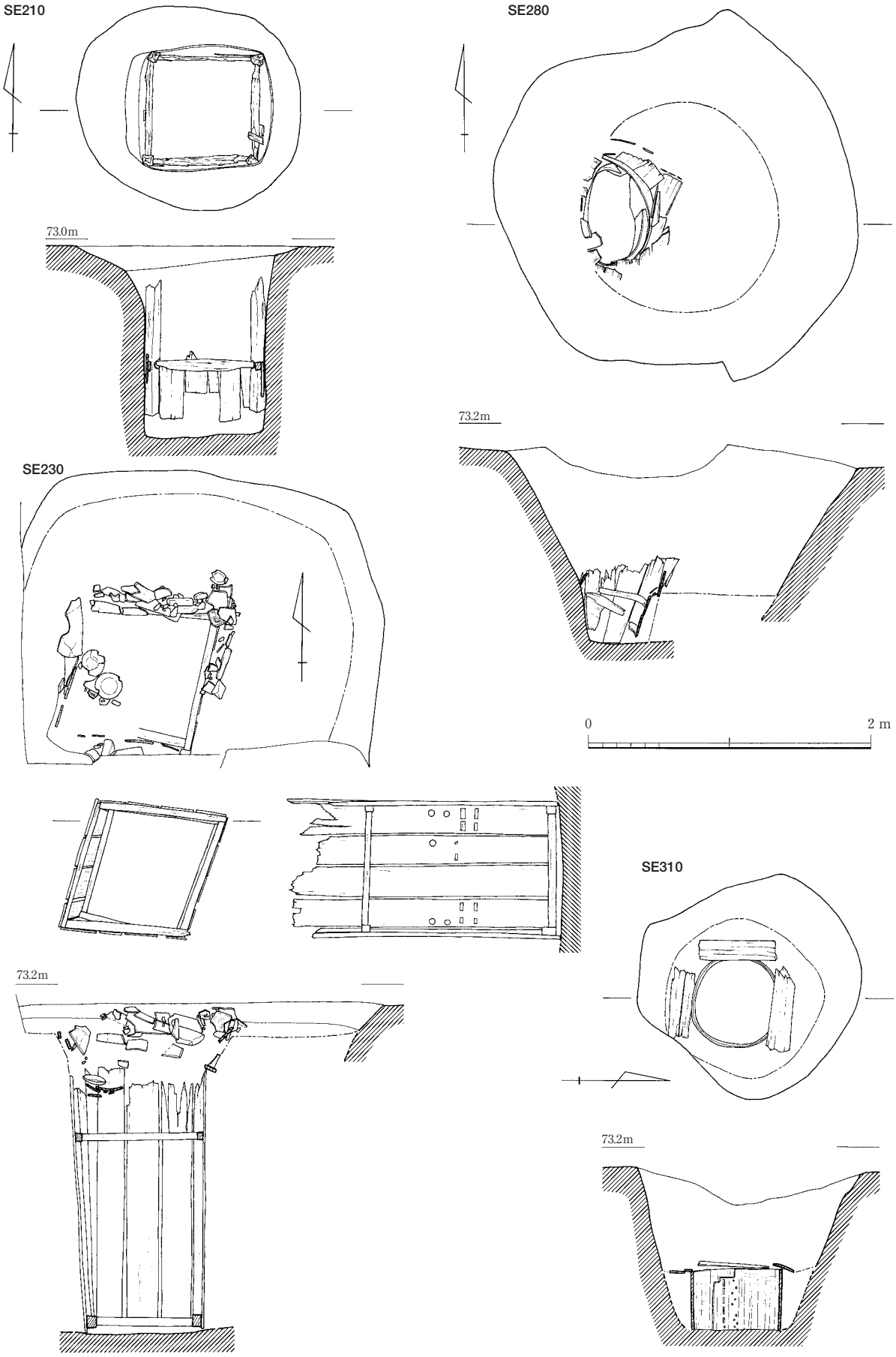


Fig.16　井戸実測図（1／40）

に類似の板材を置いている。また、底に接する位置と、底から1.3mの位置の2箇所に、一辺5㎝ほどの角材を組んで横桟としている。桟はホゾを切って組み立てられているが、板材とは接しているだけで、固定されていない。おそらく、裏込めからの土圧によって維持されていたものと推定される。

埋土の上位は、残念ながら周囲の撹乱の影響を受けて汚染変色する部分があり、検出面から20㎝以内の埋土は識別が難しい状態であった。ただ、瓦片が井戸の枠内に向かって傾斜するように置かれており、埋め戻しの最終段階で瓦等が入れらたのではないかと思われる。汚染がなければその外側は裏込め土と認識、分離できたであろう。枠内の埋土はほぼ暗灰色土で埋まっていたが、底から1.7mほどの位置で祭祀行為でも行なったのであろうか、土師器皿が2枚正位置で置かれており、うち１枚には底に「同法所」の墨書があった。また、埋土を掘り下げてゆく過程で散在的に須恵器小壷等が出土しており、何らかの祭祀行為を行いながら埋めていった可能性が考えられる。また、一部分のみ掘り下げた裏込め土からも頸部を欠損させた須恵器小壷が出土しており、井戸構築に際しても何らかの祭祀行為があった可能性が推定できる。なお、裏込め土は、枠材取り外し後に調査する予定であったが、遺憾ながら大きく崩落して調査不能となった。

SE280（Fig.3・16、Pla.11）　直径2.6mを測るほぼ正円形の掘方は、壁面の傾斜が大きく、底部付近では直径1.2m程度（推定）になっている。検出面から底までの深さは約1.4mである（底の標高71.65m）。枠材は、掘方底部の西側に偏って設置されており、しかも大きく変形していた。枠は底に直径0.7m前後の曲物を据え、それを取り囲むように10～15㎝幅の板材を並べたものである。板材はおそらく方形に配置されていたと思われるが、大きく変形しており、旧状は明らかにできない。板材下端は掘方底に接しており、曲物底と同レベルにある。なお、曲物埋土上端付近に口縁部を欠損した須恵器壷がほぼ正位置で出土しており、井戸埋めの際に祭祀行為が行なわれた可能性がある。

SE310（Fig.3・16、Pla.11）　直径1.6mの略円形を呈する掘方で、壁面は緩やかに傾斜して底に至る。深さは検出面から1.15m（底の標高71.90m）で、底部の直径は0.7m前後と推定される。枠は底部に直径0.7mの曲物を据え、その周囲を埋め立てた後、その上面（曲物の上端の位置）に長さ0.5～0.6m、幅約0.1mの板材を、現状で三辺に敷いている。西辺のみ2枚の板材で構成されていたが、各辺の板材どうしは接していない。これより上位の構造は不明である。なお、曲物の側面に墨書があり、文字は逆さになった状態で埋まっていたことから、曲物自体は転用品であろう。

溝

SD010（Fig.3・17、Pla.12）　調査区北辺で検出された東西溝で、右京一条北大路の南側溝と考えている。溝の幅1.8m、検出長14.5m、深さ0.25mを測り、断面形状は浅い盆状を呈している。埋土は数層認識したが、下半は粘性の強い地山の土を含んだ堆積土で構成され、上半は小砂粒を多量に含んだ淡灰茶色土であった。座標位置からみて、東側隣接地で調査した際に検出したSD10821の延長部分であることは確実である。

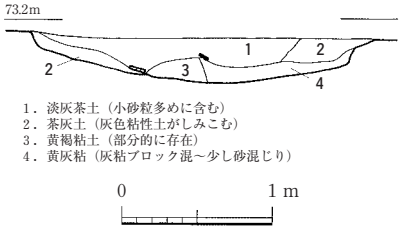


Fig.17　SD010土層観察図（1／50）

SD054（Fig.3、Pla.12）　調査区の東端を南北に貫通する溝で、検出長34.0m、幅0.5～1.2m、深さ0.1～0.25mを測る。溝心はおよそN-0°40′-W程度で、本坪内を東西に分割する坪割りの区画溝に該当すると考えられる（数値情報は付表参照）。SD010と切り合っており、こちらが古い。SD010完掘後、この遺構を完掘するまでには時間があったが、切り合う部分の埋土は崩落せず、調査時での観察から、SD010が機能していた段階でもこの遺構の埋土が崩落してSD010に流れ込んだような形跡はなかった（埋土は安定していた）。この所見から、SD010掘削時にはすでにSD054は埋まっていたことは確実だが、SD010の掘削までにはしばらくの時間差があったのではないかと考えている。

なお、SB300・SE280など多くの遺構に切られているが、SD390・399のみを切っている。

SD220（Fig.3）　検出長15.3m、幅1.1～1.3m、深さ5㎝前後を測る浅い南北溝である。埋土は、褐灰

色土の単一層で、SE200・SX215を切っている。上層遺構に位置づけられる可能性もあるが、素掘り小溝との前後関係は把握できず、埋土も小溝とは異なるので、ここで報告した。

SD335（Fig.3）　検出長8.1m、幅1.5m、深さ0.3mの南北溝で、溝心はおよそN-9°-E程度と大きく振れている。SD365と重複しているが、前後関係は明らかにできなかった。埋土も近似しており、最上層は同時に埋没した可能性がある。なお、南端は撹乱によって破壊されたところで終わっており、溝端部の様相は不明である。

SD365（Fig.3、Pla.12）　検出時は東西長12.2mを測ったが、東端はごく浅くなり、埋土の一部がSD054に被った付近で終わっていた。完掘後の明瞭な遺構部分の規模は、長さ10.5m、最大幅2.0m、深さ0.47mとかなりしっかりしたもので、埋土は暗褐色土の単純なものである。SD010と並行して存在しており、両溝の心々間は約4.5m、SD010南肩と本溝北肩間は約2.5mで、両溝の間に同時期の遺構は存在していない。

SD390（Fig.3）　検出長7.5m、幅0.2～0.4m、深さ0.15～0.2mの南北溝である。溝心はN-7°50′-W程度と大きく西に振れている。南端をSE280・SD054に、北端をSD010に切られている。SE280以南は確認できず、SD010底では確認でき、さらに北側へ延びている。埋土は茶白色砂の単一層であった。

SD399（Fig.3）　検出長3.0m、幅0.4m前後、深さ0.1m内外で、SD010・054に切られている。埋土は明茶色土で、SD054に似ている。

その他の遺構

SX215（Fig.3）　撹乱土坑SK500とSD220の隙間で見出された厚さ0.05m前後の堆積土層の広がりである。検出規模は東西7.5m、南北5.5mで、少なくとも南側へは広がるとみられる。

SX265（Fig.3）　SE200・210に切られた浅い溝状遺構で、幅2.2m、検出長2.0m、深さ5cm前後を測る。周辺の遺構のなかで最も古いが、性格は明らかでない。

SX277（Fig.10）　SB315・320の中間に位置する南北方向の蛇行する窪み状遺構で、長さ3.5m、最大幅1.5m、深さ0.05m前後を測る。SX294・482はこの埋土を除去した段階で検出された。

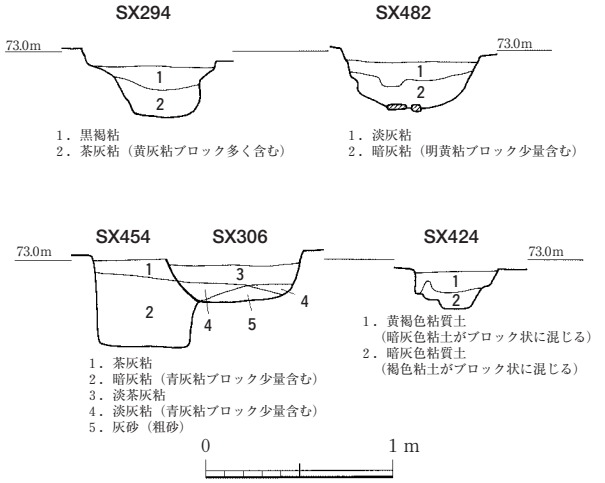


Fig.18　その他の遺構土層観察図（1／40）

SX294（Fig.10・18）　SB315・320に挟まれた位置にあり、一辺0.7m余りの不整形なピットである。SB315柱掘方cとSB320柱掘方gのほぼ中間に位置するため、関連性が考えられたので抽出した。

SX306（Fig.10・18）　一辺0.7m前後、深さ0.25mの不整形なピットで、埋土中から須恵器蓋が出土した。SX454を切っている。

SX383（Fig.3）　一辺0.5mで隅丸方形のピットで、埋土中から軒丸瓦片が出土した。礎板への転用品ではない。

SX424（Fig.9・18）　SB250に近接するピットだが、建物とは無関係であろう。一辺0.45m、深さ0.2mを測る。埋土中から須恵器杯を転用した硯が出土した。

SX454（Fig.10・18）　SX306に切られたピットで、SB315・320の北辺の柱筋にほぼ揃った位置にあり、南側にあるSX294・482と関連する可能性もあるが、ややSB320側（東側）に寄っているため、積極的に両側の建物や南側のピットとの関連を評価しにくい。

SX482（Fig.10・18）　SB315・320に挟まれた位置にあり、一辺0.75m余りのいびつな隅丸方形を呈するピットである。SB315柱掘方bとSB320柱掘方dのほぼ中間に位置するため、関連性が考えられたので報告した。

（3）出土遺物

A-1）上層遺構出土土器・陶磁器

SB115出土土器（Fig.19）

緑釉陶器

椀（1）　削り出しの高台は、径8.0㎝。体部外面下半はヘラケズリ、他はヨコナデである。見込みに直径7.8㎝の沈線が巡る。釉は高台内側では疎らだが、体部は内外ともに全面に施され、濃緑灰色に発色し、鈍い光沢がある。胎土は暗灰色で硬質、褐色及び暗褐色の粒子を若干含んでいる。

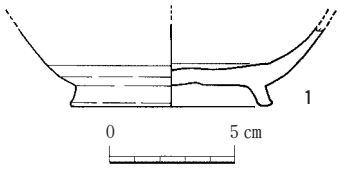


Fig.19　SB115出土土器実測図（1／3）

SK001茶灰色土層出土土器（Fig.20）

土師器

小皿（1・2）　口径8.8・9.6㎝、器高1.4・1.3㎝を測る。外面は押圧によって成形する。

瓦器

椀（3・4）　口径13.3・13.9㎝、器高3.9・4.3㎝、高台径5.2・4.3㎝を測る。口縁端部内側は浅い沈線状を呈し、底部には低く小さな高台を貼り付ける。外面は分割ヘラミガキ、内面は圏線状ヘラミガキ、見込みには暗文が入る。

白磁

椀（5）　高台径7.1㎝。見込みに大きな段を有する。外面下半部には施釉しない。釉は灰白色で鈍く発色し、透明度は低い。

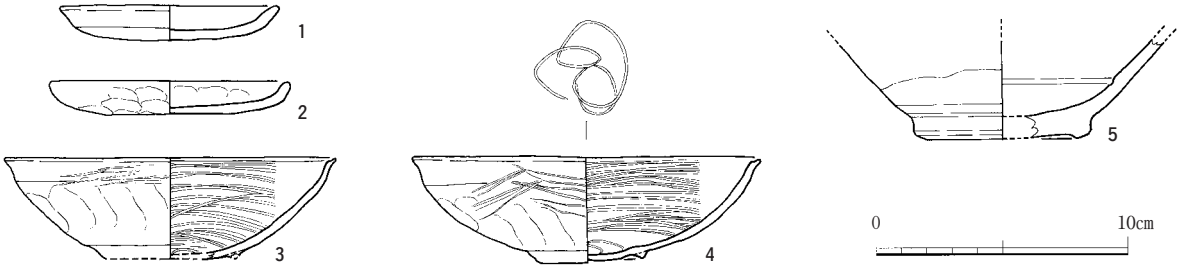


Fig.20　SK001茶灰色土層出土土器実測図（1／3）

SK001暗灰色粘土層出土土器（Fig.21、Pla.13・14）

土師器

小皿（1～8）　口径8.8～9.6㎝、器高1.4～1.9㎝。外面を押圧により成形する。3の外面には粘土の重ね目が観察でき、4の内外面の一部に煤が付着している。

皿（9～13）　口径13.4～14.1㎝、器高2.3～3.0㎝。外面は押圧で成形され、粘土の重ね目が観察できるものもある。9・10・12の口縁部の一部に煤が付着している。

羽釜（22・23）　口径25.8・26.4㎝。「く」字状に外反する口縁の端部は内側へわずかに折り返し、玉縁状とする。鍔は短めである。外面の全面に煤が付着している。

瓦器

小皿（14・15）　口径8.8・8.6㎝、器高1.1・1.7㎝。外面は押圧。15の内面にジグザグ状の暗文がみえる。

椀（16～21）　口径13.8～14.9㎝、器高4.1～4.8㎝、高台径4.5～5.7㎝。内面のヘラミガキは螺旋状で全面に施すが、やや隙間が目立つ。見込みには螺旋状の粗い暗文がある。外面では口縁部付近に粗雑なミガキがみられる程度で、大半が押圧のままである。口縁端部はわずかに外反させ、内面に浅い沈線を施す。高台は小さい。

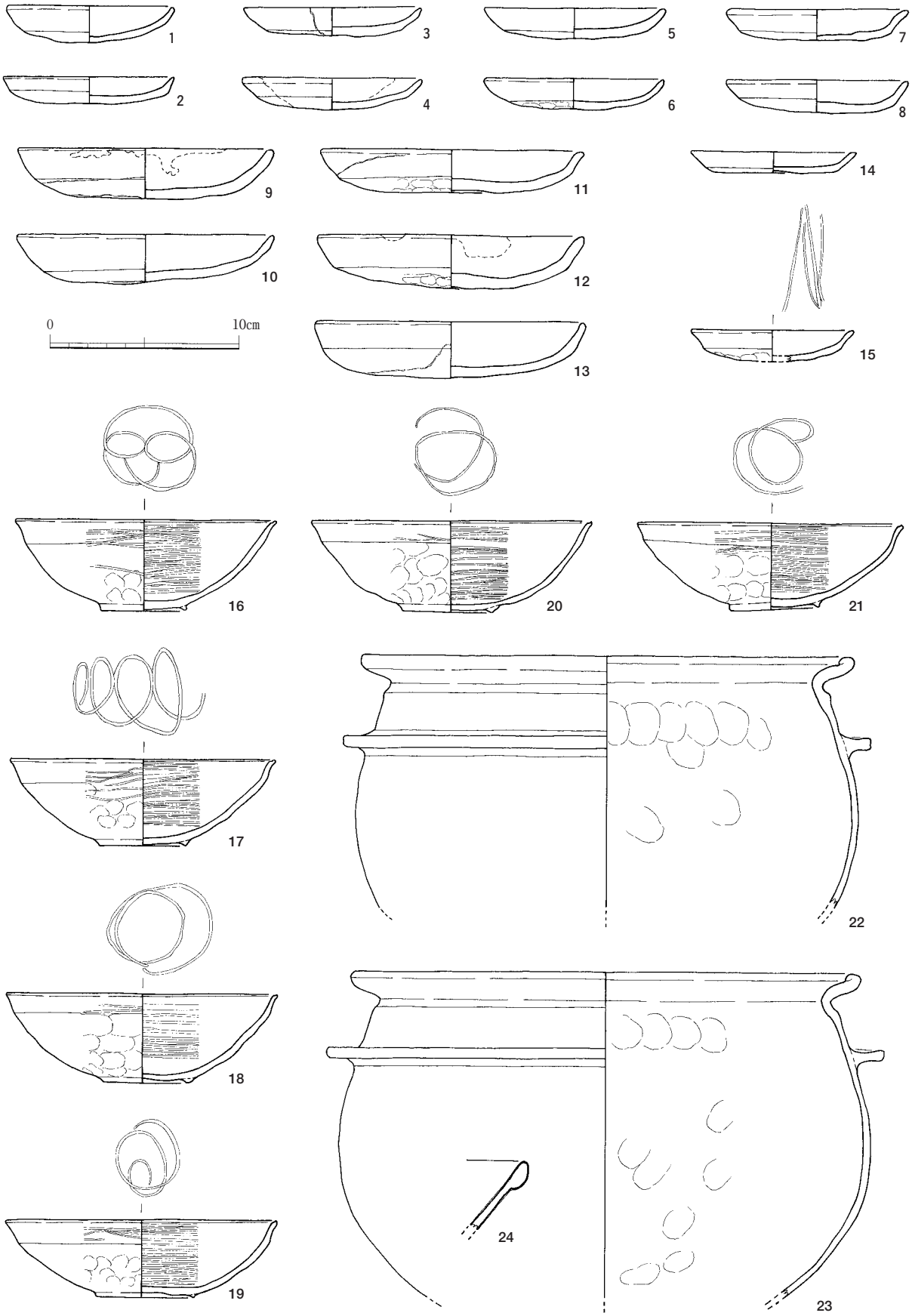


Fig.21　SK001暗灰色粘土層出土土器実測図（1／3）

白磁

椀（24）　釉は黄色味を帯びた白濁色に発色する。Ⅳ類。

◆SK001出土遺物の遺物組成（Tab.1）

近年奈良県内においても破片数の計数を基にした遺物組成の分析事例が見られるようになってきた。本節では比較的良好な一括性の遺物が出土した中世の遺構を対象として、遺物の種類別に破片数をカウントし、今後の検討の基礎資料として提示しておく。

検討対象はSK001（暗灰色粘土層・茶灰色土層）出土遺物であり、このうち明らかな混入遺物を除去した総破片数1409片である（種類不明分121点を含む）。

全体的な傾向として以下の点が指摘できる。

・瓦器椀の比率は53%である。

・土師器皿の比率は25%である。

・輸入陶磁器の比率は0.4%である。出土は白磁椀のみで、青磁椀は認められなかった。

・東播系須恵器の比率は1%である。器種は甕と鉢であり、鉢の方がやや多い。

・瓦器椀の比率に対して瓦器皿の比率は圧倒的に少ない。

Tab.1　SK001出土土器の組成

SK001暗灰色粘土層

瓦器椀	土師皿	土師器窯	瓦器皿	東播系須恵器甕	東播系須恵器鉢	白磁椀	石鍋	青磁椀
153	101	85	19	2	0	1	1	0

黒色土器	古代須恵器	古代土師器	灰釉	瓦(古代)	不明	その他	中世土器点数	合計
1	37	19	1	119	19	0	362	558

SK001茶灰色土層

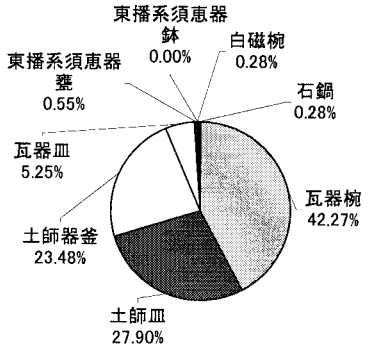
瓦器椀	土師皿	土師器窯	瓦器皿	東播系須恵器甕	東播系須恵器鉢	白磁椀	石鍋	青磁椀
264	98	54	3	1	5	2	3	0

黒色土器	古代須恵器	古代土師器	灰釉	瓦(古代)	不明	その他	中世土器点数	合計
1	93	17	2	198	102	4	430	851

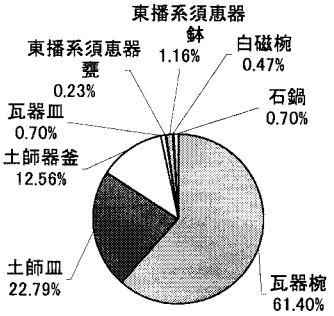
SK001総数

瓦器椀	土師皿	土師器窯	瓦器皿	東播系須恵器甕	東播系須恵器鉢	白磁椀	石鍋	青磁椀
417	199	139	22	3	5	3	4	0

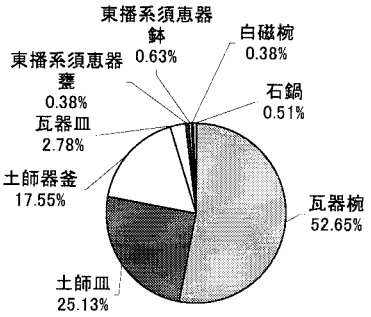
黒色土器	古代須恵器	古代土師器	灰釉	瓦(古代)	不明	その他	中世土器点数	合計
2	130	36	3	317	121	4	792	1409



SK001暗灰色粘土層



SK001茶灰色土層



SK001総数

これらに関しては以前の遺物組成の検討結果（『平城京右京北辺』2005　（財）元興寺文化財研究所）と比べると、瓦器椀の比率が50%を超えるのに対して、土師器皿が全体の25%とやや少ないことが認められるが、概ね大差のない結果である。輸入陶磁器や東播系須恵器に対して瓦器椀・瓦器皿・土師器皿など在地産の椀皿類の比率が卓越している点においても同等である。

今回の結果を評価するには、比較対象資料が求められる。しかしながら周辺地域の中世前期遺跡においてはこのような計測作業がほとんど行われていない。破片数分析の有効性はかねてより実証されているが（松本2003、佐藤2006ほか）、流通論、遺跡論を論じる基礎作業として、より具体的な「場」の分析を行うためにも比較資料の増加が望まれる。

（参考文献）

松本和彦2003「中世前半期の港町について」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会

佐藤亜聖2006「西日本における土器流通」『中近世土器の基礎研究』XⅧ　日本中世土器研究会

SK030出土土器（Fig.22）

土師器

羽釜（3）　「く」字状に外反する口縁の端部は内側へわずかに折り返し玉縁状とする。鍔は短めで、外面には煤が付着している。

瓦器

小皿（1）　口径8.8cm、器高1.5cm。見込みにジグザグ状の暗文がある。

椀（2）　口径14.3cm、器高4.7cm、高台径5.6cm。内面のヘラミガキは圏線状で全面に施すが、やや隙間が目立つ。見込みには螺旋状の粗い暗文がある。外面では口縁部付近に粗雑なミガキがみられる程度で、大半が押圧のままである。口縁端部はわずかに外反させ、内面に浅い沈線を施す。高台は小さい。炭素の吸着が悪いためか、灰白色を呈している。

緑釉陶器

皿（4）　硬質で明灰色を呈する胎土。釉は内外面ともに薄くかかり、淡緑灰色に発色し、鈍い光沢があるが、剥離が著しい。

SK080上層出土土器（Fig.22）

土師器

小皿（5）　口径9.7cm、器高1.8cm。

瓦器

小皿（6）　口径9.1cm、器高1.6cm。見込みにジグザグ状の暗文がある。

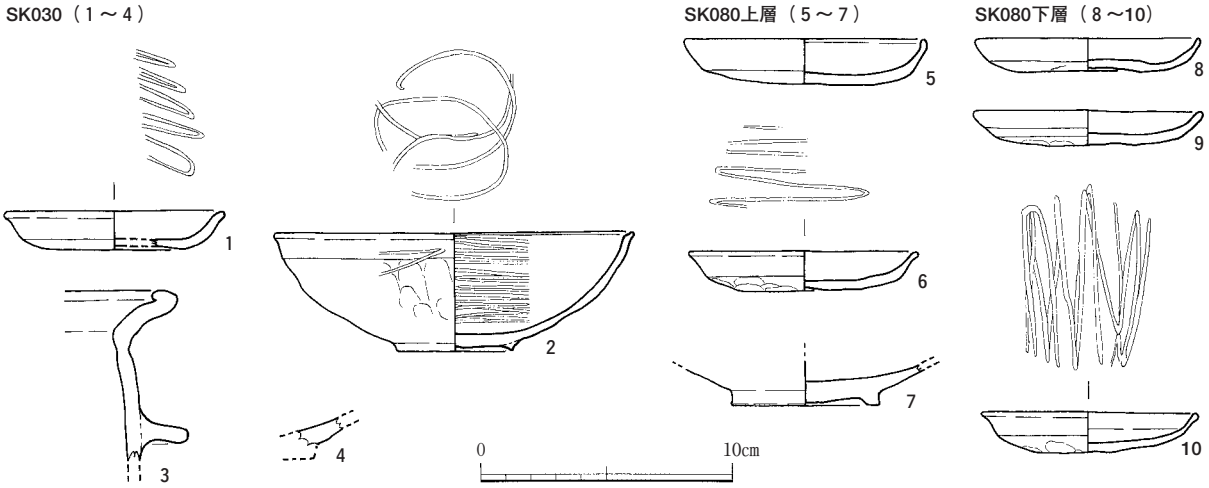


Fig.22　SK030・080出土土器実測図（1／3）

緑釉陶器

椀（7）　削り出された高台の径は5.9㎝。畳付けから底部はほぼ露胎でヘラケズリ、他はヨコナデで施釉される。釉は薄くかかり、内外とも明緑白色に発色する。胎土は明灰色で硬質。

SK080下層出土土器（Fig.22）

土師器

小皿（8・9）　口径9.0・9.2㎝、器高1.3・1.4㎝。外面は押圧。

瓦器

小皿（10）　口径8.7㎝、器高1.6㎝。見込みにジグザグ状の暗文がある。

SD002出土土器（Fig.23）

瓦器

小皿（1）　口径9.2㎝、器高2.0㎝。見込みにジグザグ状の暗文がある。

SD046出土土器（Fig.23）

瓦器

小皿（2）　口径9.2㎝、器高1.6㎝。風化が著しく調整観察不能。

SD182出土土器（Fig.23）

土師器

皿（3）　口径13.4㎝、器高2.3㎝。外面に煤が付着する。

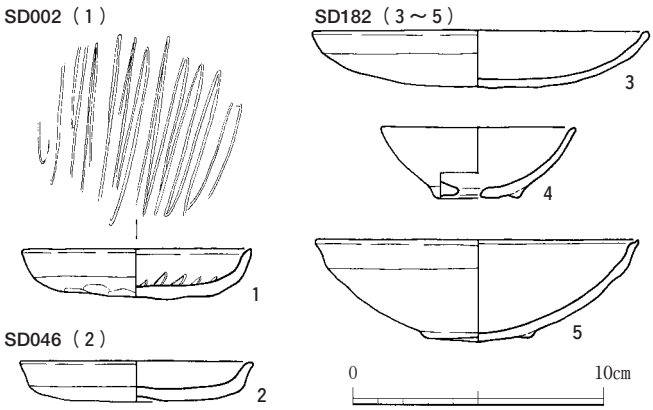


Fig.23　SD002・046・182出土土器実測図（1／3）

瓦器

小椀（4）　口径7.8㎝、器高2.8㎝、高台径3.3㎝。底部に直径0.9㎝の焼成前穿孔がある。調整は摩滅が著しく不明。

椀（5）　口径12.8㎝、器高4.1㎝、高台径4.4㎝。口縁端部内側に浅い沈線をつくる。摩滅により調整不明。

SX018出土土器（Fig.24）

二彩

1は長さ3.1㎝、幅2.2㎝、厚さ0.9㎝の細片で、器形の推定は難しいが、表面及び側面の一部は当初面であり、器面に反りもないことから、板状の部品を組み合わせた製品の一部と考えられる。釉は透明度の高いものが表面と側面にかかり、淡緑色と明黄色に発色する。明黄色を呈する部分は素地の影響を受けているものと思われる。胎土は灰白色を呈し、軟質で、小粒子を若干含んでいる。

SX020出土土器（Fig.24）

土師器

小皿（2～5）　口径8.8～9.8㎝、器高1.6～1.8㎝。底部には押圧痕が明瞭に残る。

皿（6）　底部は回転糸切りされる。

瓦器

椀（7）　口径14.4㎝、器高4.7㎝、高台径5.0㎝。口縁端部内側は浅い沈線状を呈する。外面のヘラミガキは粗雑で疎らであるが、内面は圏線状ヘラミガキを施し、見込みには螺旋状の暗文が入る。

SX040出土土器（Fig.24、Pla.15）

土師器

小皿（8・9）　口径9.6・10.0㎝、器高1.9・1.8㎝。底部は押圧痕が顕著である。

瓦器

小皿（10～21）　口径8.6～9.2㎝、器高1.6～2.4㎝。底部は押圧痕が観察され、見込みにはジグザグ状

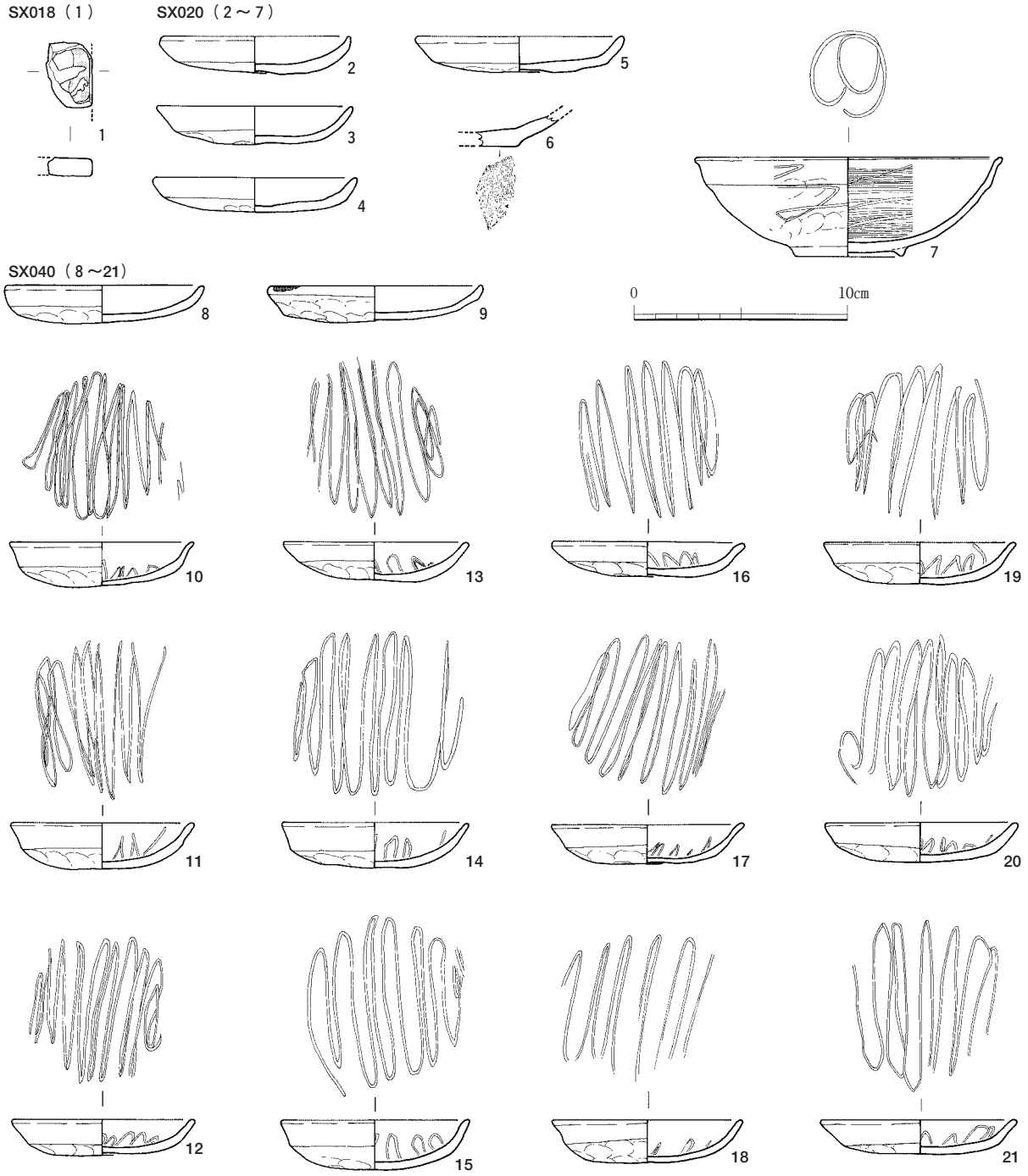


Fig.24　SX018・020・040出土土器実測図（1／3）

の暗文が認められる。体部はヨコナデ調整され、暗文が施されるほかはヘラミガキは認められない。

なお、遺物取上げ番号は次のとおりである。8＝②、9＝①、10＝④、11＝⑬、13＝⑦、14＝⑨、16＝⑧、17＝⑤、18＝③、19＝⑥、20＝⑪、21＝⑫で、12・15は検出当初に不注意で取上げられた資料であり、最上面の西寄りに位置していた。

A-2）下層遺構出土土器・陶磁器

SB050出土土器（Fig.25）

灰釉陶器

壷（1）　硬質で灰白色の胎土を有し、釉は淡緑灰色、明茶白色に発色し、透明度は外面で高く、内面はやや厚めにかかり貫入が多く認められる。残存部の全面にかかる。柱掘方c出土。

SB100出土土器（Fig.25）

須恵器

甕（2）　口縁部の資料で、ヨコナデで仕上げられる。柱掘方e出土。

SB245出土土器（Fig.25）

須恵器

蓋（3）　ボタン状を呈するツマミの直径は3.0㎝。柱掘方d出土。

SB250出土土器（Fig.25）

土師器

坏（4）　口縁端部をわずかに上方へつまみ出す。体部内面は放射状の暗文、外面には横方向のヘラミガキ、底部はヘラケズリを施す。柱掘方e出土。

皿（5・6）　5は内面に漆が付着しており、パレットとして用いたか。6は、口径21.5㎝、器高3.8㎝、高台径16.5㎝で、口縁端部を上方へ少しつまみ上げる。柱掘方e出土。

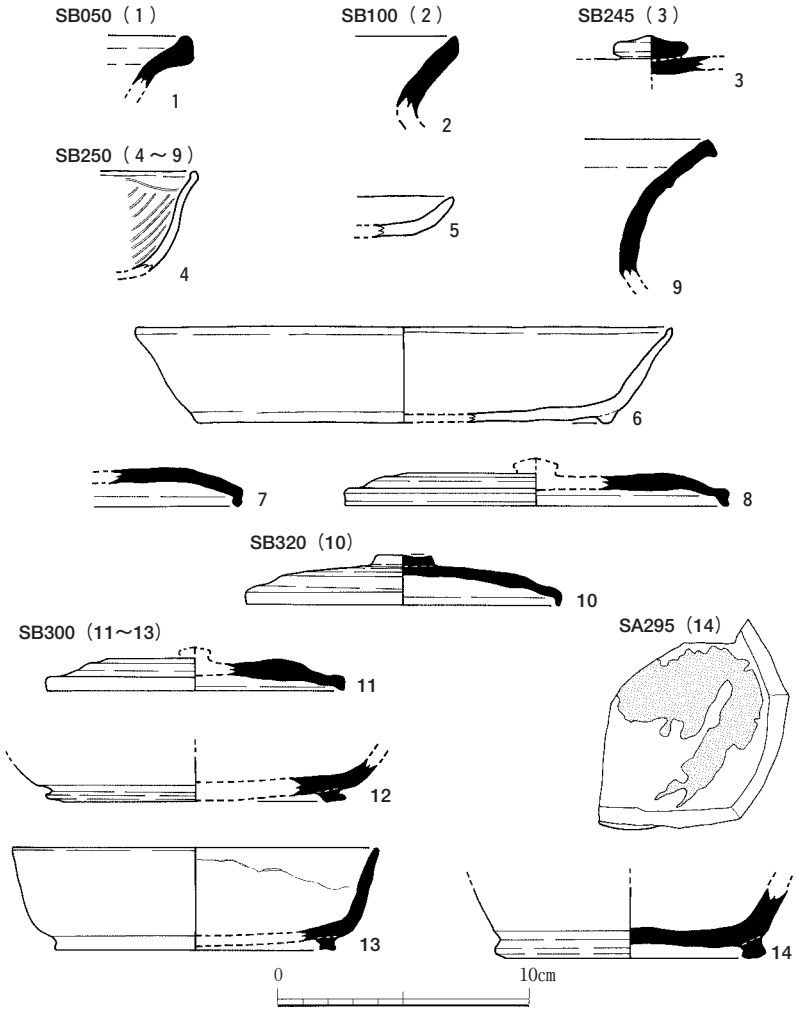


Fig.25　掘立柱建物・柱列出土土器実測図（1／3）

須恵器

蓋（7・8）　7は、天井部を回転ヘラケズリする。8は、口径15.8㎝で、天井部を回転ヘラケズリする。両者とも、柱掘方e出土。

壷（9）　柱掘方e出土。

SB300出土土器（Fig.25）

須恵器

蓋（11）　口径11.9㎝。天井部はヘラ切りの後ヨコナデを施す。柱掘方d出土。

坏（12・13）　12は高台径12.0㎝。外面底部は回転ヘラケズリ。柱掘方a出土。13は、口径14.7㎝、器高4.1㎝、高台径11.3㎝。柱掘方d出土。

SB320出土土器（Fig.25）

須恵器

蓋（10）　口径12.6㎝、器高2.0㎝。押し潰された円盤状のツマミを有する。天井部は回転ヘラケズリされる。柱掘方m出土。

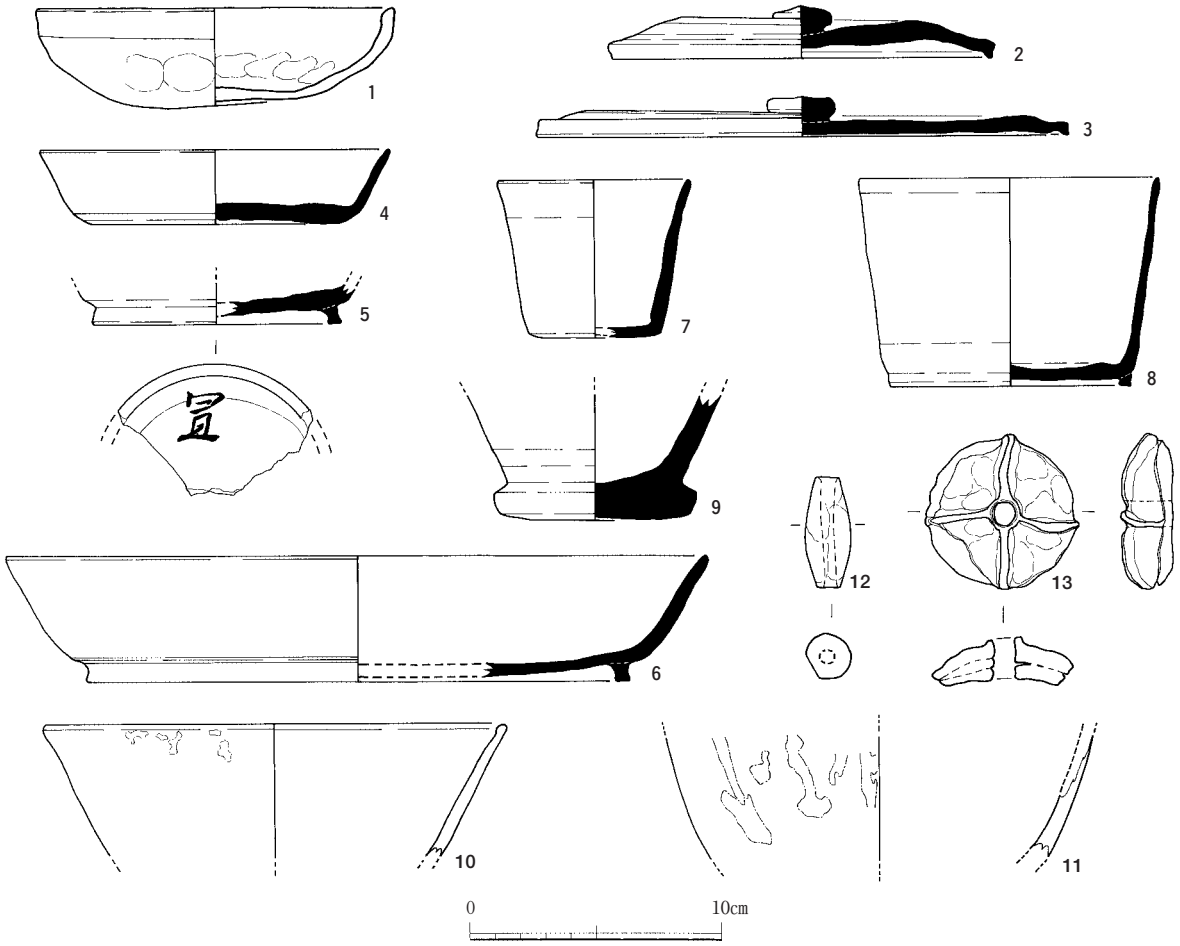


Fig.26　SE200茶灰色土層出土土器実測図（1／3）

SA295出土土器（Fig.25）

須恵器

壷（14）　高台径10.8cm。内面のほぼ全域に漆が付着している。柱掘方b出土。

SE200茶灰色土層出土土器（Fig.26、Pla.17）

土師器

椀（1）　口径14.4cm、器高4.0cm。体部は押圧による成形で、外面に煤が付着している。

須恵器

蓋（2・3）　口径15.2・21·2cm、器高2.1・1.6cm。2の天井部外面はヘラケズリ、内面は墨痕の付着がみられ、硯に転用したとみられる。3は天井部をヨコナデで仕上げる。

坏（4～8）　4は、口径14.0cm、器高3.0cmで、底部外面はヘラ切り後未調整だが、繊維状の圧痕がみられる。5は、高台径9.9cmで、高台の内側に「宜」の異体字かと思われる墨書がある。6は、口径28.0cm、器高5.1cm、高台径21.8cm。底部外面は回転ヘラケズリ。7は、口径7.6cm、器高6.3cm、底径5.2cmで、底部外面は使用による磨耗で平滑化している。8は、口径12.0cm、器高8.3cm、高台径9.6cm。体部の器壁は薄く、直立気味である。底部外面は回転ヘラケズリ。

鉢（9）　底径7.6cm。底部外面はナデ、周囲は強めのヨコナデで仕上げる。穿孔はない。

三彩

椀（10）　口径18.4cm。外面にわずかに褐色に発色する釉が見え、口縁部近くにごくわずかながら緑色に銀化して発色する釉が認められる。胎土は軟質で、石英、長石小粒のほか赤色酸化土粒を若干含ん

でいる。

壷（11）　体部外面に、透明度があり明茶黄色に発色する釉と鈍い光沢を有した明白緑色に発色する釉が垂下するが、わずかに観察される程度である。胎土は軟質で、石英、長石小粒のほか赤色酸化土粒を若干含んでいる。

土製品

土錘（12）　長さ4.4cm、最大径1.9cmで、中央に0.6cmの貫通する穿孔がある。表面はユビオサエによる成形である。

紡錘車（13）　直径6.2cm、高さ1.9cmの円丘状を呈し、中央に直径0.8cmの穿孔がある。外面の穿孔部周囲を突帯を環状にめぐらせ、さらに四方向へ幅0.3～0.4cmの突帯を派生させる。裏面はユビオサエによ

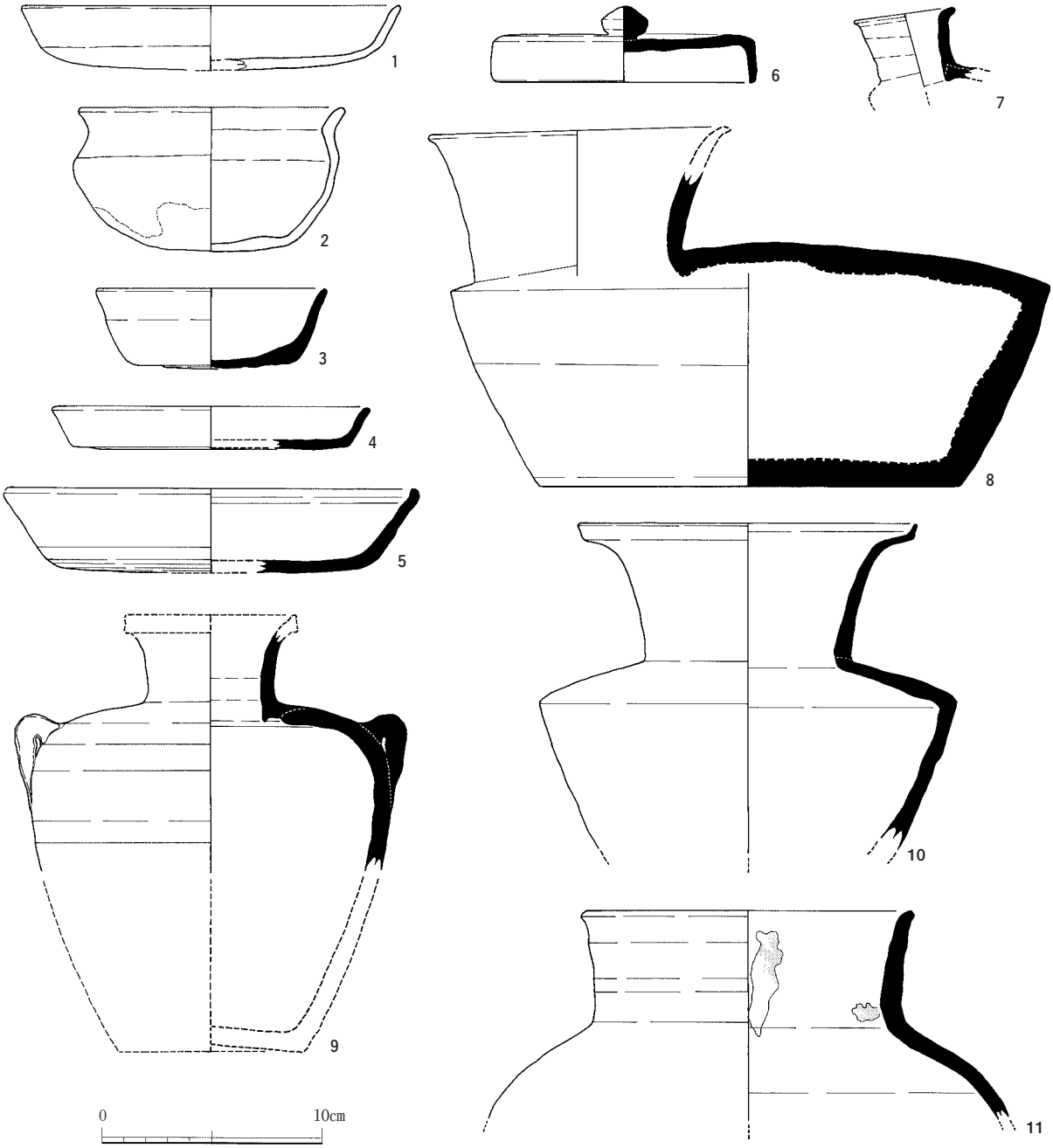


Fig.27　SE200暗褐色粘土層出土土器実測図（1／3）

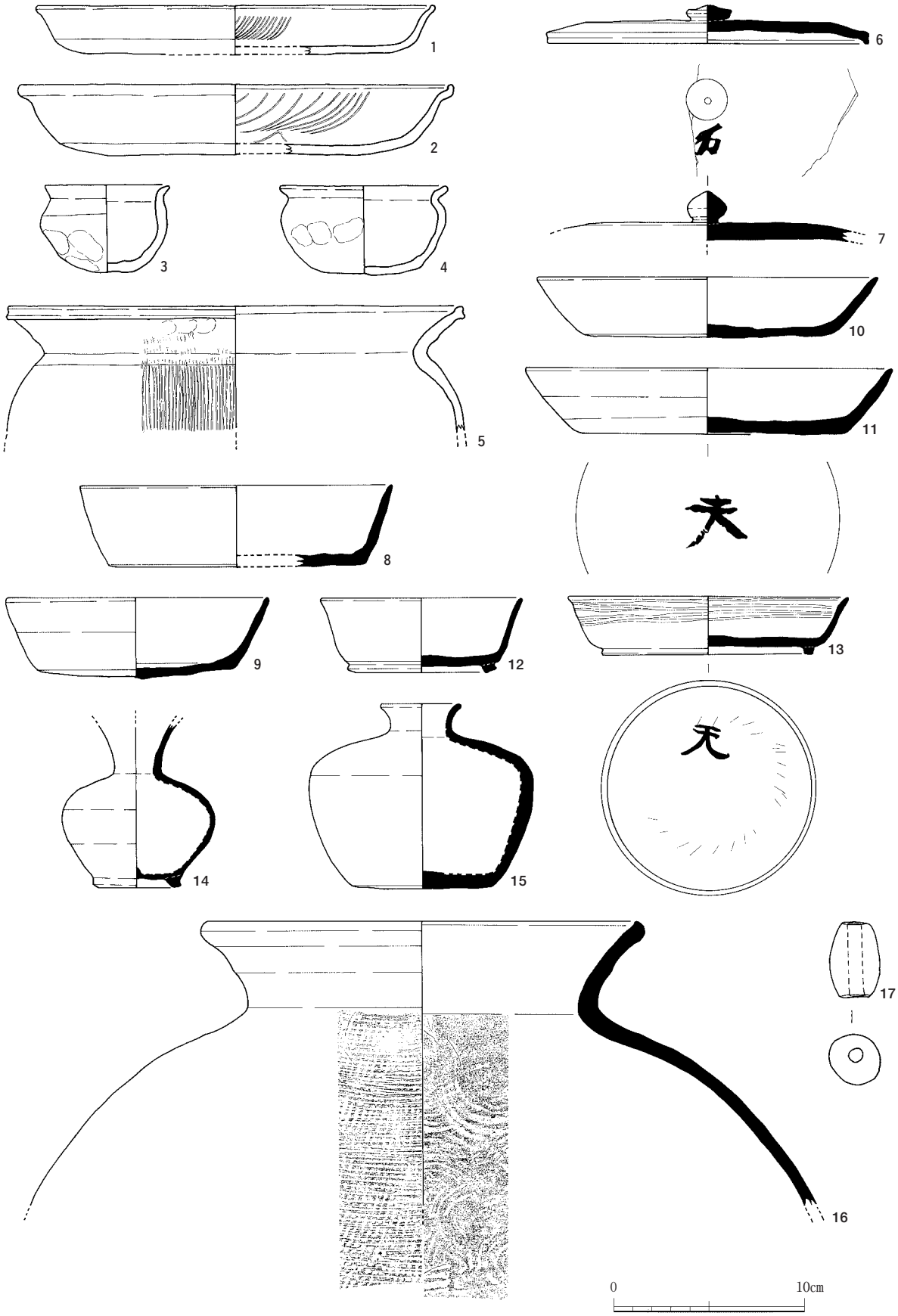


Fig.28　SE200明灰色粘土層出土土器実測図（1／3）

る成形で終わる。厚さ0.3～0.7㎝の円盤状粘土板を3層貼り合せて作っている。形状から紡錘車と考えておく。

SE200暗褐色粘土層出土土器（Fig.27）

土師器

坏（1）　口径17.4㎝、器高3.0㎝。

壷（2）　口径12.1㎝、器高6.6㎝、胴部最大径12.2㎝。口縁部付近はヨコナデ、他は押圧で成形する。外面の底部近くに煤が付着している。

須恵器

坏（3・5）　3は、口径10.6㎝、器高3.7㎝。底部はヘラ切りで未調整である。5は、口径18.6㎝、器高3.9㎝で、口縁端部をわずかに内傾させる。底部外面は回転ヘラケズリされる。

皿（4）　口径14.6㎝、器高2.0㎝。底部はヘラ切りの後ナデを施す。

蓋（5）　壷Aの蓋で、口径12.0㎝、器高3.5㎝、宝珠形ツマミの直径は2.1㎝。口縁端部をわずかに傾斜している。天井部全面に降灰し、調整は観察しにくい。

平瓶（7・8）　7は、口径4.6㎝の小型品。8は口径13.5㎝前後、胴部最大径27.3㎝、底部径19.2㎝、高さ16.1㎝（現状）の大型品。体部側面及び底部外面は回転ヘラケズリの後ヨコナデおよびナデ調整される。体部上面は降灰による自然釉、口縁部はヨコナデである。口縁の一部を除きほぼ完存している。

壷（9～11）　9は、口縁部を欠く。胴部の最大径は15.4㎝に復原され、そこから肩部にかけて縦方向の把手が付く。体部下半は回転ヘラケズリされ、他はヨコナデされるが、自然釉のため観察しにくい。10は、口径15.5㎝、胴部最大径19.0㎝。口縁端部を上方へつまみあげる。体部の屈曲部内面に押圧痕が並び、体部外面の下半は回転ヘラケズリされる。11は、直立する口縁を有するもので、口径15.0㎝を測る。内面の随所に斑点状となった漆が付着しており、漆の容器であったと思われる。

SE200明灰色粘土層出土土器（Fig.28、Pla.19）

土師器

皿（1・2）　1は、口径20.8㎝、器高2.6㎝。2は、口径22.6㎝、器高3.7㎝。両者とも体部内面に放射状暗文を施す。

壷（3・4）　3は、口径6.6㎝、器高4.6㎝。外面には押圧痕が顕著に残る。4は、口径8.8㎝、器高4.8㎝、胴部最大径8.7㎝。

甕（5）　口径23.8㎝。体部外面は縦方向のハケ目、内面は条痕の残る横方向のナデである。内外面ともに煤が付着している。

須恵器

蓋（6・7）　6は、口径16.8㎝、器高2.0㎝。扁平な宝珠形を呈するツマミの径は2.4㎝。天井部はヘラ切りのままである。7は、直径2.1㎝を測る背の高い宝珠形のツマミを有するもので、天井部は回転ヘラケズリの後ヨコナデ。天井部中央付近でツマミの近くに「万」の墨書がある。

坏（8～13）　8・9は、口径16.5・13.9㎝。底部はヘラ切り後粗いナデを施す。10・11は口径18.0・19.4㎝、器高3.2・3.5㎝で、体部は開き気味に立ち上がる。底部はヘラ切り後ナデ調整され、11の外面中央には「天」あるいは「夫」と判読できる墨書がある。12・13は高台を有するもので、口径10.6・14.6㎝、器高3.9・3.1㎝、高台径7.8・11.1㎝。底部はヘラ切り後ナデ調整され、13の外面には円形に連続する工具痕があり、中央よりやや外側に寄って「天」の墨書がある。

壷（14・15）　14は、口縁端部を失っているが、球形の胴部を有し、その最大径8.0㎝、現存高8.6㎝。外面の体部下半は回転ヘラケズリされる。15は、口径4.2㎝、器高9.7㎝、底径7.6㎝、胴部最大径11.9㎝を測る。底部はヘラ切りののち周囲にヨコナデを施すが、中央付近は板状の圧痕が見られる程度で未調整である。

甕（16）　口径22.6㎝。外面は擬格子目の叩きを施した後にカキ目調整され、頸部に近い肩部にヘラによる「下」と判読できる文字が焼成前に記載される。記号の可能性もあるが、書き順からも「下」字

をイメージさせる。内面は同心円の当具痕が残る。口縁部はヨコナデである。

土製品

土錘（17）　長さ4.0㎝、最大径2.7㎝で、中央に直径0.7㎝の貫通する穿孔がある。表面は風化著しく調整不明。

SE200明灰色粘土下層出土土器（Fig.29）

土師器

皿（1～3）　1は、口径23.0㎝、器高3.7㎝、高台径17.6㎝で、口縁端部をわずかに内反させる。2は、底部の破片で、内面には螺旋状の暗文、外面の一部に墨書が認められるが判読できない。3は、底部の資料ながら、体部内面には斜放射状の暗文、見込みには螺旋状と思われる暗文がある。底部外面には、「戌」とみられる墨書がある。

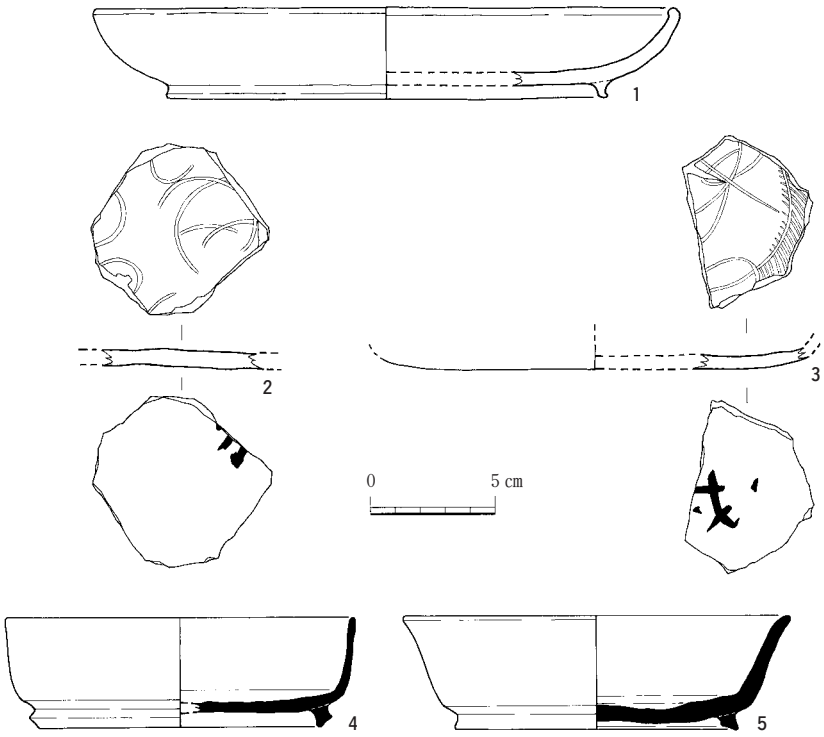


Fig.29　SE200明灰色粘土層下層出土土器実測図（1／3）

須恵器

坏（4・5）　4は、口径13.8㎝、器高4.4㎝、高台径11.0㎝。外面底部は回転ヘラケズリされる。5は、口径15.4㎝、器高4.5㎝、高台径11.3㎝。大きめの砂粒を含む粗めの胎土である。

SE210暗茶色粘土層出土土器（Fig.30）

土師器

坏（1・2）　口径13.6・15.3㎝、器高2.2・2.4㎝。体部外面には押圧痕が残る。

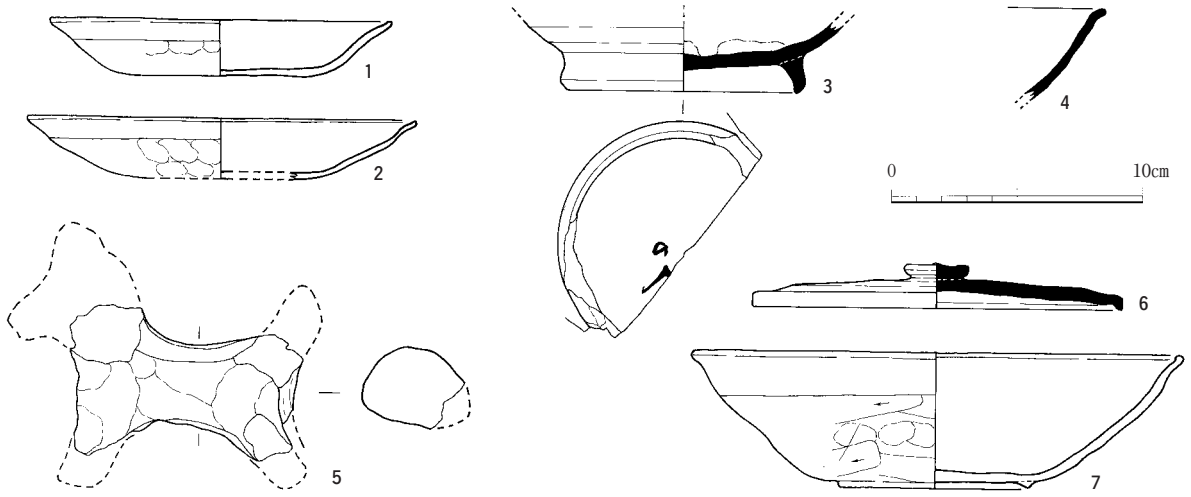


Fig.30　SE210出土土器実測図（1／3）

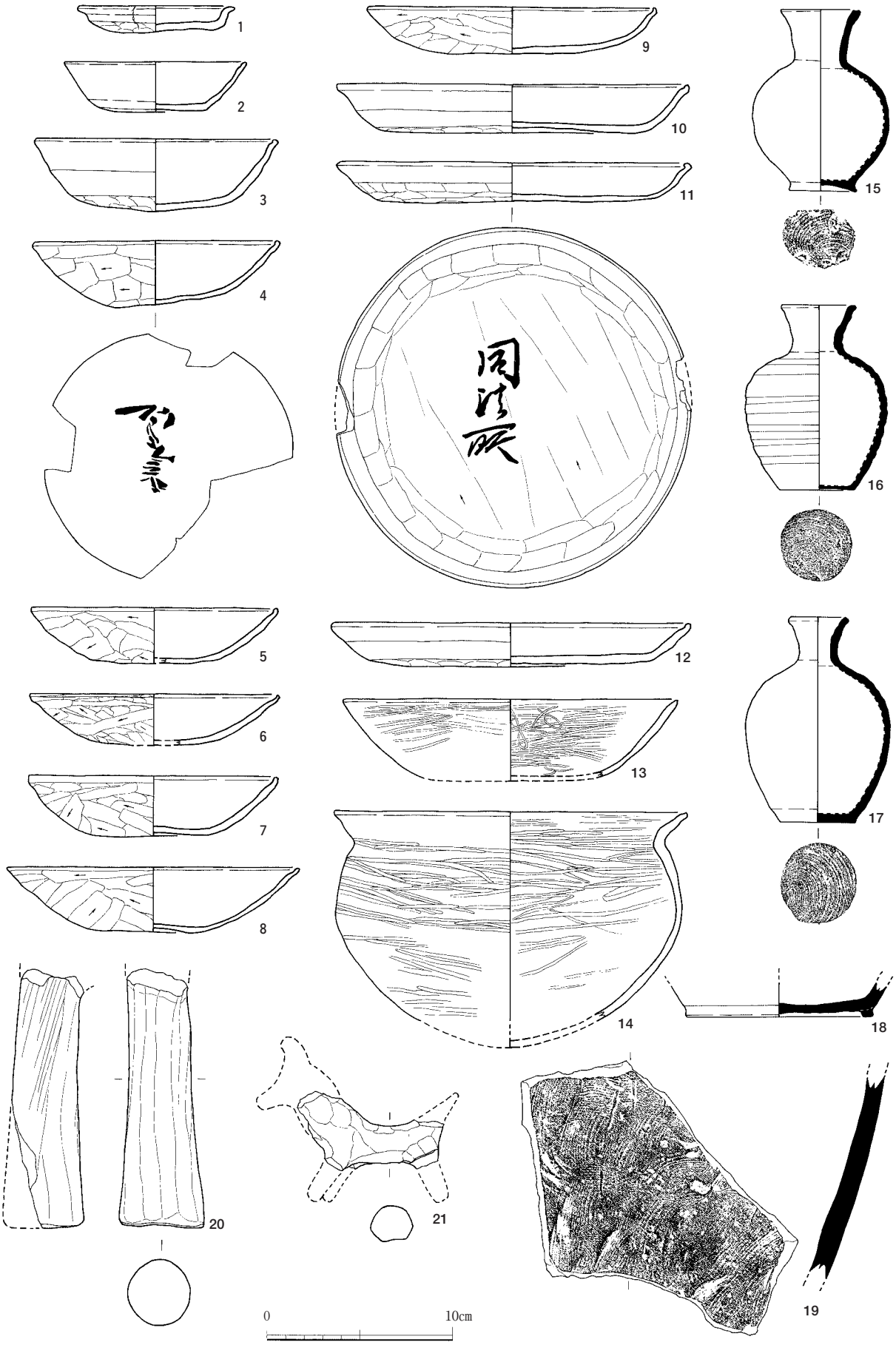


Fig.31　SE230暗灰色土層出土土器実測図（1／3）

灰釉陶器

椀（3・4）　3は、高台径9.9㎝。体部内面には明灰緑色に発色する釉が施されるが、見込みには無く、外面の残存する範囲では露胎。高台貼り付け部分を除く外面は回転ヘラケズリののちヨコナデされる。また、見込み部分は平滑になっており、墨痕がかすかに残っている。硯に転用した可能性が高い。さらに、底部外面に墨書があるが判読できない。4は、口縁部の破片で、内面の全面と体部外面上位に施釉される。釉は、明灰緑色に発色し光沢がある。

土製品

土馬（5）　胴部のみ残存し、頭、尾、前後の脚部を失う。故意に破砕した可能性が強い。胴部の調整は押圧による成形の後、粗いナデで仕上げる。現存長9.4㎝。

SE210灰色粘土層出土土器（Fig.30）

須恵器

蓋（6）　口径14.6㎝、器高1.8㎝。ツマミはボタン状を呈している。内面は墨痕が付着しており、硯に転用された可能性があるが、使用の頻度が小さかったのか、器面はさほど平滑化されていない。

土師器

椀（7）　口径19.4㎝、器高5.4㎝、高台径7.7㎝。口縁端部内側をわずかに窪ませて沈線状を呈する。外面は体部から底部にかけてヘラケズリされるが、穿孔する押圧痕で大きく窪む部分には及んでいない。また、体部外面の一部に叩き痕とみられる圧痕が残っている。

SE230暗灰色土層出土土器（Fig.31、Pla.17・18）

土師器

小皿（1）　口径8.4㎝、器高1.5㎝。底部外面は強い押圧痕がある。

坏（2・3）　口径9.8・13.2㎝、器高2.7・3.9㎝。底部は押圧の後ナデ。2の口縁部に1箇所、煤が付着する。

椀（4～8）　口径13.2～15.8㎝、器高3.0～3.7㎝。口縁端部をわずかに摘んで、内面に浅い沈線状の窪みがある。体部外面は押圧の後、分割ヘラケズリ。4の底部外面に墨書があるが、判読できない。

皿（9～12）　口径15.5～19.4㎝、器高2.2～2.6㎝。9の外面は口縁部近くから底部中央部までほぼ全体にヘラケズリを行なうが、10・12の底部外面には押圧痕が残り、ケズリはない。11は丁寧なヘラケズリで仕上げる。なお、11の底部外面の中央やや左寄りに「同法所」の墨書がある。

黒色土器

椀（13）　A類で、口縁部外面まで炭素が吸着して黒変する。口径18.0㎝。体部外面は粗いヘラケズリの後に分割ヘラミガキ、内面はかなり丁寧なヘラミガキを行い、体部上位に螺旋状の暗文を入れる。

甕（14）　口径19.0㎝。口縁部は内外面ともにヨコナデだが、内面はその後にヘラミガキが行なわれる。体部は内外面ともに粗めのヘラミガキ。両面とも煤が付着している。

須恵器

壷（15～17）　いずれも底部は回転糸切りされ、体部の調整はヨコナデとみられるが、灰を被っていて観察しにくい部分も多い。15は、口径4.3㎝、器高9.8㎝、底径3.7㎝、胴部最大径7.4㎝。16は、口径3.9㎝、器高10.0㎝、底径4.0㎝、胴部最大径7.7㎝。17は、口径3.0㎝、器高11.1㎝、底径4.1㎝、胴部最大径7.8㎝。

坏（18）　高台径10.2㎝。内外面ともに漆が付着している。

甕（19）　胴部の破片で、外面は擬格子叩き目の後カキ目、内面は青海波の当て具痕。内面を硯に転用していたようで、内面の全面に墨痕と研磨痕が観察できる。また、現状の破面の大半に墨痕が付着していることから、この形状で使用されていたと考えられる。破面の調整は行われていない。

土製品

脚部（20）　径3.4㎝前後の平底で、現存の高さ13.9㎝。上位でやや細くなる。表面は縦方向のナデと一部にハケ目が観察される。

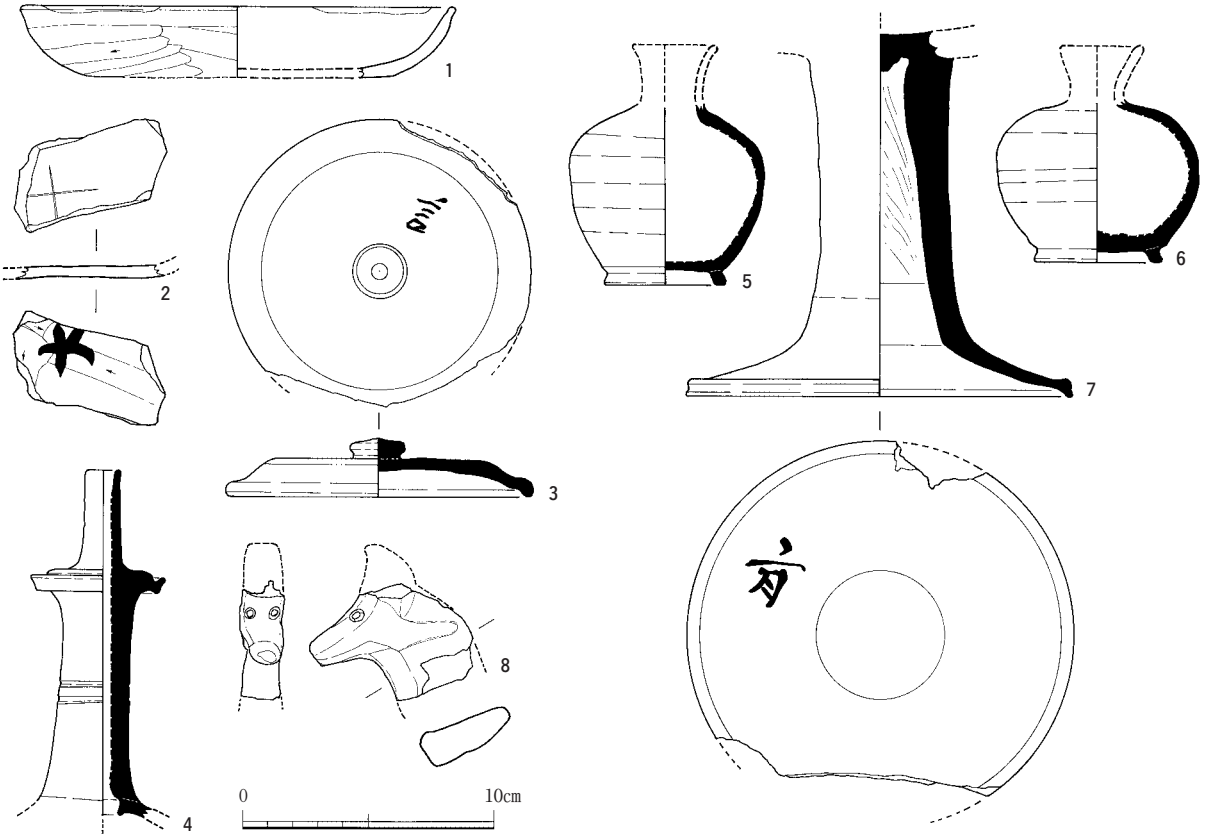


Fig.32　SE230黄灰色土層出土土器実測図（1／3）

土馬（21）　胴部のみ残存し、頭、尾、前後の脚部を失う。故意に破砕した可能性が強い。胴部の調整は押圧による成形の後、粗いナデで仕上げる。現存長7.9cm。

SE230黄灰色土層出土土器（Fig.32、Pla.24）

土師器

坏（1・2）　1は、口径17.4cm、器高2.4cm。体部外面はヘラケズリされる。口縁端部に煤が付着する。2は底部の破片で、外面には「大」の墨書、内面には「十」のヘラ書きがある。内面の文字は線の側縁が剥落しており、焼成前と判断するがかなり乾燥してから記載されたものと思われる。

須恵器

蓋（3）　口径12.3cm、器高2.3cmで、やや背の高いボタン状のツマミが付く。天井部はヘラ切りの後、ケズリが施される。天井部外面に「言」の墨書がある。

浄瓶（4）　口径1.3cm。頸部中程に2条の沈線を廻らせる。表面は自然釉が全面を覆っているため調整不明。

壷（5・6）　5は、胴部最大径7.8cm、高台径4.9cm。6は、胴部最大径8.0cm、高台径5.1cm。5・6ともに口縁部を失っており、打ち欠いた可能性が高い。体部はヨコナデで、底部はヘラ切りの後、丁寧なナデを施す。

高坏（7）　脚端部径15.4cm。底部内側に「二月」と記す。

土製品

土馬（8）　頭部の破片。表面は押圧で成形し、粗いナデで仕上げる。目は竹管文風に押印されたもので、側面には耳下から鬣方向へ向けて手綱と思われる表現がある。面幅1.7cm、頸部の最大厚1.5cm。

SE280茶褐色土層出土土器（Fig.33、Pla.20）

土師器

盤（1）　口径25.3cm、器高4.7cm、高台径10.6cm。大きく開く体部を有し、口縁端部をさらに外反され、

内面に浅い沈線状の窪みを作る。風化のため調整は不明。

須恵器

坏（2～4）　2は、口径15.8㎝、器高3.3㎝。底部外面はヘラ切りされ、繊維状の圧痕がある。3は、口径21.2㎝、器高7.6㎝、高台径15.7㎝。4は、高台径12.2㎝で、底部外面に「十」とみられる墨書がある。

皿（5）　口径19.5㎝、器高1.6㎝。底部外面は回転ヘラケズリされる。

SE280暗灰色粘土層出土土器（Fig.33）

土師器

壷（7）　口径8.9㎝。外面は押圧痕が残るが、内面は平滑にナデられる。

坏（6）　底部の破片で、外面に「大」とみられる墨書がある。

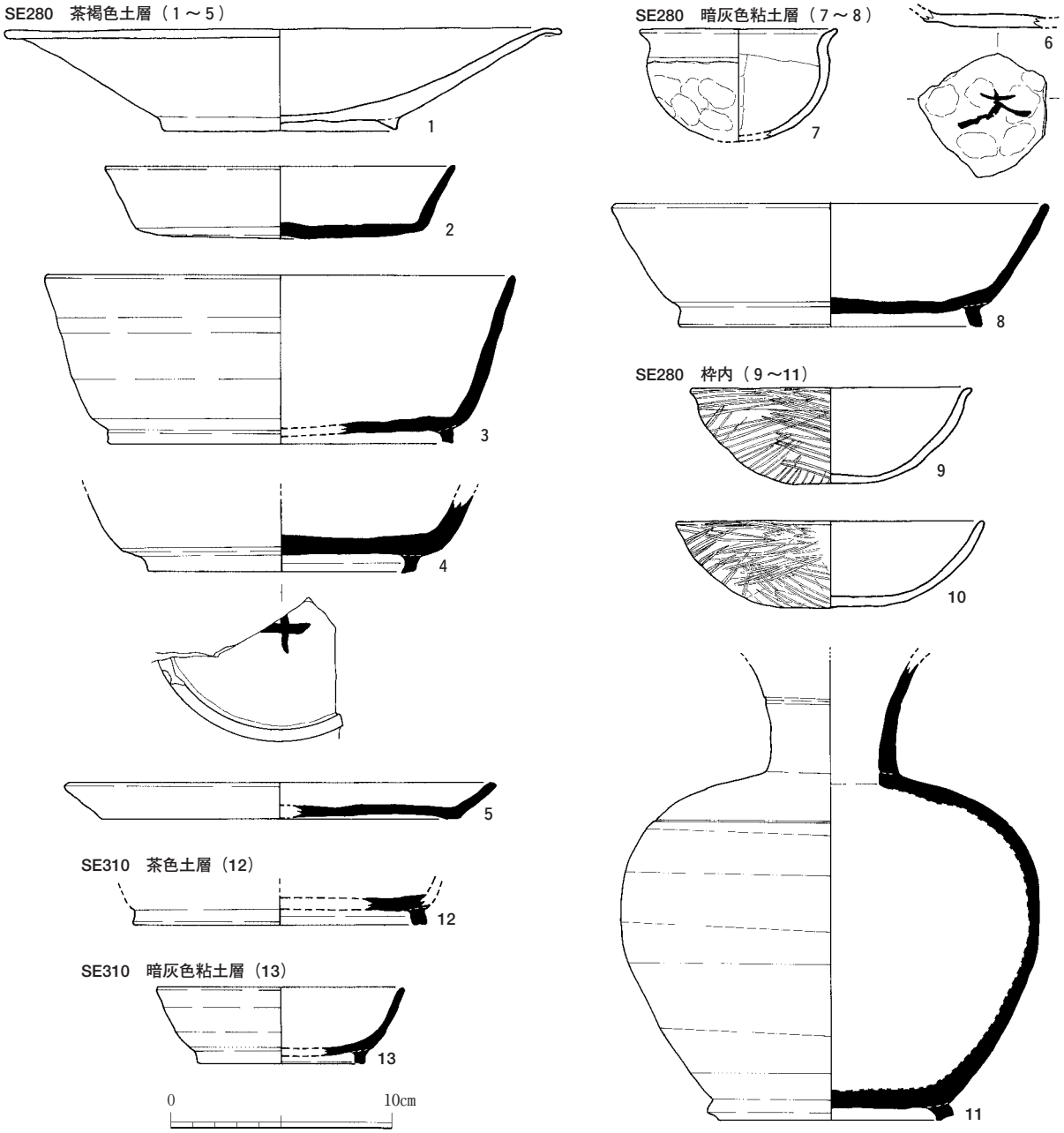


Fig.33　SE280・310出土土器実測図（1／3）

須恵器

坏（8）　口径19.5cm、器高5.6cm、高台径13.8cm。底部外面はヘラ切りの後ナデを施すが、板状の圧痕も残存している。

SE280枠内出土土器（Fig.33）

土師器

椀（9・10）　口径12.8・14.0cm、器高4.3・4.0cm。外面はヘラケズリの後、分割のヘラミガキ、内面は粗いナデである。

須恵器

壷（11）　胴部最大径19.0cm、現存高20.8cm、高台径11.1cm。体部上位以下は回転ヘラケズリの後に強いヨコナデを施す。

SE310茶色土層出土土器（Fig.33）

須恵器

坏（12）　高台径13.4cm。見込み部分は平滑化し、墨の付着がある。硯に転用されたもの。

SE310暗灰色粘土層出土土器（Fig.33）

須恵器

坏（13）　口径11.2cm、器高3.5cm、高台径7.6cm。

SD010出土土器（Fig.34）

いずれも上層から出土したもの。

須恵器

蓋（1～5）　1は、ツマミの無いタイプで、口径12.2cm、器高1.9cm。天井部はヘラ切りの後未調整である。3は、口径16.5cm、器高2.2cmで、宝珠形のツマミが付く。

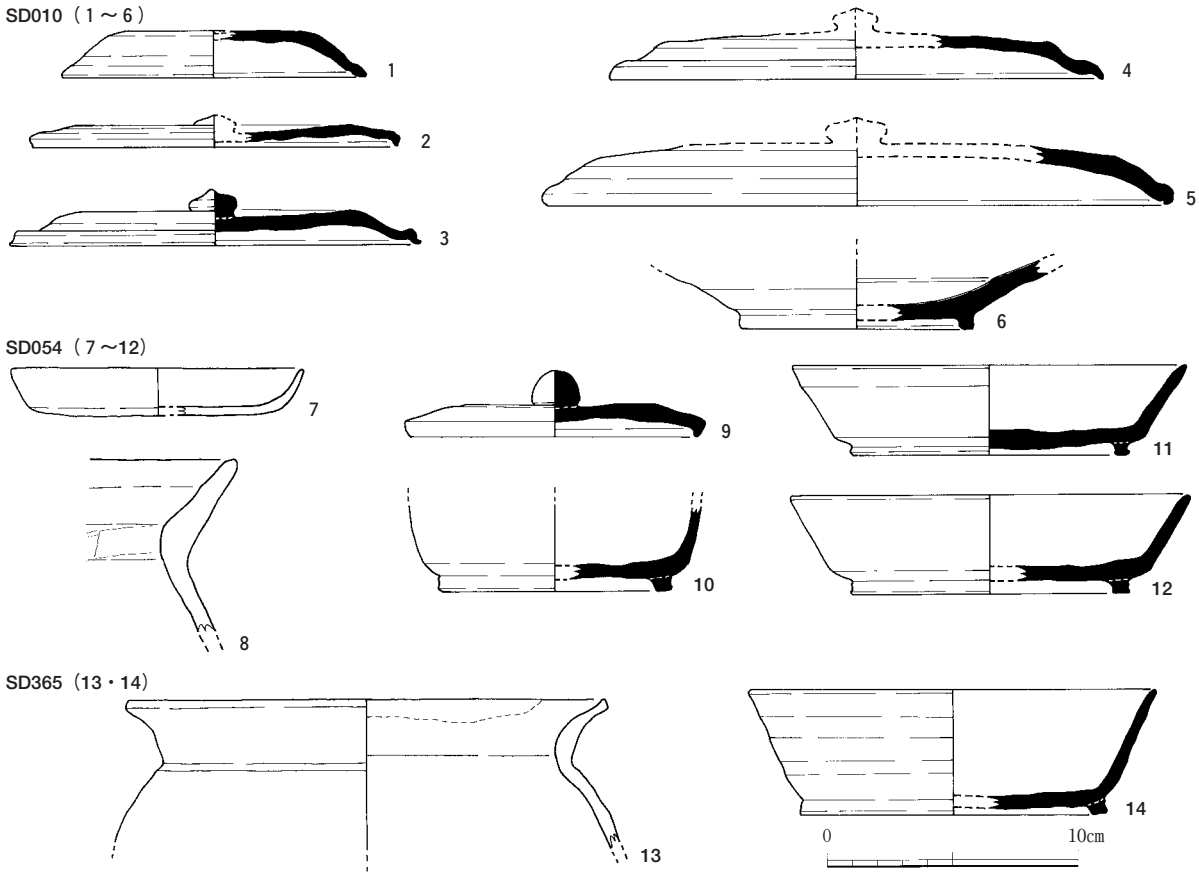


Fig.34　SD010・054・365出土土器実測図（1／3）

灰釉陶器

段皿（6）　高台径9.3cm。体部外面は回転ヘラケズリされる。内面にかかる釉は、淡い茶黄色気味に発色し、透明度はやや鈍いが、光沢はある。

SD054出土土器（Fig.34）

土師器

皿（7）　口径11.6cm、器高1.9cm。

甕（8）　体部外面はハケ目である。

須恵器

蓋（9）　口径11.5cm、器高2.7cm。口縁端部の断面形は三角形で、背の高い半球状のツマミが付く。

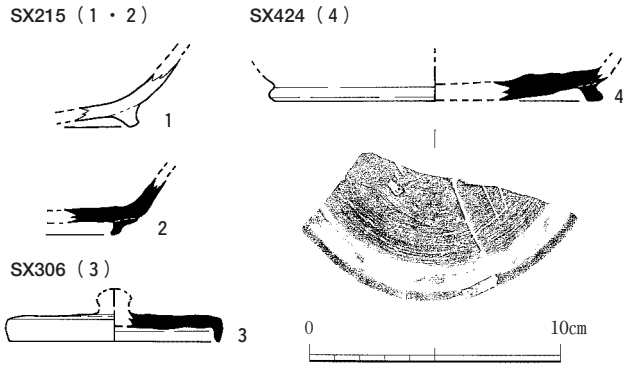


Fig.35　SX215・306・424出土土器実測図（1／3）

坏（11・12）　口径15.7・16.0cm、器高3.6・3.9cm、高台径11.2・11.1cm。11の底部外面は回転ヘラケズリされるが、12は、ヘラ切り後ナデ調整である。

椀（10）　高台径9.4cm。底部はヘラ切り後、ナデである。

SD365出土土器（Fig.34）

土師器

甕（13）　口径19.2cm。口縁端部を上方へわずかに摘み上げる。体部は押圧でおわる。口縁端部内面の一部に煤が付着する。

須恵器

坏（14）　口径16.3cm、器高5.0cm、高台径12.3cm。底部外面はヘラ切り後粗いナデである。

SX215出土土器（Fig.35）

土師器

坏（1）　高台部の破片で、表面は調整不明。

須恵器

坏（2）　高台部の破片で、底部はヘラ切り後、ヨコナデされる。

SX306出土土器（Fig.35）

須恵器

蓋（3）　口径8.4cm。口縁端部はやや長めの三角形に作る。天井部は回転ヘラケズリされる。

SX424出土土器（Fig.35）

須恵器

坏（4）　高台径13.4cm。底部外面は回転ヘラケズリされ、ヘラ記号がある。底部は内外面ともに平滑化しており、墨の付着が確認され、両面とも硯に転用したことがわかる。

淡茶色土層出土土器（Fig.36）

土製品

土錘（3）　長さ6.4cm、胴部最大径2.5cmで、押圧により成形する。中央に径0.6cmの穴が貫通する。

表土出土土器（Fig.36）

土師器

坏（1）　底部片で、外面に墨書があるが、判読できない。

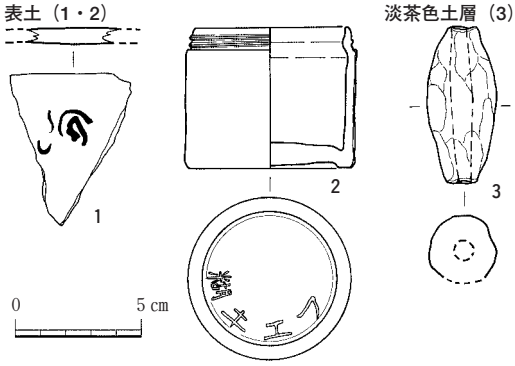


Fig.36　表土・淡茶色土層出土土器実測図（1／3）

ガラス製品

瓶（2）　口径6.1cm、器高5.6cm、底径6.5cmの円筒形容器で、口縁部外面をねじ切りする。型作りによる合わせ目が2箇所、わずかなバリとして縦方向に走る。外面の底部には陽刻された右から読む「フエキ糊」の文字がある。ガラスは淡緑青色を呈する透明度の高いもので、小さな気泡が目立つ。

B）木製品

SB100出土木製品（Fig.37）

柱根（1～4）　1は、基部径16.4cm、現存長67.5cmで、側面を9面前後に面取りしている。基部は切断時の工具痕が明瞭であり、切断されたままの状態である。柱掘方a出土。2は、基部径16.1cm、現存長64.6cmで、側面を7～8面前後に面取りしている。基部は腐食が進んでいるが、一部に切断痕を残しており、切断したままの状態で置いたものとみられる。柱掘方c出土。3は、基部径15.2cm、現存長46.5cmで、側面を9～10面前後に面取りしている。基部は周囲から大きく腐食が進行しているが、中央付近のみ切断痕が観察される。柱掘方b出土。4は、基部径17.1cm、現存長47.4cmで、側面を11～12面前後に面取りしている。基部は腐食が進んでいるが、切断痕を明瞭に残しており、切断されたままの状態で置かれたものとみられる。柱掘方f出土。いずれも樹種同定については、4章－(2）参照。

SA285出土木製品（Fig.37）

柱根（5・6）　5は、基部径11.2cm、現存長43.5cmで、側面の風化が進んでいるが、8面前後に面取りされていたと思われる。基部には切断時の工具痕があり、切断されたままの状態で置かれたと思われる。柱掘方b出土。6は、基部径16.1cm、現存長42.8cmで、側面は大きく風化が進んでいてクラックが目立ち、当初の面をほとんど失っているが、枝部分から当初の大きさがわずかにうかがえる。当初は8面前後に面取りされていたと思われる

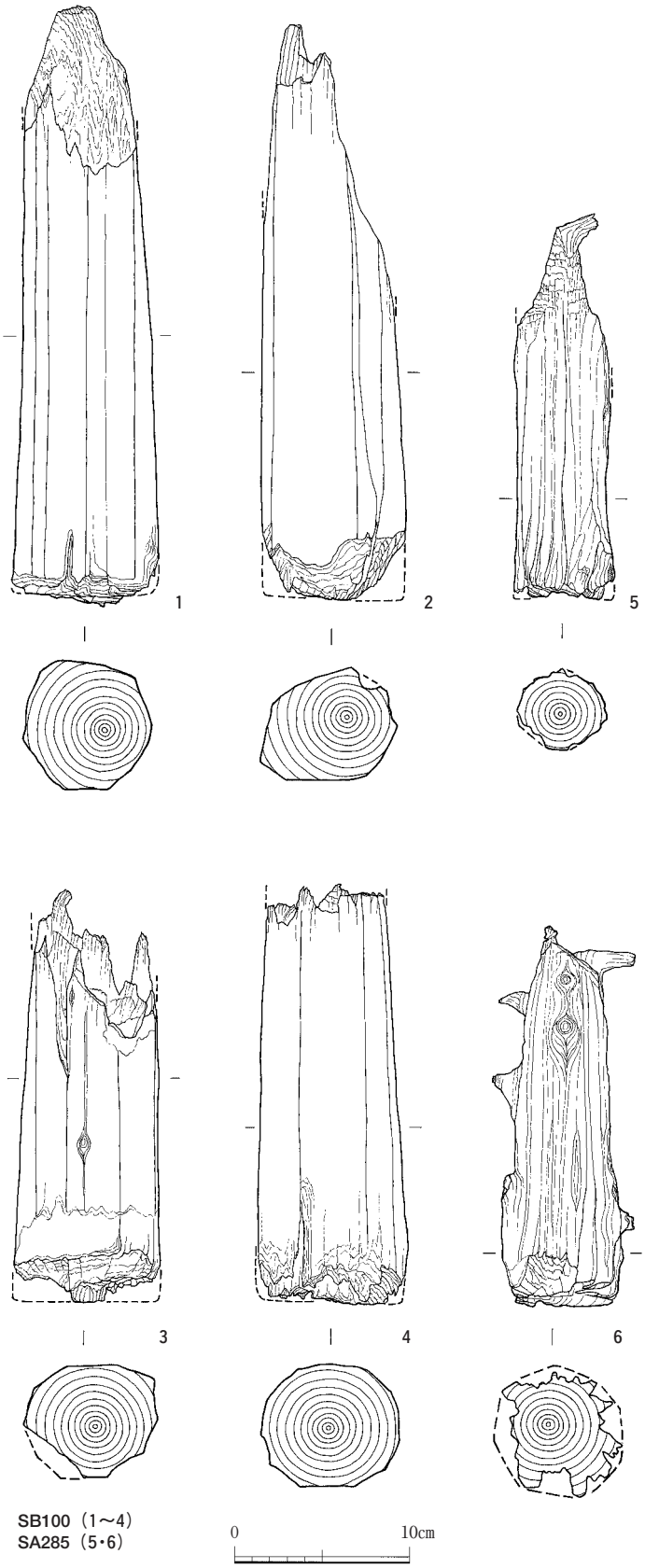


Fig.37　SB100・SA285出土柱根実測図（1／4）

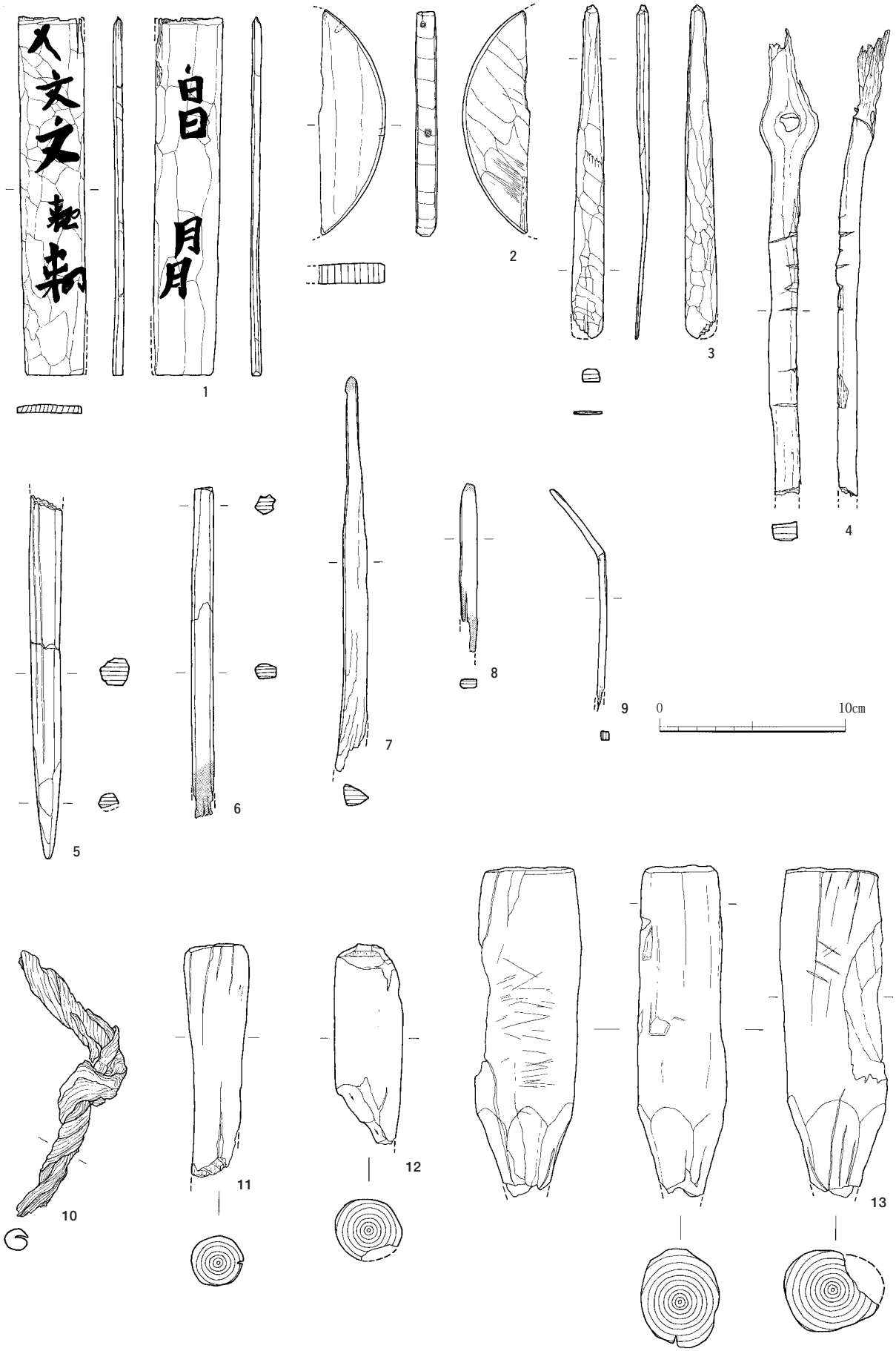


Fig.38　SE200出土木製品実測図（1／3）

が、確定できない。基部には切断時の工具痕が明瞭に残り、切断されたままの状態で置かれたことがわかる。柱掘方a出土。いずれも樹種同定については、4章－(2) 参照。

SE200出土木製品（Fig.38、Pla.20）

木簡（1）　現存長19.3cm、幅3.7cm、厚さ0.5cmで、上部は両面から刃物で切り込みを入れた後に切断されている。文字も上部が切れているので、切断は文字記入の後であることがわかる。他の側面はほぼ当初のもので、表面とともにケズリによって仕上げられる。文字は両面にあり、一面が「文文文　勅勅」、その裏面が「日日　月月」と読める。習書とみられる。樹種はヒノキ（4章－(2) 参照）。明灰色粘土層出土。

曲物底板（2）　現存長12.1cm、現存幅3.6cm、厚さ1.1cm。破面以外は丁寧にケズリ調整で仕上げられる。側面には現状で2箇所の釘穴（径0.4cm、深さ0.6cm）があり、木釘の一部が残存している。また、片面の一部に細かな刃物傷とみられるものが多数残っており、俎板等の台に転用された時期があることを物語っている。明灰色粘土層出土。

籌木（3）　長さ23.7cm、最大幅2.3cm、基部の厚さ0.9cm、先端部の厚さ0.15cmを測る。表面はケズリによって仕上げられ、先端部を薄く削り込む。基部端は面取りをするように丸味を帯びさせて仕上げる。樹種はヒノキ科（4章－(2) 参照）。明灰色粘土層出土。

棒状木製品（4～9）　4は、現状で長さ25.2cm、最大幅3.2cm、厚さ1.0cmを測り、節の部分をそのまま利用した製品とみられ、その部分が円形に広がっており、中央は節が抜けて穿孔部となり、環状を呈している。両端は失われているが、棒状を呈する2面に浅い刻み込みがある。刻み込みは長さや深さは一定せず、その間隔も不揃いである。用途は明らかでない。5は、細い杭状の製品で上部が欠損しているが、現存長19.6cmで、径1.8cmほどの8面ほどに面取りされた棒状のもので、端部は削り込んで鋭利に尖らせている。6は、現存長17.7cm、径1.2cmで、上部は6面ほどに面取りされるが、下部に至ると断面四角形に近づく。先端を欠損する。両端に焼けた跡がある。7は、現存長21.2cmで、先端を失う。基部の細くなった先端は面取りされて丸味を帯び、その部分が焼けている。8は、現存長9.1cm、幅1.0cm、厚さ0.5cmで、残存する端部は面取りされて丸味を帯び、その部分が焼けている。欠損する側も焼けている9は、現存長12.0cmで、一辺0.5cm以下の角材で、途中で折れているが箸とみられる。残存する端部が焼けている。5は明灰色粘土層下層出土、その他は明灰色粘土層出土。

樹皮製品（10）　樹皮のような繊維状のものを捻ったもので、縄のように複数が絡み合っているものではない。現状は「く」字状を呈しているが、今でもやや弾力性がある。現在の長さ14.4cm。明灰色粘土層出土。

杭（11～13）　11は、長さ12.6cm、直径3.5cmで先端を失う。頭部の周囲は丸みを帯びており、殴打したときのものか。12は、長さ10.8cm、直径3.7cmで、先端は大きく一方向から削り込んで端部を形成し、頭部は複数の方向から削り込んで面取りを行なっている。外面は樹皮を剥いだだけの自然面とみられる。13は、現存長17.9cm、直径5.3cmを測るもので、先端を失う。頭部上面は潰れており、打ち込まれた折の痕跡であろう。11・13は明灰色粘土層下層出土、12は明灰色粘土層出土。

SE230出土木製品（Fig.39～46）

枠材以外（Fig.46）は、いずれも暗灰色土層中から出土した。

斎串（1～7）　1は側面に刻みを入れるタイプで、図の右半分と上部は欠損、下端部は半分だけだが鋭利に尖らせていたことがわかる。現存長25.5cm、現存幅1.5cm、厚さ0.3cmで、刻みは1.5～2.0cm間隔で側面にのみ存在し、現状で8箇所が確認される。2～6は、頭部を山形に作り、その側縁部分の上端から切り込みを左右2箇所ずつ入れるものである。先端は鋭利に尖らせており、側面は丁寧にケズリ調整されている。長さは、2が19.1cm、3が20.4cm、4が15.7cm、5が19.1cm、6が15.8cmである。7は、頭部を失うが、2～6と同じタイプであろう。現存長14.9cm。

板状製品（8）　下端を失うもので、現存長14.4cm、厚さ0.4cm。下半部は両側面ともに加工痕がみられ、ここは当初の大きさ（幅1.4cm）と思われるが、上半部は欠損しているため形状は明らかでない。ただし、

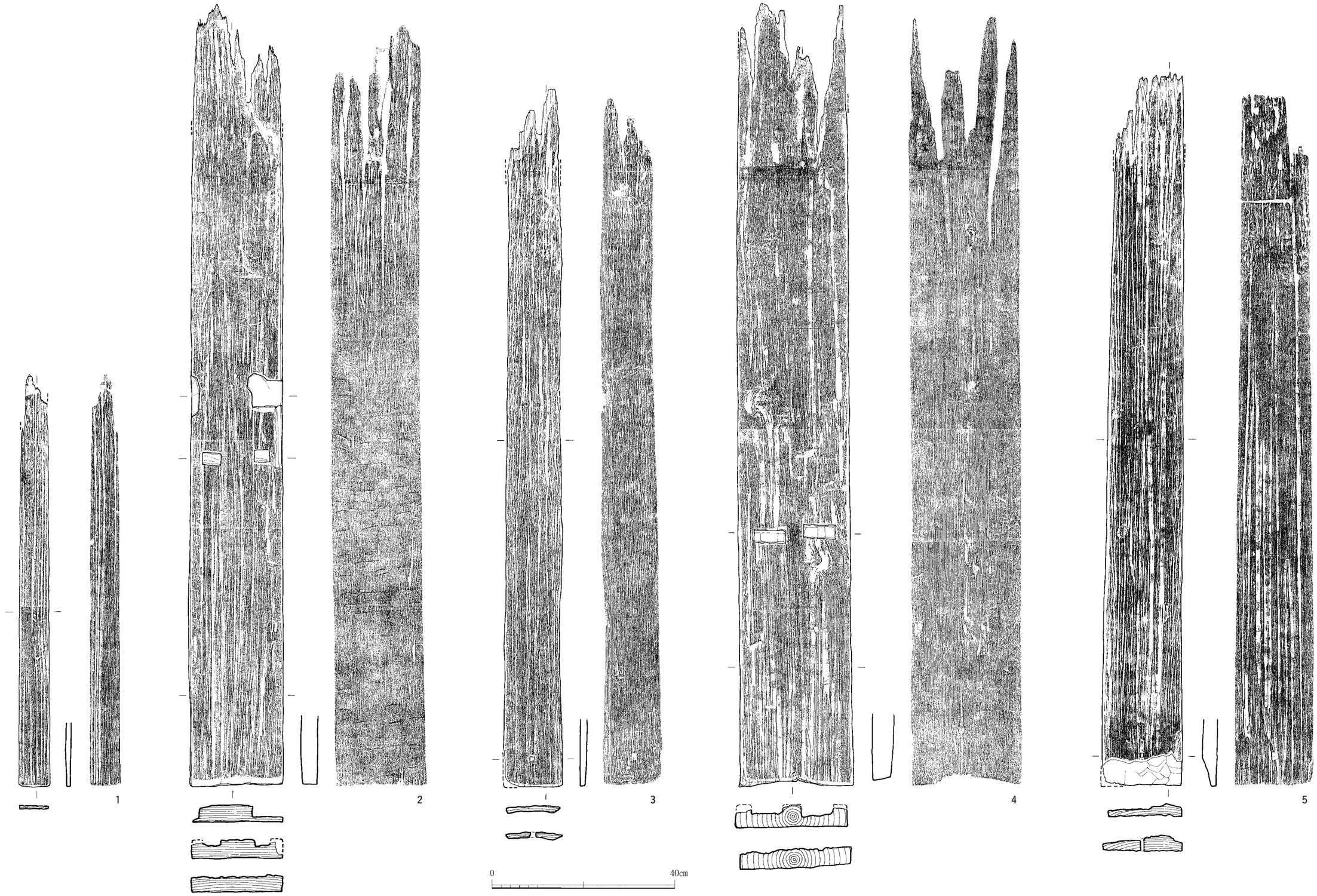


Fig.39　SE230出土井戸枠実測図1（1／8）

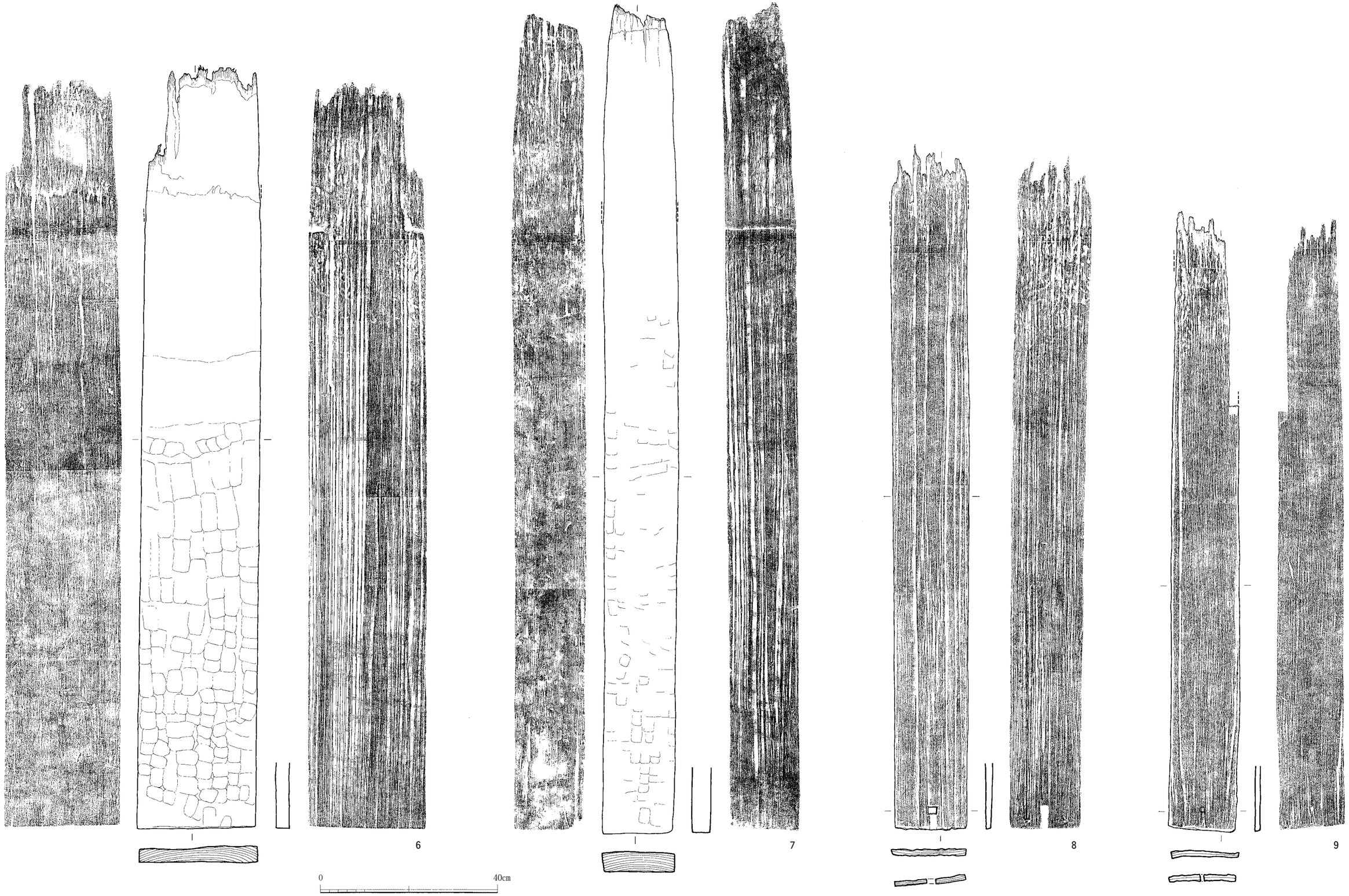


Fig.40　SE230出土井戸枠実測図2（1／8）

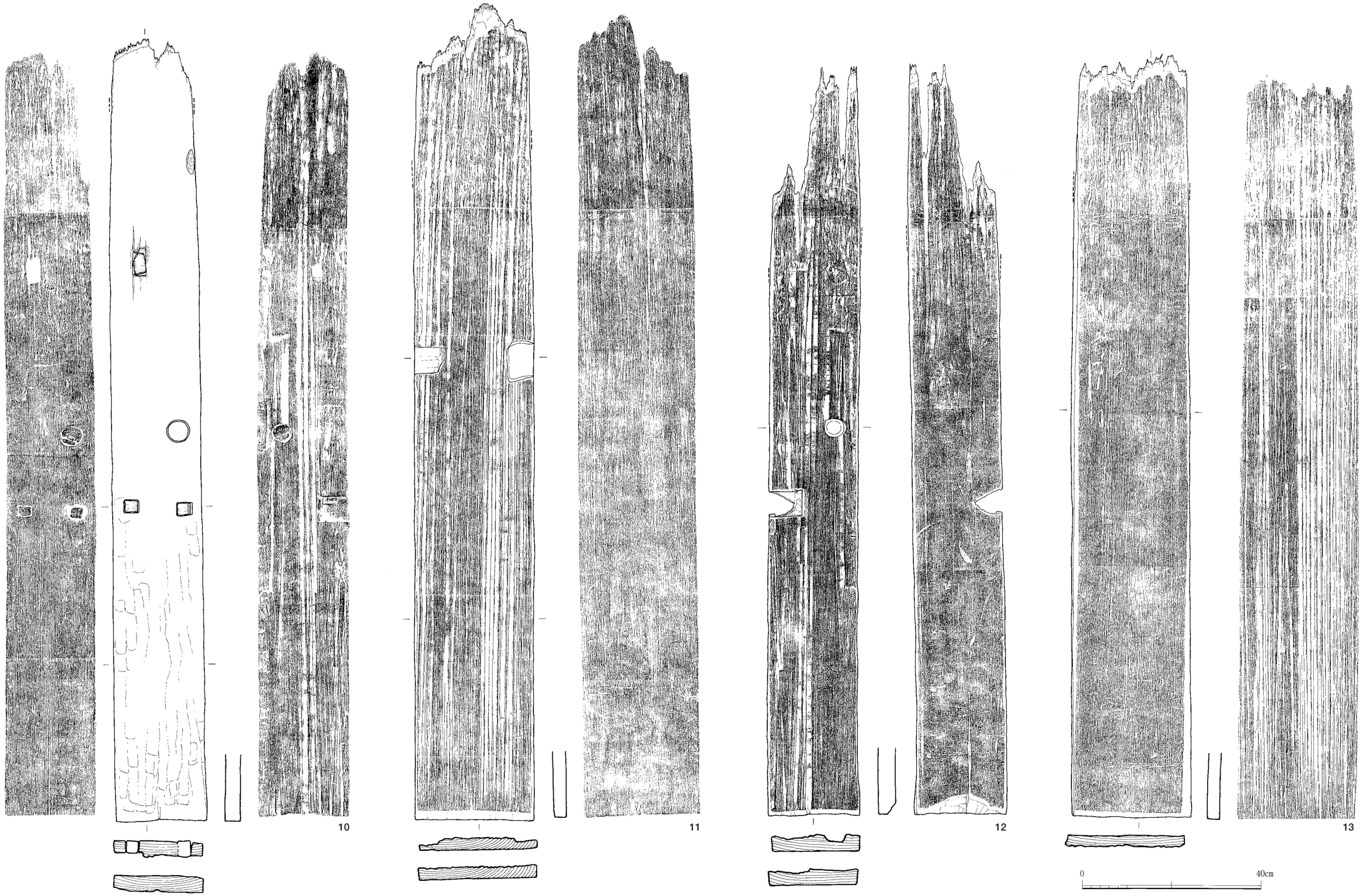


Fig.41　SE230出土井戸枠実測図3（1／8）

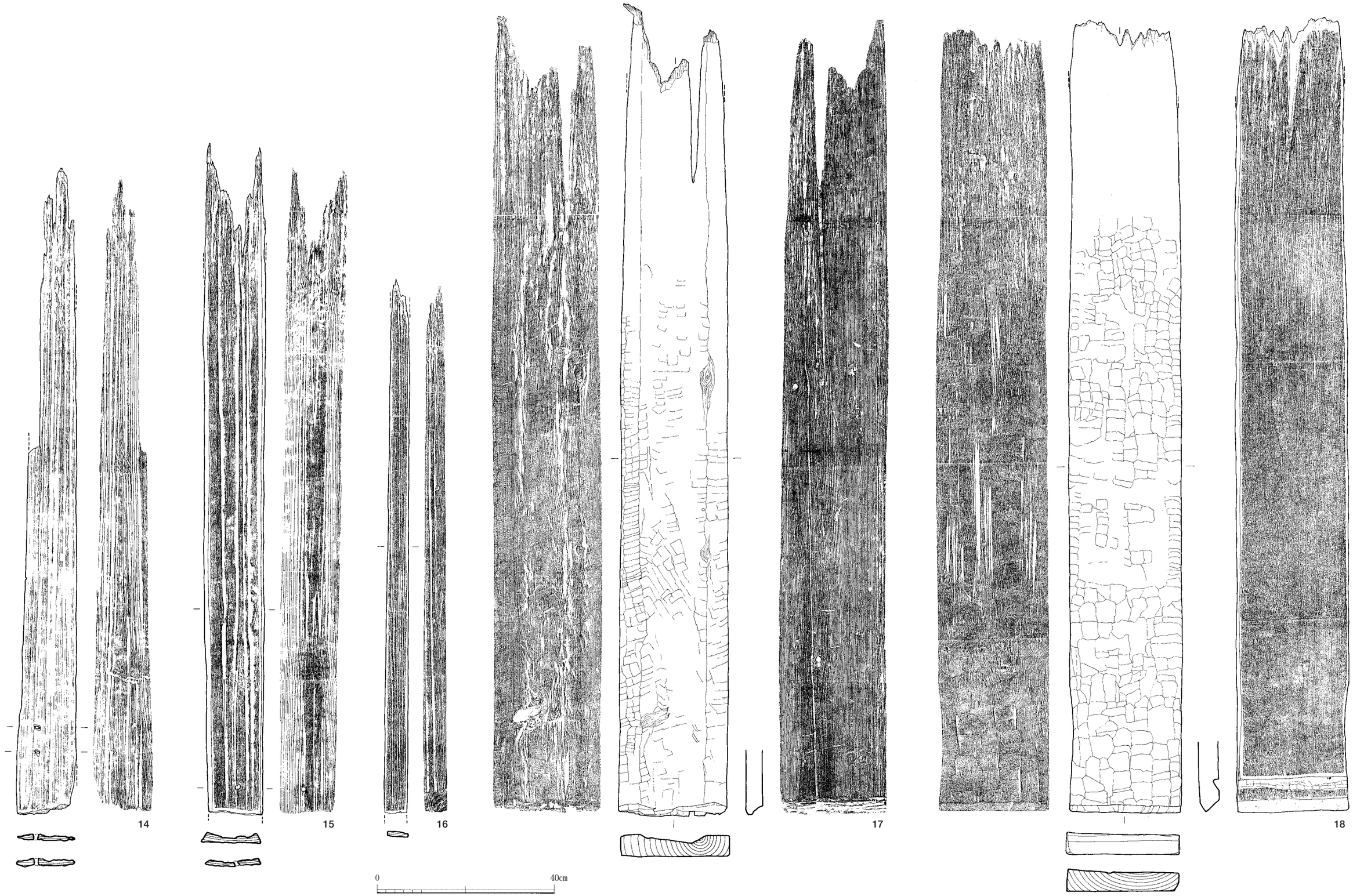


Fig.42　SE230出土井戸枠実測図4（1／8）

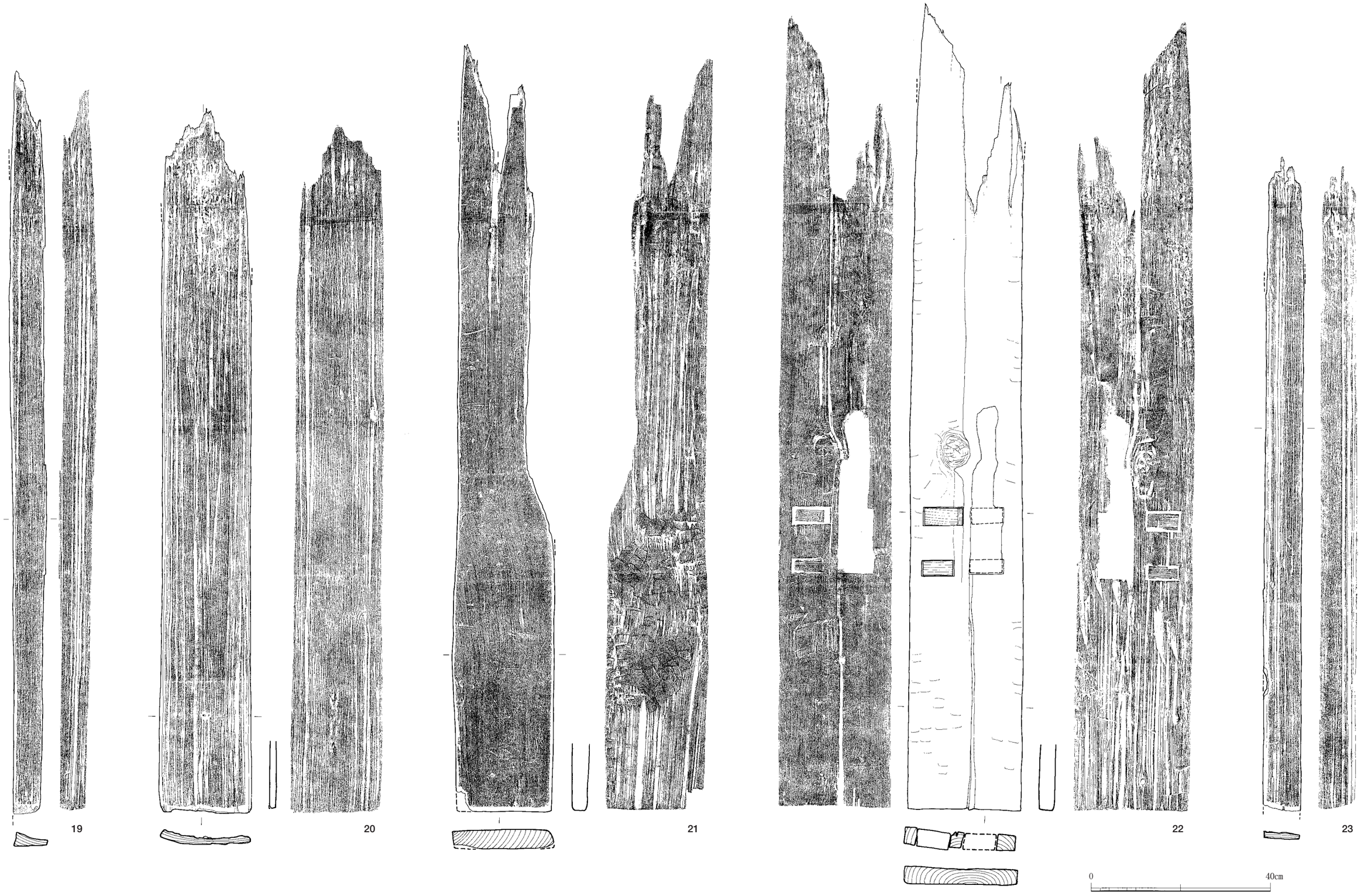


Fig.43　SE230出土井戸枠実測図5（1／8）

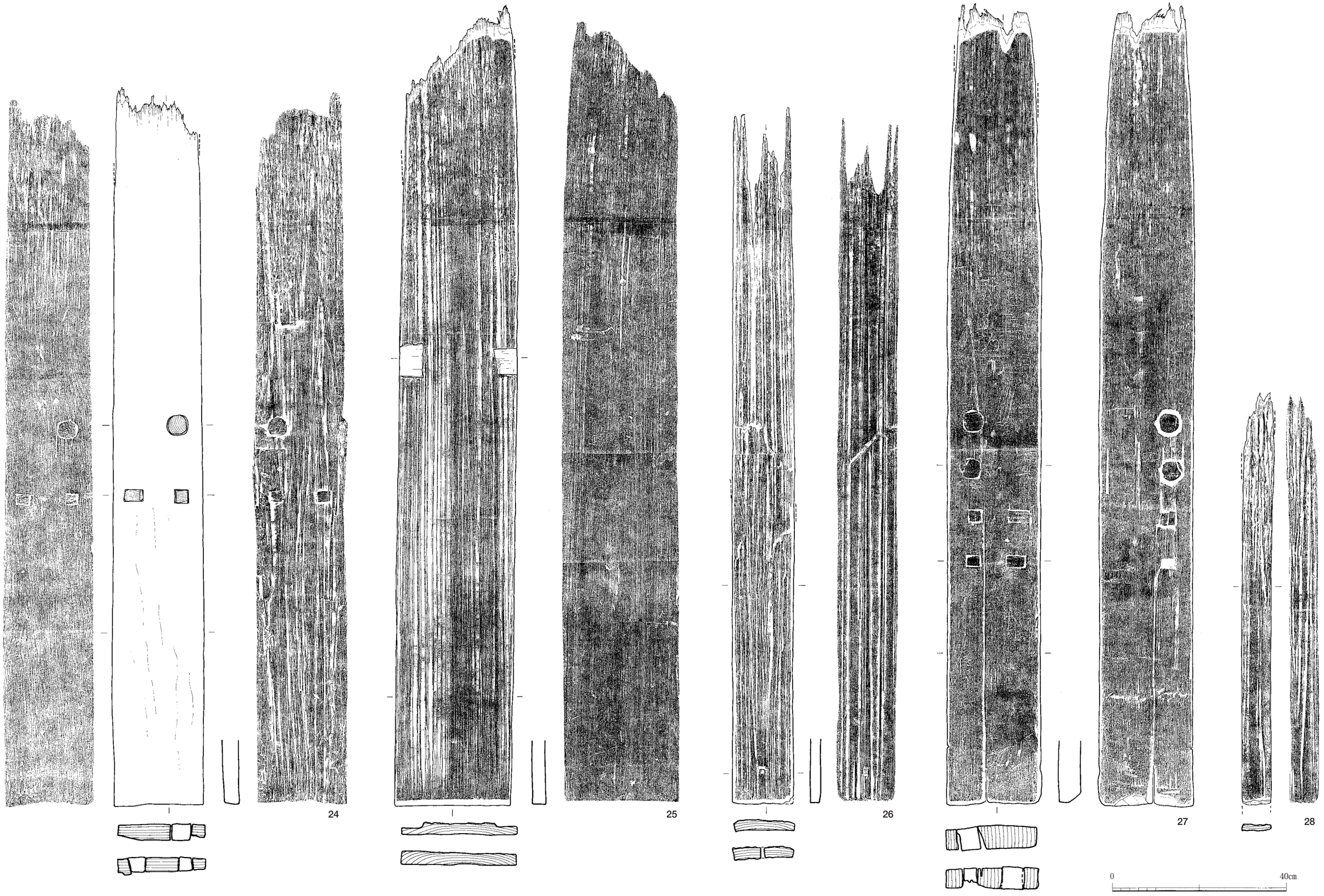


Fig.44　SE230出土井戸枠実測図6（1／8）

上半部中程（上から3.5㎝付近）に釘穴とみられる穿孔部があるが、これも半分が失われている。

刀子柄（9）　刀子が装着されたまま廃棄されたようで、破損しているものの柄も刀身も出土している。柄は長さ18.5㎝で、径1.6㎝前後の円形を呈する。両端は丁寧に加工され、平坦である。表面はケズリによって調整され、片方の小口から刀子を差し込む部分を刳り貫いている。その大きさは小口付近で、上幅0.3㎝、下幅0.2㎝、高さ0.8㎝の台形状で、奥行きは4.5㎝ある。奥は高さ0.6㎝程度と細く作られている。刀子の末端部はそれより長いので、柄に突き刺していたようで、今も末端部分が柄の中に残存している（X線撮影によって残存長確認）。刀子本体よりも刳り貫きがやや大きいので、使用時は楔を用いて固定していたものと推定できる。刀子は鉄製で、復原長13.1㎝、刃部6.0㎝の片刃である。かなり使い込んでいるようで、刃部はかなり消耗している。

曲物底板（10）　残存長10.0㎝、残存幅2.8㎝、厚さ1.0㎝。破面以外は丁寧にケズリ調整で仕上げられる。側面には現状で2箇所の釘穴（径0.3㎝、深さ0.8㎝）があり、木釘の一部が残存している。

棒状製品（11）　現存長8.0㎝、幅2.0㎝、厚さ1.2㎝で、断面形状が歪な楕円形を呈している。表面はケズリによって丁寧に調整され、端部も平坦に加工されている。刀子の柄のようなものと想定できよう。

折敷底板（12）　長さ35.1㎝、現存幅13.1㎝、厚さ0.7㎝の板材で、側縁部に3箇所の穿孔がある。穿孔は2穴が対になっており、桜皮を通して何かを留めたものとみられ、1箇所に桜皮が通された状態で残存している。ただ、穿孔は一辺にしかなく、他の残存する二辺にはみられないため、折敷と断定するのは難しいかも知れない。板面には方向性が一定しない、かなり細かな刃物傷が多数残っているが、二次利用した折のものであろう。

井戸枠材（Fig.39～45－1～36）　1～8は北壁に使用されていたものである。1は現存長89.8㎝、幅6.8㎝、厚さ1.0㎝。2は現存長170.2㎝、幅20.8㎝、厚さ4.2㎝。下端部から180㎝付近に幅約3㎝×4㎝、深さ1.5㎝で方形の刳り込みがある他、下から2.1m付近には深さ2.3㎝前後でやや大きめの方形の刳り込みがある。いずれも井戸枠転用前の造作とみられる。3は現存長151.3㎝、幅13.0㎝、厚さ1.7㎝。下端部から15㎝の位置で板の中央部には1㎝四方の穿孔がある。4は現存長170.8㎝、幅24.5㎝、厚さ4.8㎝で、下端部は切断後粗く削り調整されていてやや凹凸が目立つ。下から135㎝のところに、7×3㎝、深さ約2㎝の方形の刳り込みがあるが、井戸枠転用前の造作とみられる。5は現存長154.9㎝、幅17.2㎝、厚さ3.6㎝で、下端部は片面のみ斜めに削り調整されている。3と同様に下から15㎝の位置で板の中央部には1㎝四方の穿孔がある。6は現存長171.1㎝、幅27.0㎝、厚さ3.9㎝で、表面には削り痕が明瞭に残存している。7は現存長186.4㎝、幅17.1㎝、厚さ4.7㎝で、表面には削り痕が明瞭に残存している。8は現存長153.7㎝、幅17.5㎝、厚さ2.2㎝で、下端部から10㎝の位置で板の中央部には1.5×2.0㎝で方形の穿孔がある。

9～16は、東壁に使用されていたものである。9は現存長139.1㎝、幅16.0㎝、厚さ1.8㎝で、下端部から12㎝の位置で板の中央部には約1.0㎝四方の穿孔がある。10は現存長174.1㎝、幅20.3㎝、厚さ4.9㎝。下端部から68㎝付近に2.7×3.3㎝で方形の貫通する穿孔部があり、中にほぼ同寸の別材を埋めている。その約15㎝上位には直径5.0㎝の穿孔があり、やはり同寸の別材で埋めている。井戸枠に転用するにあたって、埋木を施したものであろうか。なお、下から1.3㎝付近にある方形の穿孔部には埋木はなされていない。板材の表面は削り調整の痕跡が明瞭である。11は現存長182.1㎝、幅27.0㎝、厚さ2.7㎝。下端部から約100㎝の位置に方形で深さ0.8㎝の穿孔部がある。下端部の片面はわずかに面取りされている。12は現存長166.8㎝、幅21.3㎝、厚さ3.7㎝。下端部から70㎝付近に長方形の切欠部があり、その上位約15㎝のところには、直径4.8㎝、深さ1.6㎝で円形の穿孔部がある。下端部の片面中央付近に削りによる粗い調整がみえる。13は現存長169.3㎝、幅27.6㎝、厚さ2.6㎝。14は現存長144.4㎝、幅13.2㎝、厚さ1.9㎝。下端部から15㎝と20㎝の2箇所に0.5×0.7㎝で方形の穿孔がある。15は現存長150.0㎝、幅14.3㎝、厚さ1.8㎝下端部から15㎝の位置に1.0㎝四方の穿孔がある。16は、現存長119.7㎝、幅5.2㎝、厚さ1.2㎝。14～16の下端部は破断面のままで、調整されていない。

17～21は南壁に使用されたものである。17は現存長181.8㎝、幅25.4㎝、厚さ5.1㎝。下端部は斜めに切断されたままの状態で工具痕が明瞭に残る。表面も削り調整を行った痕跡が明瞭である。18は現存長

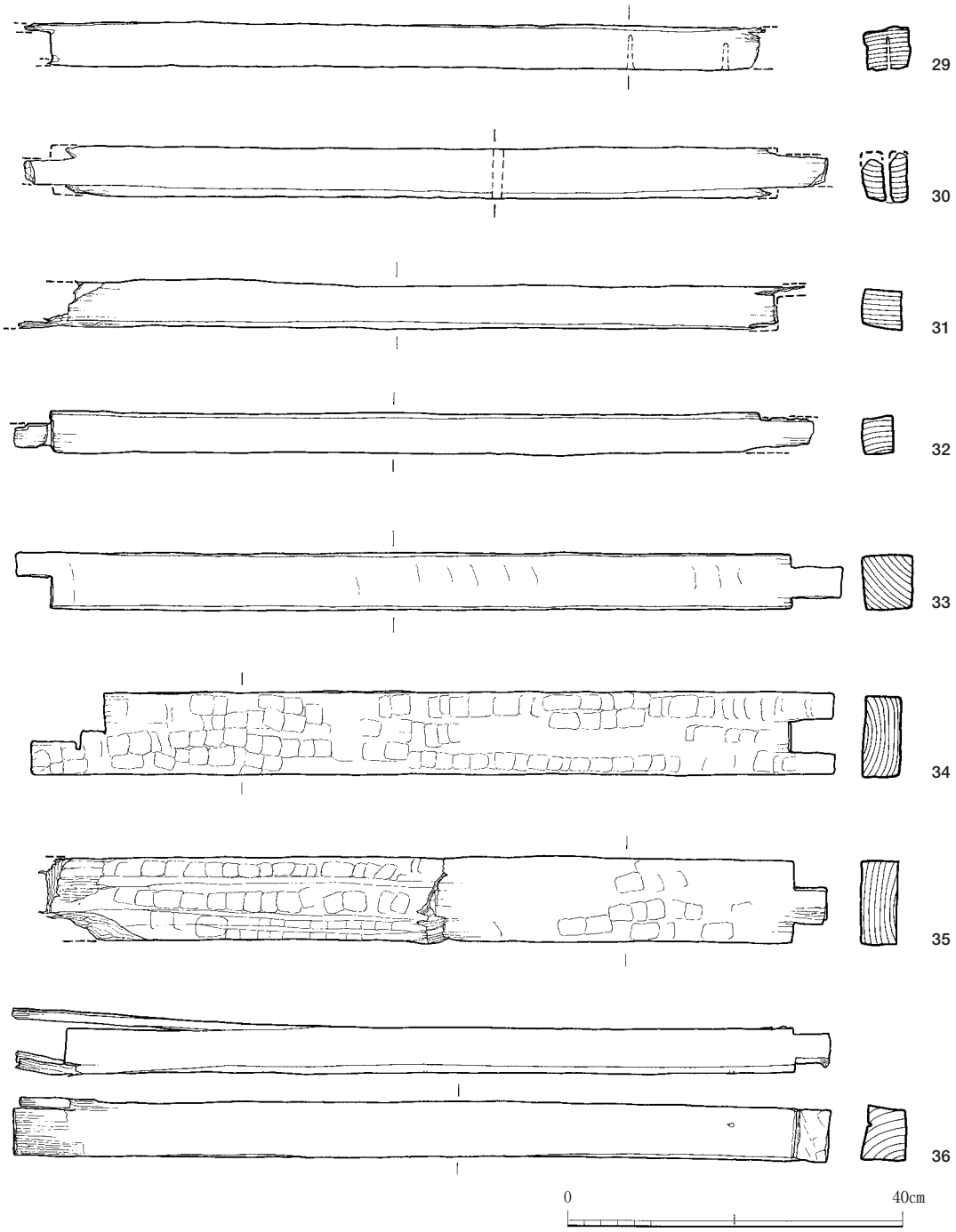


Fig.45　SE230出土井戸枠実測図7（1／8）

177.5cm、幅25.3cm、厚さ5.1cm。下端部から6cm付近に幅約2cmで断面三角形になる溝状の彫り込みがある。端部は両面から斜めに削り込まれており、表面には削り調整の痕跡が明瞭に残る。19は現存長166.4cm、幅8.3cm、厚さ3.0cm。下端部は調整されていない。20は現存長156.5cm、幅20.7cm、厚さ3.5cm。21は現存長170.4cm、幅22.6cm、厚さ4.5cm。

22～28は西壁に使用されていたものである。22は現存長179.0cm、幅26.0cm、厚さ5.0cm。下端部から54cmと64cmの位置に、長方形の穿孔がそれぞれ2箇所（片側は欠損）あり、残存する側にはそれぞれ埋木

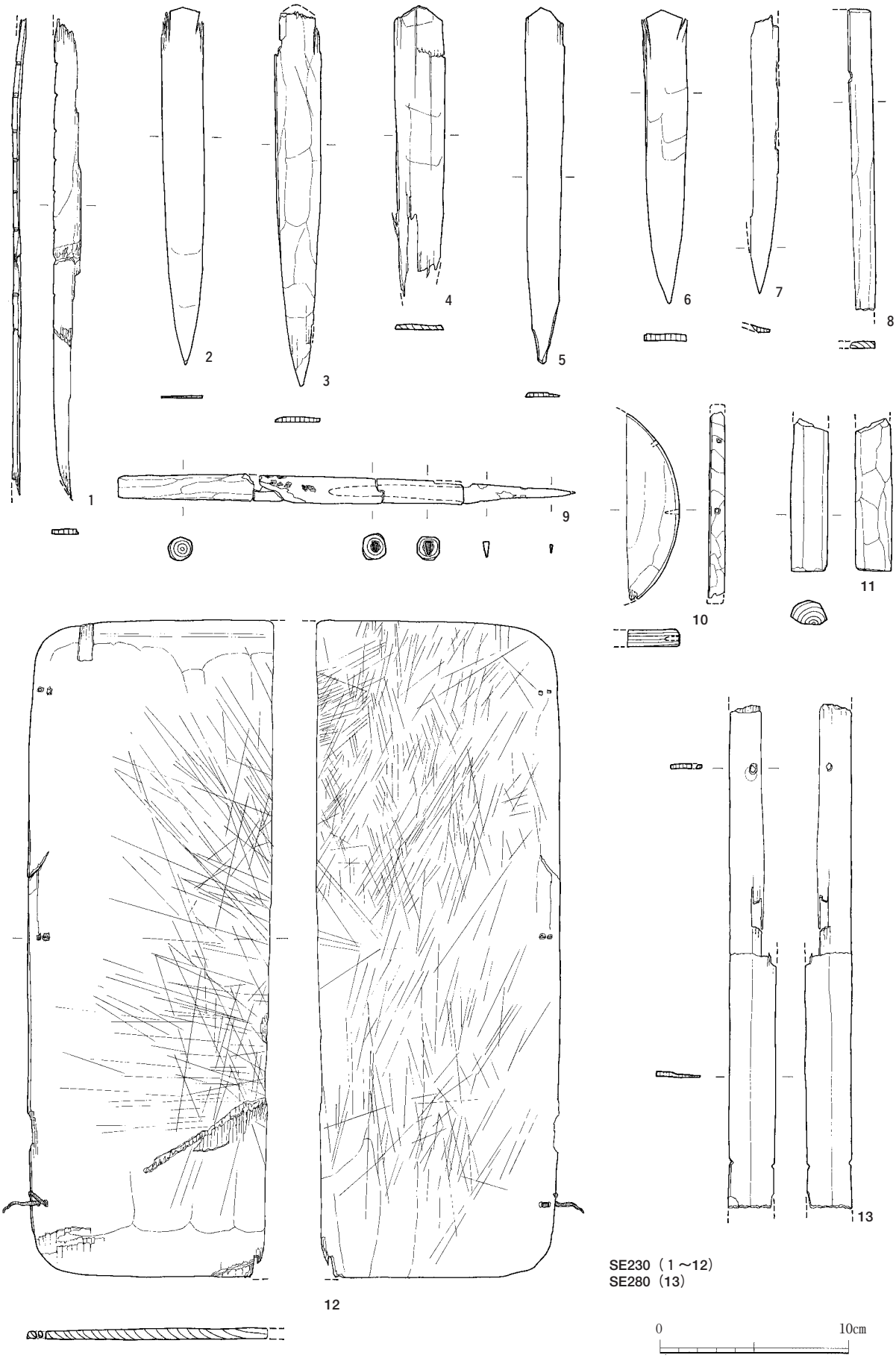


Fig.46　SE230・280出土木製品実測図（1／3）

が行なわれている。23は現存長145.5cm、幅8.6cm、厚さ1.7cmで、下端部は破断面のままである。24は現存長165.0cm、幅20.6cm、厚さ4.0cm。下端部から72cmの位置に3～4cm四方の穿孔があり、埋木が施されている。さらにその上約15cmの位置には直径4.9cmで円形の穿孔があり、やはり同寸の材で埋木がなされている。25は現存長183.5cm、幅27.7cm、厚さ3.0cm。下端部から約100cmの位置に、長方形で深さ0.8～1.5cmの刳り込みがある。26は現存長157.9cm、幅14.2cm、厚さ3.3cm。下端部から7cmの位置に1.1×1.2cmで方形の穿孔がある。27は現存長183.0cm、幅21.7cm、厚さ5.4cm。下端部から56cmと66cmの位置に長方形の穿孔がそれぞれ2箇所あり、同寸の材で埋木がなされる。さらにその上位8cmと18cmの位置に直径5.0cm程度で円形の穿孔があり、やはり同寸の材で埋木がなされている。また、下端部の片側は斜めに削り込まれている。28は現存長95.0cm、幅6.8cm、厚さ1.7cmで、下端部は破断面のままである。

29～36は横桟の部材である。いずれも端部を欠損するものが多く、最も残存率のよい34をみると、長さ95.2cm、幅10.0cm、厚さ4.6cmで、端部をコ字形に切り込んで噛み合わせるように作っている。表面には削りの痕跡を明瞭に残す。上位の材は下位の材よりかなり細く、一辺5cm前後である。29～32は上位の桟で、図番号の順に北・東・南・西、33～36は下位の桟で、同様に北・東・南・西の部材である。

SE280出土木製品（Fig.46）

板状製品（13）　両端および側縁の一部を失う。現存長27.0cm、幅2.5cm、厚さ0.3cmで、上部に径0.3cmほどの穿孔部があり、下半部の両

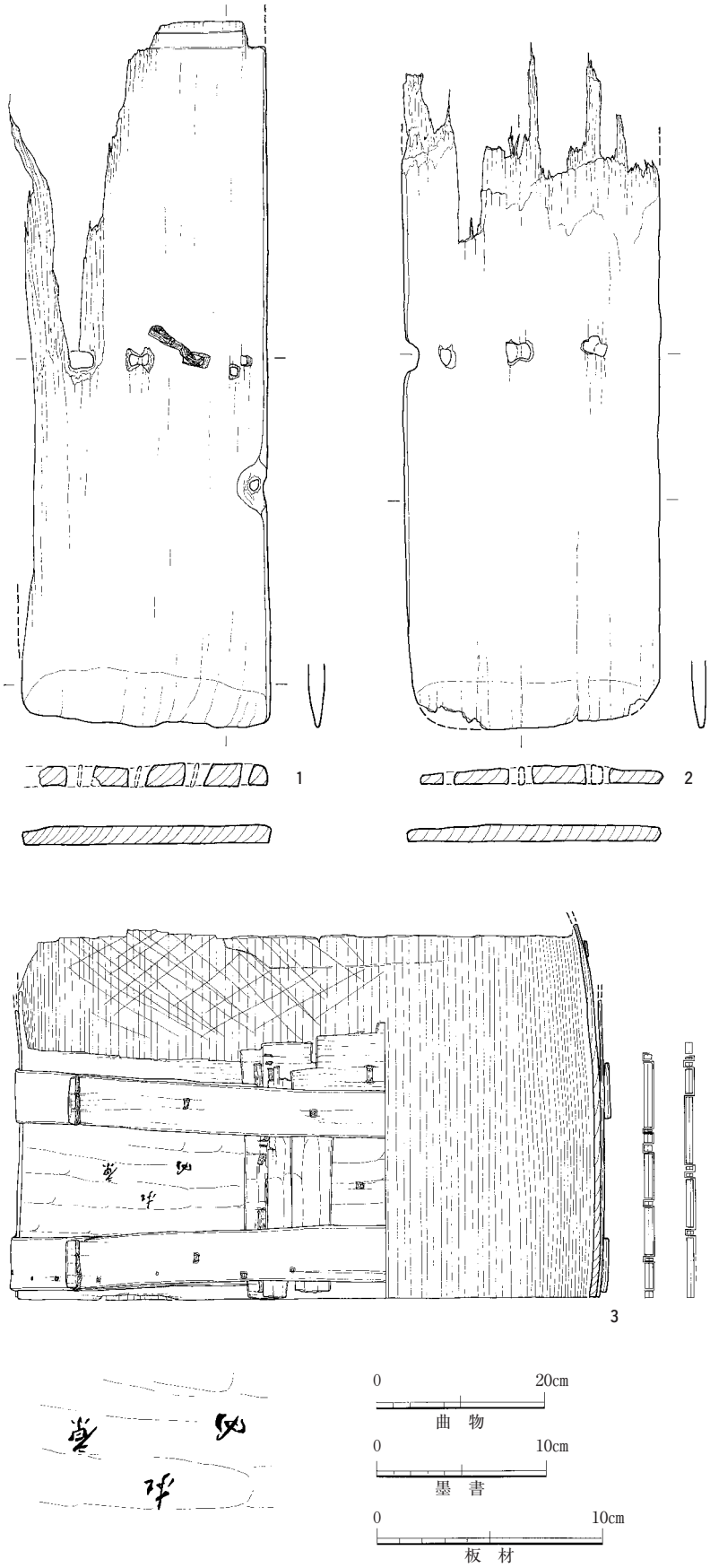


Fig.47　SE310出土木製品実測図（板材1／3、曲物1／8、墨書1／4）

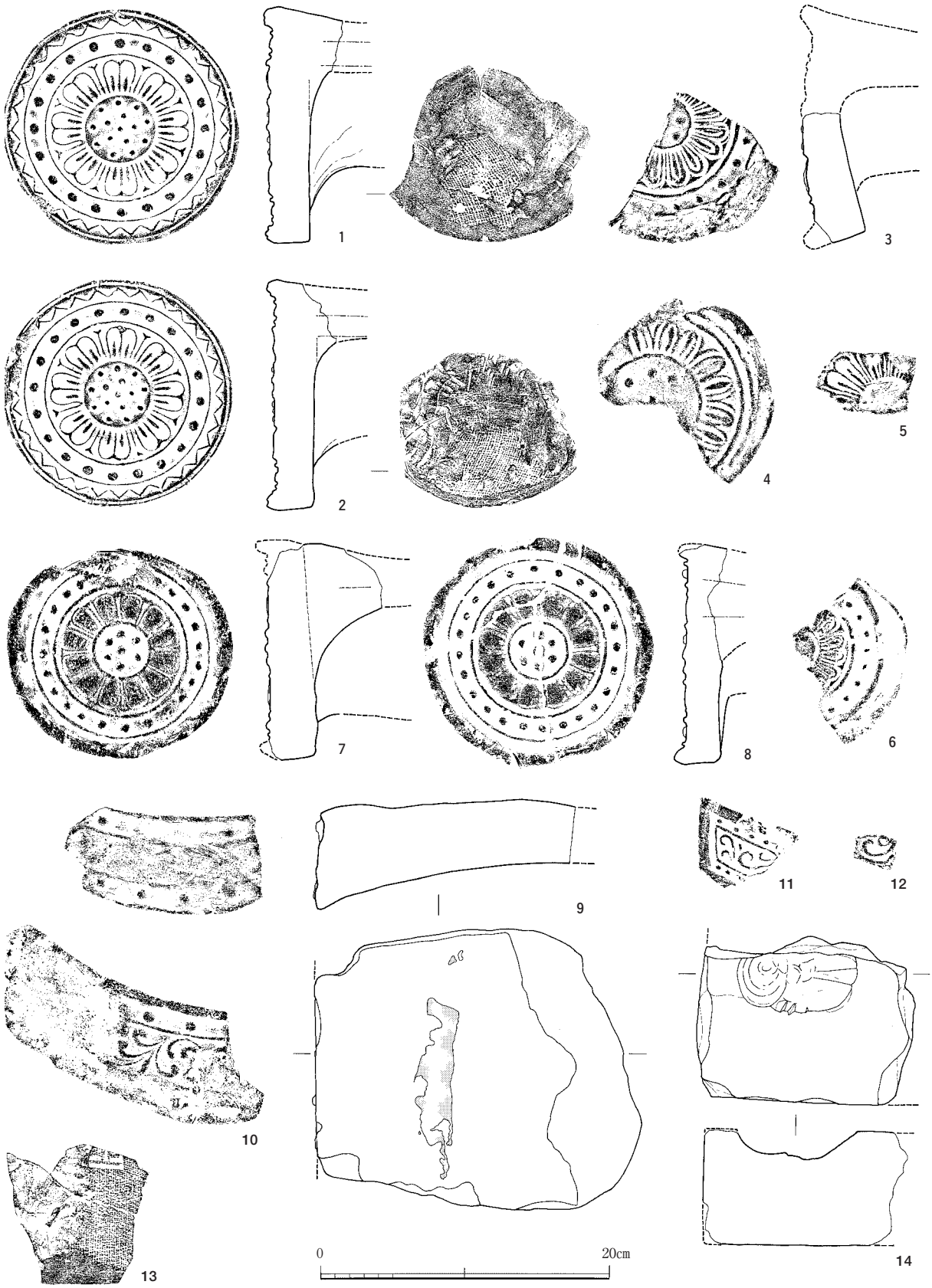


Fig.48　調査地出土瓦・塼実測図・拓影（1／4）

側縁部にそれぞれ1箇所の刻み込みがある。刻みは対になっている。木簡の可能性も残るが現状では積極的に評価できない。枠内出土。

SE310出土木製品（Fig.47）

板材（1・2）　井戸枠の敷き板として転用されていたもので、上端が腐食して失われている。いずれも下端部を両側から薄く削り込んで刃状にしている。そこから上へ約16.5cmの位置には一列に並ぶ穿孔があり、1では4箇所、2でも4箇所（ただし半欠のものを含む）が確認される。穿孔は2穴が対になっていたと思われるが、そのほとんどが腐食して欠損し、1穴のように見えている。1の穿孔部に桜皮とみられるものが残存しており、何かを綴じ合せていた部材であることがわかる。さらに1の上部付近には板材に直交して2条の沈線が0.7cmの間隔をおいて並行して刻まれており、ケビキされたものとみられる。下位側のものは深さ0.3cmに及んでおり、かなり深めである。1は、現存長31.4cm、現存幅11.1cm、厚さ1.1cm。2は、現存長30.5cm、幅11.5cm、厚さ0.9cm。

曲物（3）　井戸底に置かれていたもので、直径70.5cm、残存高43.8cmを測る。厚さ0.8cmの薄い板の内側に細かな切り込みを入れて曲げ、重ね目を桜皮で綴じ合せている。さらにその外側に箍をはめている。箍は本体同様に重ね目を桜皮で綴じ、箍の中程に小さな穴を穿って木釘及び桜皮を使って曲物本体と接合している。木釘は、穿孔した後に片方から固定される地点まで差込み、両端を切り揃えたものであろう。箍は2箇所残存しているが、当初は3箇所以上あったものと思われる。箍の間の本体部分に、「原」、「松」か、「町」か、の墨書がかすかに残っている。現在の図は出土時の上下で配置しているが、墨書文字は天地が逆転している。曲物としての使用時に書されたものであろう。

C）瓦類

軒丸瓦（Fig.48、Pla.21）

1は、複弁八葉蓮華文で瓦当径16.4cm。瓦当部外周は粗いナデ仕上げ、丸瓦との接合部上面は縦方向のケズリである。瓦当裏面は丸瓦との接合部に若干の支持粘土をおいてナデにより成形する。ナデられなかった中央部付近には布目痕が残っている。6301J型式で、SX369出土。2は、1と同笵とみられ、瓦当裏面に布目痕が残る。また、丸瓦との接合はナデだけでなく、何らかの工具で押さえた痕跡がある。淡茶色土層出土。3は6284型式で、瓦当裏面は強いナデである。SX383出土。4は、複弁八葉蓮華文だが、間弁は彫られていない。外区は2条の圏線で、中房の蓮子は1＋8とみられる。周縁部分が不明瞭だが、6225形式だろう。SX265出土。5は複弁蓮華文で、SD010上層出土。6は複弁八葉蓮華文。6238形式か。SD041出土。7は単弁十二葉蓮華文で、外区の珠文は24個。中房の蓮子は1＋6である。瓦当裏面の丸瓦との接合に用いる支持粘土はかなり厚く、その表面はヘラ状の工具で強くナデる。6139A型式。SX016出土。8は7と同笵とみられるが、蓮華文部分がかなり劣化している。SE230暗灰色土層出土。

軒平瓦（Fig.48、Pla.21）

9は、文様が不鮮明で判断不能。ただ、顎部と平瓦部との境目付近（瓦当面から7·0～9.5cm付近）に赤色顔料が帯状に付着している（4章－(1) 参照)。特に奥側（瓦当面と反対側）は概ね直線状を呈してお

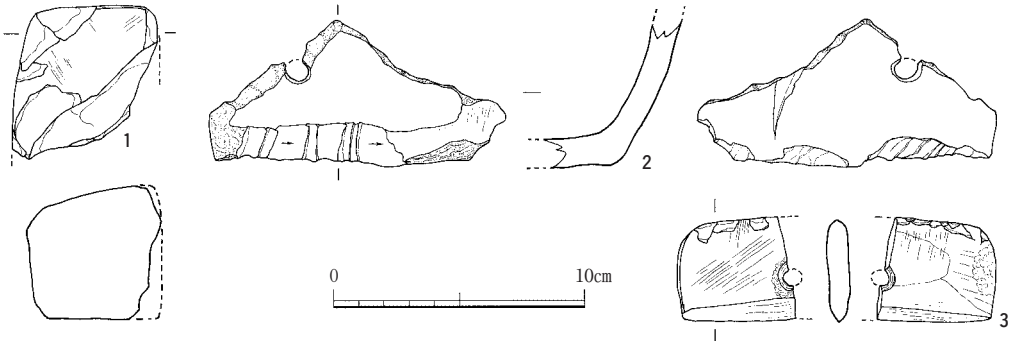


Fig.49　調査地出土石器・石製品実測図（1／3）

り、ここに芽負が存在したと思われる。SK001暗灰色粘土層出土。10は均整唐草文。6732型式。淡茶色土層出土。11は6721型式で、SX103出土。12は唐草文の一部で、SD010上層出土。

平瓦（Fig.48）

13は、凹面に「西」のスタンプがある。凸面は並行する縄叩き目。SE230暗灰色土層出土。

D）石製品（Fig.49）

砥石（1）　現存長6.1㎝、厚さ5.3・5.9㎝。破損面以外は全面研磨に使用された形跡がある。軟質の凝灰岩か。SB300柱掘方a出土。

石鍋加工品（2）　滑石の石鍋底部を再加工したもので、体部に径0.8㎝の穿孔がある。破面のほぼ全部でケズリもしくは研磨のような加工が施されており、割れた自然面を残すところは少ない。なお、外面には煤が付着しており、外面底部と体部の境目にみられる破損は鍋としての使用時における破損で、煤が付着している。SD001茶灰色土層出土。

石包丁（3）　残存長4.3㎝、幅4.3㎝、最大厚0.9㎝。穿孔は両面から穿たれ、穿孔前にその周辺を小さく打ち叩いた痕跡がある。軟質の凝灰岩か。SX277出土。

4. 自然科学分析

(1) 平城京右京一条三坊一坪出土瓦に付着した赤色顔料の調査

北 野 信 彦

1、はじめに

平城京右京一条三坊一坪の発掘調査の結果、西隆寺の建造物群に使用されたと考えられる奈良時代後期頃の軒丸瓦などの瓦類が多く出土した。このうちの軒平瓦１点には、瓦胎部に赤色顔料のハケ塗り痕跡が確認された。これは、建造物の軒貫部材を外観塗装する際に軒貫部材と接した軒平瓦の瓦胎部にも塗装材料である赤色顔料が付着したハケ塗り痕跡である。このような出土瓦におけるハケ塗り痕跡である赤色顔料の存在は、現在では存在しない往年の建造物の外観塗装の状況を知る上でも極めて有効な資料となりうる（写真1参照）。

今回、元興寺文化財研究所のご好意によりこの赤色顔料について文化財科学的な調査を行う機会を得た。さらに、本資料とほぼ同時期の元興寺僧房の建造物群に使用されたと考えられる同様のハケ塗り痕跡である赤色顔料が確認された元興寺本堂周辺出土軒平瓦３点についても同様の調査を行なった。本報では、これらの調査結果を報告する。

写真1　部材と接した軒平瓦と赤色顔料

2、調査対象試料

（試料1）西隆寺跡出土軒平瓦に付着した赤色顔料

平城京右京一条三坊一坪の発掘調査では、西大寺寺域の東に隣接する西隆寺跡関連の遺構・遺物が数多く出土した。このうちのSK001遺構は中世期土抗ではあるが、奈良時代末には埋没したと考えられる一条北大路南側溝である東西溝を潰して掘削されているため、ここからの混入品も多い。本試料である赤色顔料が付着した軒平瓦は、葺き替えなどに再利用された可能性も皆無ではないものの、出土状況からみてその可能性は低いものと想定されている。そのため、基本的には奈良時代後期頃に建造された西大寺もしくは西隆寺寺域内建造物に葺かれた瓦であり、ここに付着した赤色顔料である本試料は創建当時における建造物部材の外観塗装材料であると考えられる（写真2）。

写真2　試料1の赤色顔料付着軒平瓦

（試料2）元興寺僧房出土軒平瓦に付着した赤色顔料

元興寺極楽坊である本堂および禅室の昭和の解体修理では、建造物の基礎構造を確認するための事前の発掘調査が行なわれた。その際、土器や五重小塔取替え部材や柿経・納骨五輪塔などの木製品などとともに、制作年代が奈良時代に比定される八葉蓮華文軒丸瓦や、「唐草紋、上辺そろばん型珠文帯、下辺鋸歯文帯」の瓦文様がある軒平瓦などが出土した。この軒平瓦の1点には、建造物に外観塗装された赤

写真3-1　試料2-1の赤色顔料付着軒平瓦

写真3-2　試料2-1の赤色顔料付着軒平瓦

色顔料が瓦胎部にハケ塗り痕跡として明確に確認されており、これを試料2-1とした（写真3-1,3-2）。

この軒平瓦には直接「昭和廿七年六,十二　東方南側坊端の東　ハ十一　ハ十三の中間取通　地下六寸」という墨書が直接記述してあり、この資料が本堂南側外陣床下から出土したことがわかる。また、屋根葺き替え作業で取り替えられた奈良時代の軒平瓦の中にも、赤色顔料のハケ目付着が認められる資料が二点見出されており、現在総合収蔵庫内に展示されている。今回、これらの瓦に付着した赤色顔料もそれぞれ試料2-2,2-3とした（写真4-1,4-2,5）。

3、調査方法

（1）　調査対象試料である赤色顔料の採取

赤色顔料の付着が明確に観察される軒平瓦について、まず瓦表面の土壌をエタノール液を用いてクリーニングした後、残存状態が良好な部分3箇所から1～2㎜角の赤色顔料の剥落片を注意深くサンプリングし、これを電子顕微鏡観察およびEPMA分析用のカーボンテープ上に固定して分析試料として供した。

写真4-1　試料2-2の赤色顔料付着軒平瓦

写真4-2　試料2-2の赤色顔料付着軒平瓦

写真5　試料2-3の赤色顔料付着軒平瓦

（2）無機元素の定性分析

各試料の成分分析は、あらかじめ分析用カーボンテープに固定した分析試料を（株）堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置に装着し、電子線（X線）を照射して特性X線を検出した。設定条件は以下の通りである。分析設定時間は600秒、試料室内は真空状態、X線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240μAおよび20μA、検出強度は16.000cps、定量補正法はスタンダードレス。

（3）赤い色相の測色測定

各試料の赤い色相の測色は、本来ならば機器分析装置である測色計などを用いてL*、a*、b*で表示し、a*/b*で客観的数値として算出した上で比較検討を行なうべきものである。しかし、本報が調査対象とした赤色顔料はいずれも出土軒平瓦に僅かに付着残存した状態で肉眼観察されている。そのため、かなり微小部径の計測を行なわなければ出土瓦本体の胎土の色相を同時に測定する恐れがある。この点を考慮に入れ、本調査では測色計計測による客観的数値の計測は行なわず、新版標準土色帳のマンセル標示色見本（農林水産省農林水産技術会議事務局　監修・日本色彩研究所　色表監修；1991年版）と各試料の色相を自然採光条件下で比較して基本的な赤い色相のグルーピング作業を行なった。

（4）個々の赤色顔料における粒子形態の高倍率画像観察

赤色顔料の粒子形態の観察には、サンプリングした分析試料のなかで赤色顔料が良好に残存した部分を実体顕微鏡および金属顕微鏡で確認した後、走査型電子顕微鏡で画像（SEM画像）観察した。各試料は、カーボン台に取り付け、まず100倍～2,500倍の低倍率観察を走査電子顕微鏡（日立製作所製S-415型）にエネルギー分散型X線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー）（堀場製作所製 EMAX-2000型）を連動させて、鉄（Fe）がマッピング検出される部分を中心に画像観察した。分析設定時間は600秒である。次に、個々の顔料の粒子形態を詳細に観察するために各試料はカーボン台に固定した上で金蒸着させ、50,000倍の高倍率画像観察を行なった。調査は、（株）日立ハイテクノロジーズ分析センターにおいて、日立製作所製S3000型およびS-3500N型走査電子顕微鏡を用い、赤い色相の物質の集積が良好でありかつ附設の（株）堀場製作所EX-300型のEDX分析で鉄（Fe）がマッピング検出された部分を中心に観察した。

4、調査結果

各試料の赤色顔料の無機元素を定性分析した結果、いずれの試料もシリカ（Si）、チタン（Ti）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）などの夾雑物も多いものの、基本的には鉄　（Fe）の特性X線が強く検出された。そして水銀（Hg）および硫黄（S）や鉛（Pb）は検出されなかった（図1,2,3）。そのため、いずれの試料も朱（辰砂もしくは水銀朱；HgS）や鉛丹（四酸化三鉛；Pb_3O_4）顔料ではなく、酸化鉄の赤い色相を基調としたベンガラ（酸化第二鉄；Fe_2O_3）顔料であると理解した。

次に、各試料の色相を金属顕微鏡を用いた200～400倍の低倍率観察した結果、やや赤い色相に乏しい感もある赤い（オレンジ色系）の色相であった（写真6,7）。さらに個々の顔料粒子の形態を詳細に調査するために、電子顕微鏡を用いた50,000倍の高倍率画像観察を行った。調査の結果、いずれの赤色顔料の個々の粒子形態や集合状態ともに、極めて不定形の集合体が見出された（写真8,9-1,9-2,9-3）。

筆者によるこれまでの各種ベンガラ顔料の調査では、同じ酸化鉄系のベンガラ顔料でも、原材料や製法の違いにより、ベンガラ粒子の集合状態の分布や、赤色顔料としての赤い色相、さらには個々のベンガラ顔料の粒子形態や集合状態はそれぞれ異なる。すなわち、（1）文献史料は「赤土」と記す。天然赤鉄鉱を磨り潰して粉砕して磨り潰す、もしくは赤味が強い粘土系の風化生成土壌や赤鉄鉱の鉱石が風化して脆弱粉砕化された細粉集積土壌を精製して作成する天然鉱物系の「赤土ベンガラ」、（2）文献史料は「丹土」と記す。鉄分を多く含む黄土もしくは水酸化鉄や針鉄鉱系の風化土壌を原材料とし、加熱～粉砕～水簸して作成するが、基本が土壌であるため夾雑物が多く赤い色相は劣るものの量産可能なため、木造建造物の外観塗装材料として多用された「丹土ベンガラ」、（3）文献史料は「鉄丹もしくは鉄屑の弁柄」と記す。鉄サビに酸化促進剤を添加して加熱して作成する。ローハベンガラに比較して赤い色相は

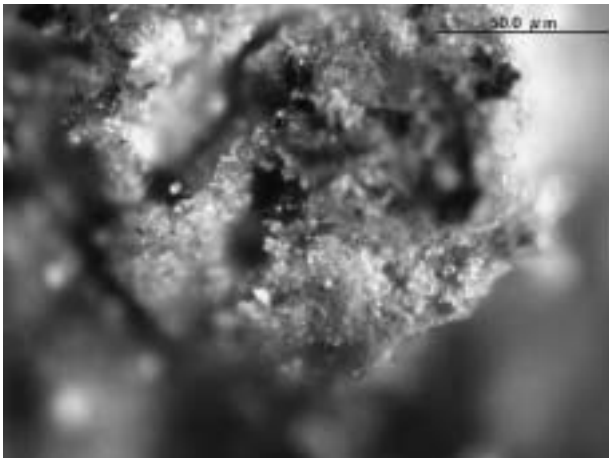


写真6　試料1の金属顕微鏡写真

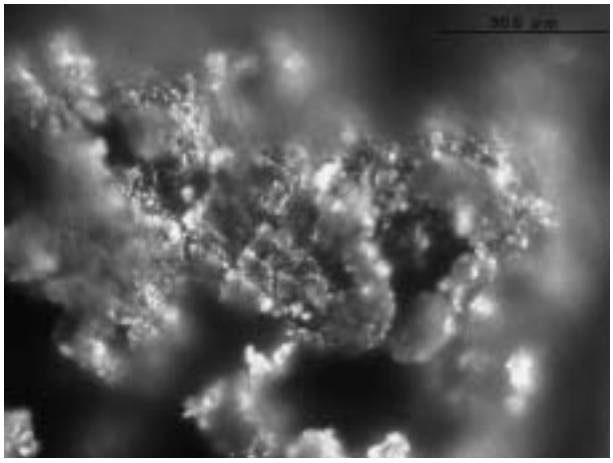


写真7　試料2-1の金属顕微鏡写真

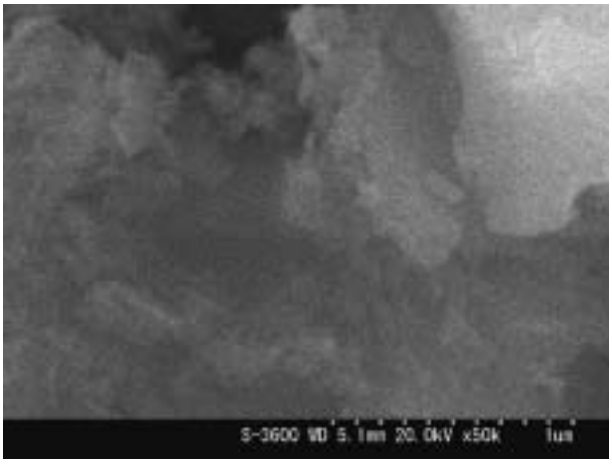


写真8　試料1のベンガラ粒子

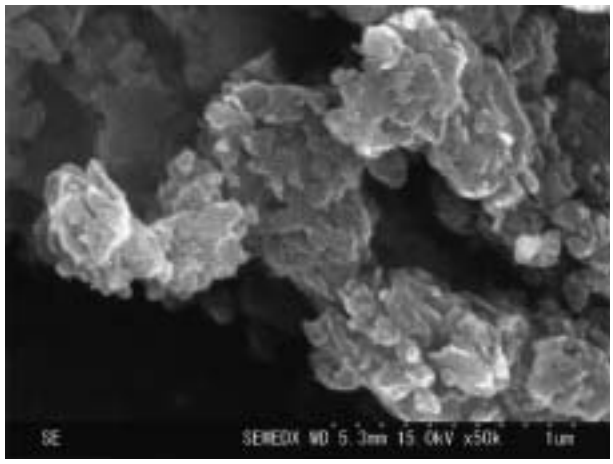


写真9-1　試料2-1のベンガラ粒子

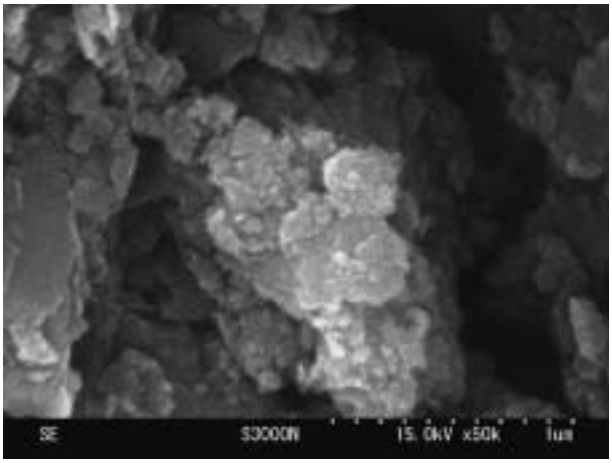


写真9-2　試料2-2のベンガラ粒子

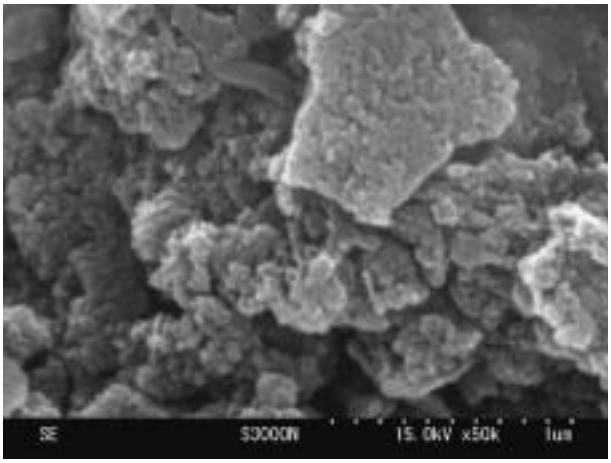


写真9-3　試料2-3のベンガラ粒子

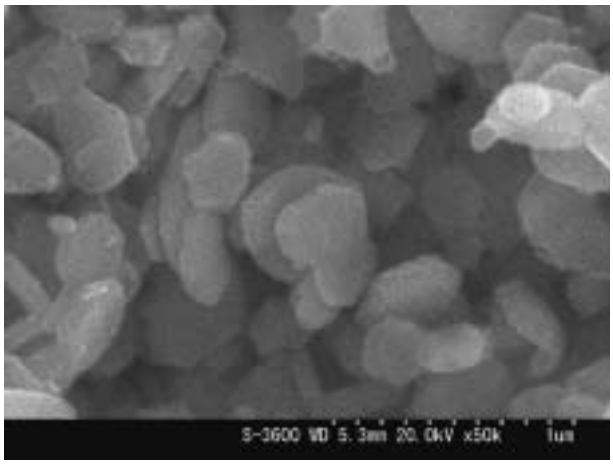


写真10-1　赤土ベンガラ

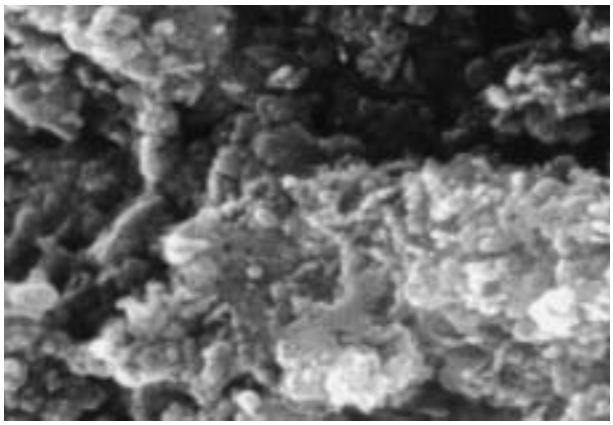


写真10-2　丹土ベンガラ

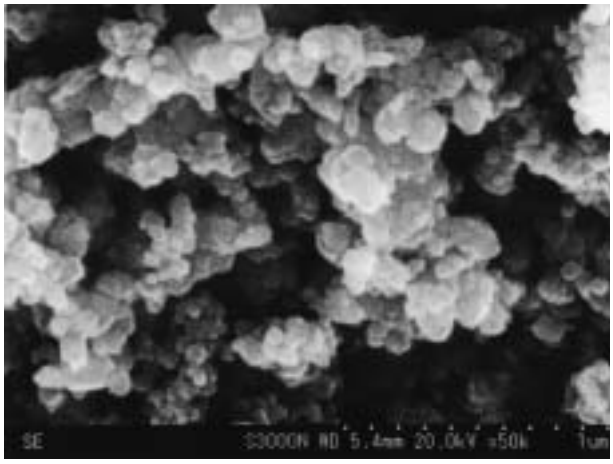


写真10-3　鉄丹ベンガラ

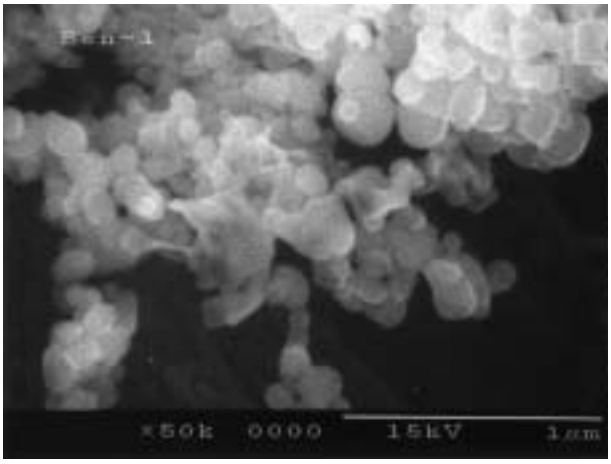


写真10-4　ローハベンガラ

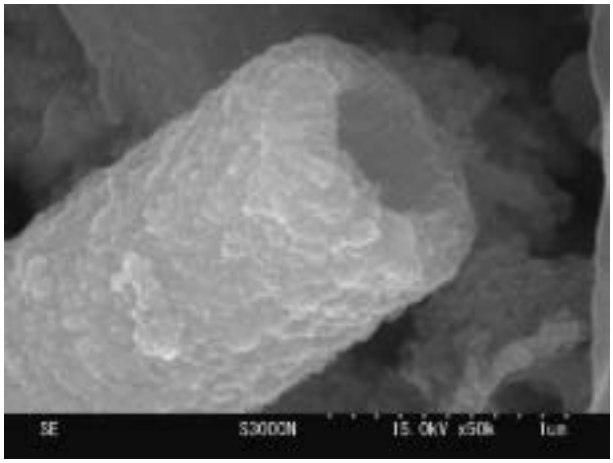


写真10-5　パイプ状ベンガラ

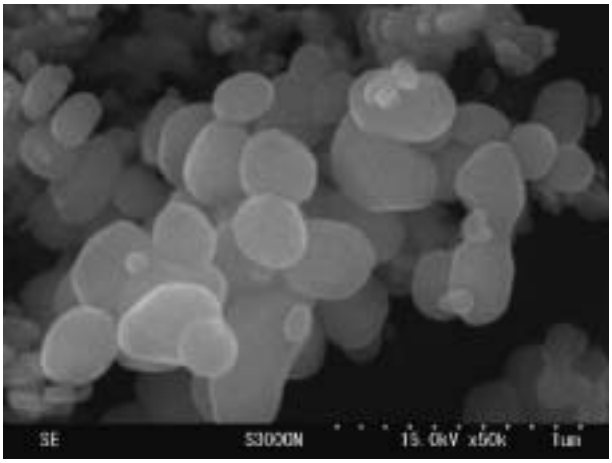


写真10-6　現代ベンガラ

やや劣るが、中世以降のベンガラ塗装には多用される人造顔料系の「鉄丹ベンガラ」、(4) 文献史料は「礬紅もしくは弁柄」と記す。硫化鉄鉱の風化生成物である緑礬（ローハ）を原材料とし、これを加熱～水簸して作成する。赤い色相は極めて良好な人造顔料系の「ローハベンガラ」、(5) 鉄分の純度が高い*Leptothrix Ochraceae*種などの黄褐色浮遊沈殿物の鉄バクテリアを原材料としているため、赤い色相は良好な外径1μm程度の中空円筒状で定型化した形態を有する「パイプ状ベンガラ」、(6) 『豊後風土記』が「赤湯泉（あかゆ）」の赤泥を建造物の柱に塗装したと記すように、温泉沈殿物の肌理の細かい赤泥を原材料として、これを加熱～水簸して作成する「赤泥ベンガラ」、および、(7) 湿式沈殿法からなる現代のベンガラ、の少なくとも7種類の名称が異なるベンガラ顔料が存在することが明らかになっている（写真10-1～10-6）。この点を考慮に入れて各試料をみると、西隆寺跡出土瓦に付着した赤色顔料、元興寺極楽坊出土瓦に付着した赤色顔料ともに「丹土ベンガラ」であると同定した。

さて、古代の文献史料によると『延喜式』には「赤土」と記述される赤鉄鉱原石を原材料とした天然ベンガラに相当する「赤土ベンガラ」、『豊後風土記』には「赤湯泉（あかゆ）」の温泉沈殿物である「赤泥ベンガラ」が木造建造物の外観塗装材料として用いられたことが記載されている。一方、各地で検出される廃寺跡などの寺院関連遺跡や宮殿跡出土瓦の付着ベンガラ顔料の分析結果では、天然赤鉄鉱を原材料とする「赤土ベンガラ」の使用が確認された事例は平安宮朝堂院跡出土瓦（平安前期）、鉄バクテリアを原材料と

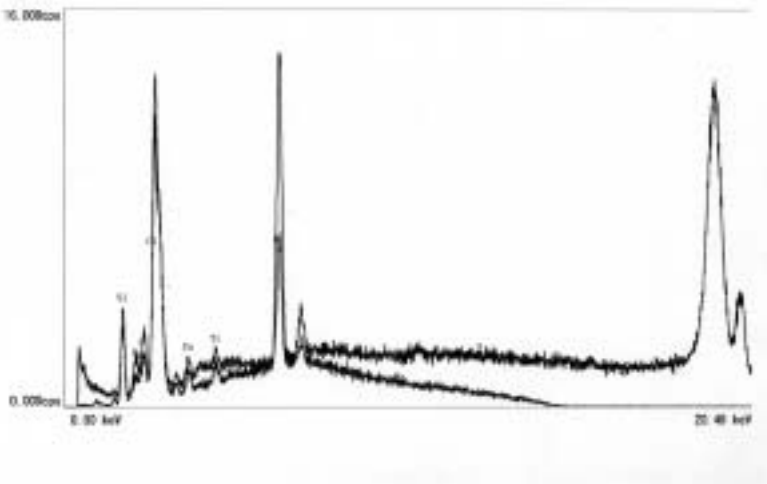


図1　試料1の蛍光X線分析スペクトル

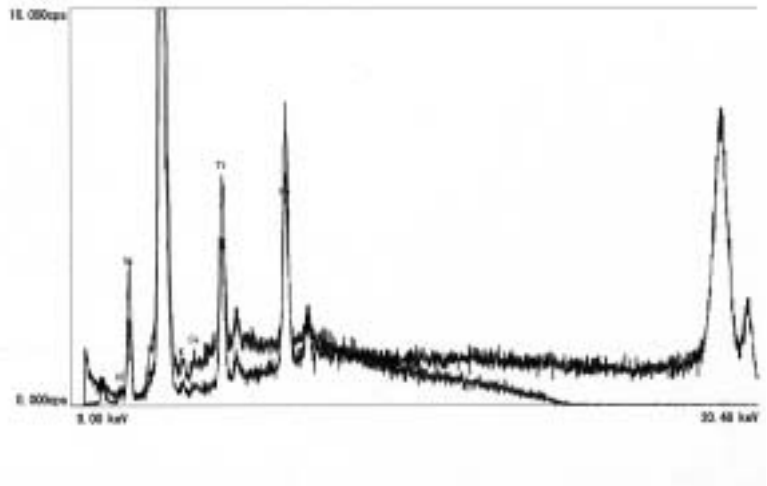


図2　試料2-1の蛍光X線分析スペクトル

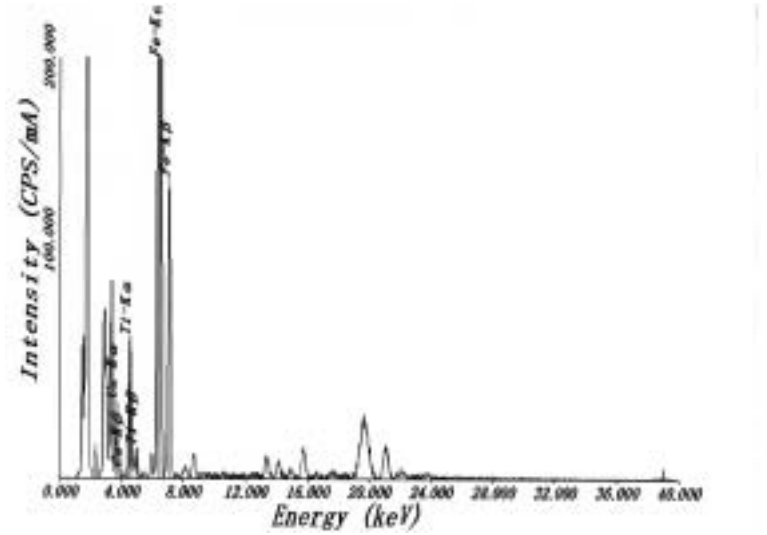


図3　試料2-2の蛍光X線分析スペクトル

する「パイプ状ベンガラ」の使用が確認された事例は北白川廃寺出土瓦（白鳳～奈良時代）や平安宮内出土瓦（平安前期）などを確認している。しかし、実際には赤い色相は若干劣るものの量産が可能な鉄分の含有量が多い黄土を加熱して作成する、朽津や山崎らが「不純なベンガラ」と称する「丹土ベンガラ」の使用が中心であった（山崎1987,朽津2005）。

いずれにしても本試料は、奈良時代後期頃の平城京内の主要寺院伽藍建造物の部材に外観塗装された赤色顔料が偶然にも軒平瓦の瓦胎部に付着残存したハケ塗り痕跡である。今回の調査の結果、これらはいずれも「丹土ベンガラ」であると同定した。このように、大規模な古代木造建造物の塗装材料として、赤い色相は若干劣るものの廉価で安定した量産可能な「丹土ベンガラ」が広く採用されたことは十分に想定されることである。その一方で、同じ奈良時代の元興寺五重小塔では「パイプ状ベンガラ」の使用が確認された（北野・狭川・窪寺2008）。そのため建造物の性格や規模、社会的背景の違いによって同じベンガラ塗装でもそれぞれ状況によって使い分けていた可能性が想定された。

（謝辞）

本調査を進めるにあたり、辻村泰善住職・理事長、狭川真一研究部長、植田直見副部長をはじめとする元興寺および元興寺文化財研究所の各位に大変お世話になりました。また試料の電子顕微鏡写真撮影は（株）日立ハイテクノロジーズ分析センターで行いました。併せて心から謝意を表します。

本調査は、科学研究費補助金 基盤研究（C）（細目：文化財科学:課題番号19500872）『建築文化財における外観塗装材料の変遷と新塗料開発に関する研究』（研究代表者：北野信彦）の平成19年度内研究成果の一部を含む。

（引用文献）

北野信彦・肥塚隆保（1996）「近世におけるベンガラの製法に関する復元的実験」『文化財保存修復学会誌 vol.40』p.35-47、文化財保存修復学会（旧古文化財科学研究会）

北野信彦・肥塚隆保（1998）「江戸時代における鉄丹ベンガラの製法に関する復元的実験」『文化財保存修復学会誌 vol.42』p.26-34、文化財保存修復学会

北野信彦（2005）「丹土ベンガラの製法に関する基礎的調査」『研究紀要38-1』p.53-69 くらしき作陽大学

北野信彦（2006）「古代木造建造物におけるベンガラ塗装の研究（Ⅰ） －豊後国風土記に記された「赤湯泉（あかゆ）」の温泉沈殿物に関する基礎的調査－」『考古学と自然科学 vol.54』、p.35-52、日本文化財科学会

北野信彦（2007）「古代木造建造物におけるベンガラ塗装の研究（Ⅱ） －パイプ状ベンガラの生産と使用に関するる基礎的調査－」『考古学と自然科学 vol.56』、p.41-63、日本文化財科学会

北野信彦・狭川真一・窪寺茂（2008）「元興寺五重小塔の外観塗装材料に関する調査」『保存科学 №47』、p53-68、東京文化財研究所

奈良県文化財保存事務所（1957）『元興寺極楽坊本堂、禅室及び東門工事報告書』

西山巖（1977）「べんがら」『改訂増補 最新顔料便覧』p.448-451、日本顔料技術協会編、誠文堂新光社

山崎一雄（1987）『古文化財の科学』思文閣出版

吉木文平（1959）「3 酸化鉄（Fe_2O_3,FeO）」p.196-216、『鉱物工学』技報堂

国史大系編集会（1972）『新訂増補 国史大系（普及版）延喜式 後篇』吉川弘文館

朽津信明（2005）「古代建築塗装の赤色顔料」『日本文化財科学会第22回大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会（札幌）

(2) 平城京右京一条三坊一坪出土木製品の樹種同定

木 沢 直 子

はじめに

平城京右京一条三坊一坪より出土した木製品10点について樹種同定を行なった。№1～№4は8世紀中頃～後半の遺構と考えられる掘立柱建物SB100に伴う柱根、№5、№6はこれと同時期の遺構と考えられる柵SA285に伴う柱根である。また№7、8は9世紀中頃の井戸SE230の井戸枠材、№9、10は8世紀後半の井戸SE200内より出土した木簡および籌木である。

1．試料

№1	柱根	SB100f
№2	柱根	SB100c
№3	柱根	SB100b
№4	柱根	SB100a
№5	柱根	SA285b
№6	柱根	SA285a
№7	井戸枠	SE230（Fig.41-12）
№8	井戸枠	SE230（Fig.40-7）
№9	木簡	SE200 明灰色粘土層出土
№10	籌木	SE200 明灰色粘土層出土

2．同定方法

樹種同定に必要な木口面（横断面）、板目面（接線断面）、柾目面（放射断面）の3断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n－ブチルアルコール、キシレンに順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、光学顕微鏡で観察した。

3．同定結果

各試料の木材組織は顕微鏡写真の通りである。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』（Ⅱ）に従った。同定は木沢直子（木器保存研究室）が行った。

樹木の性質、材の用途、出土事例等については後記の文献を参考とした。

№1　柱根　　SB100f

ヒノキ亜科　Subfam. Cupressioideae

ひのき科（Cupressaceae）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に接線状に並ぶ。分野壁孔はかろうじてヒノキ型を確認することができ、１分野に2～4個見られる。放射組織は単列で2～5細胞高である。試料は木材組織の劣化が顕著であり分野壁孔がやや不明瞭であった。1分野に存在する分野壁孔の数からヒノキと断定することは困難であるためヒノキ亜科とした。ヒノキ亜科に含まれる樹種にはヒノキ属（ヒノキ、サワラ）、アスナロ属（アスナロ）、クロベ属（クロベ（ネズコ））などが含まれる。このうち分野壁孔の特徴からヒノキ属、アスナロ属の樹種である可能性が高い。

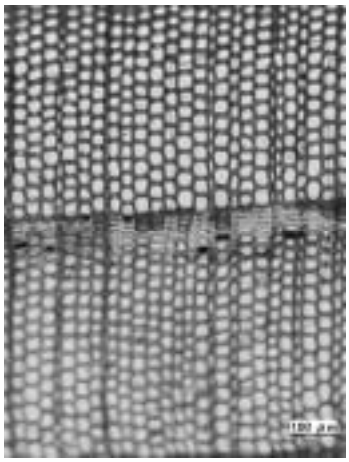
№2　柱根　　SB100c

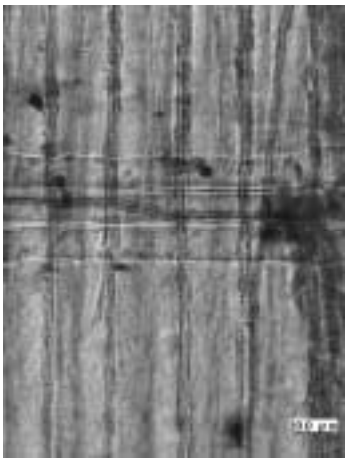
ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endlicher

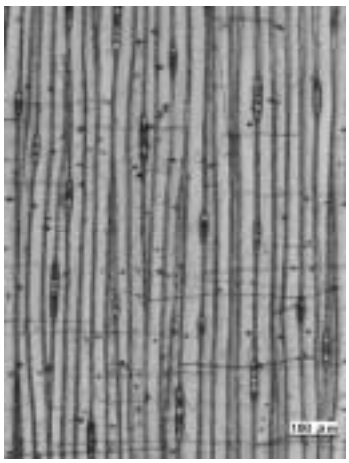
ひのき科（Cupressaceae）ヒノキ属（Chamaecyparis）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材へ

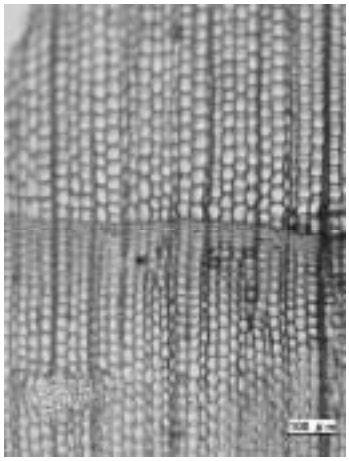
No1 柱根　　SB100f　　ヒノキ亜科　Subfam. Cupressioideae


木口面

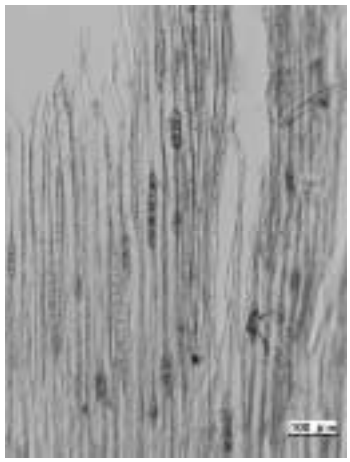

柾目面


板目面

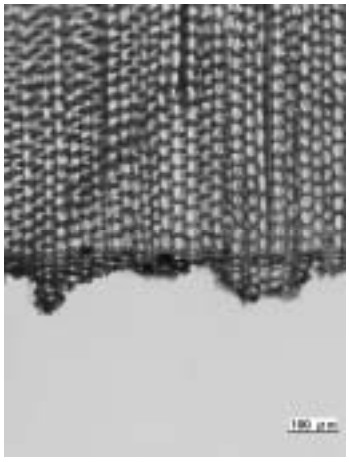
No2　柱根　　SB100c　　ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endlicher


木口面

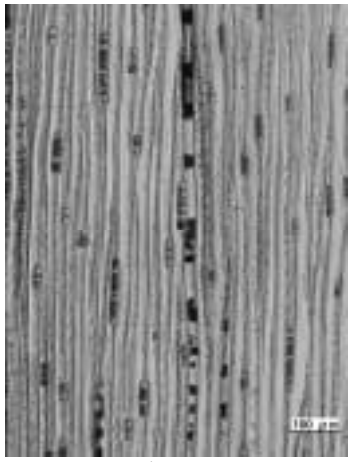
柾目面


板目面

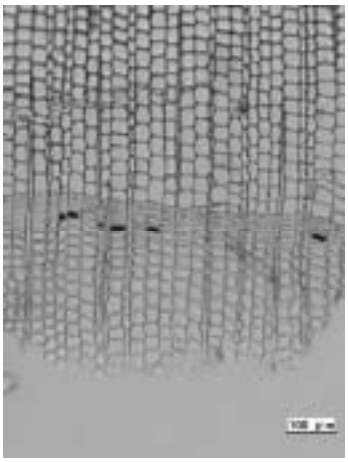
No3　柱根　　SB100b　　ヒノキ亜科　Subfam. Cupressioideae


木口面

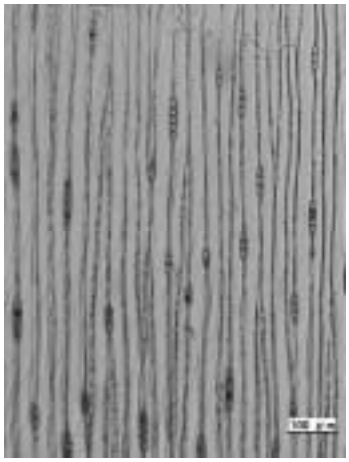
柾目面


板目面

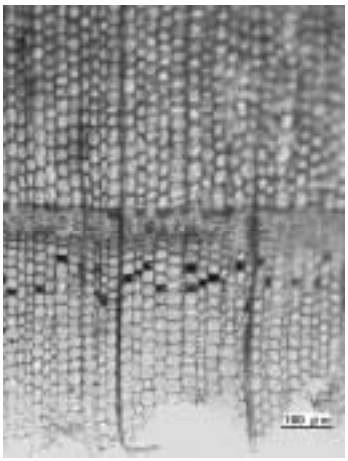
No4　柱根　　SB100a　　ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endlicher


木口面

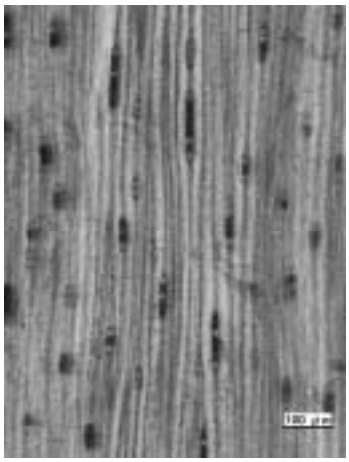
柾目面


板目面

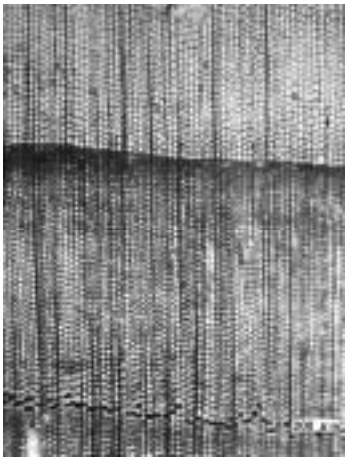
No5　柱根　　SA285b　　ヒノキ亜科　Subfam. Cupressioideae

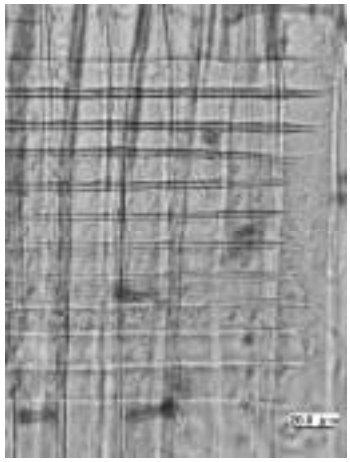

木口面

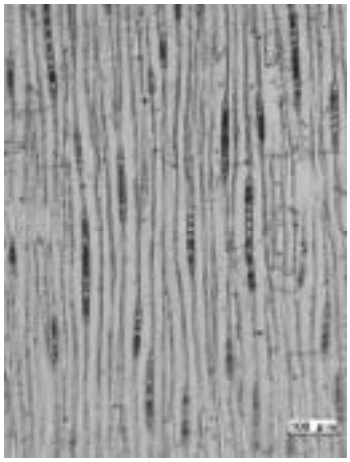
柾目面


板目面

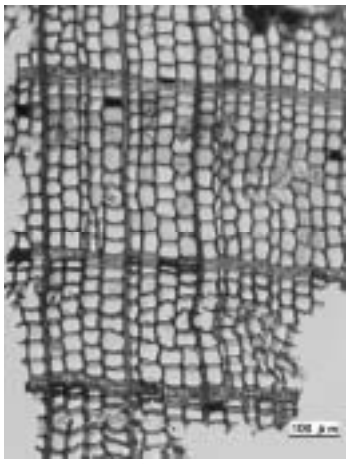
No6　柱根　　SA285a　　ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endlicher

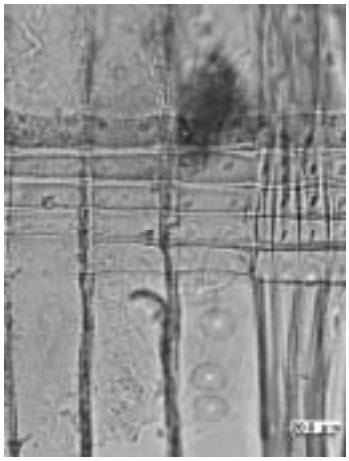

木口面

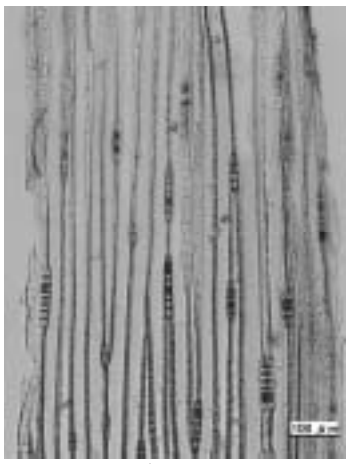

柾目面


板目面

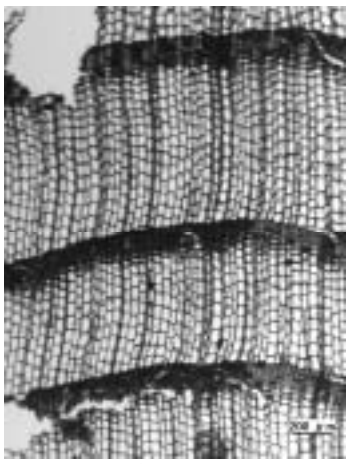
No.7　井戸枠　　SE230　　ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endlicher


木口面

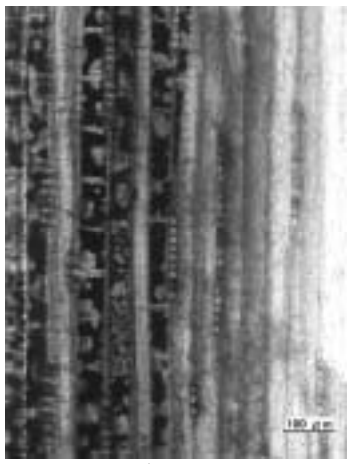

柾目面


板目面

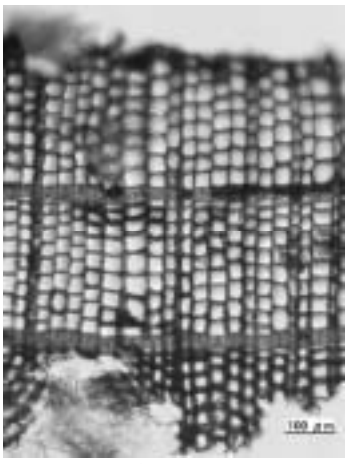
No.8　井戸枠　SE230　　スギ　*Cryptomeria japonica* D. Don

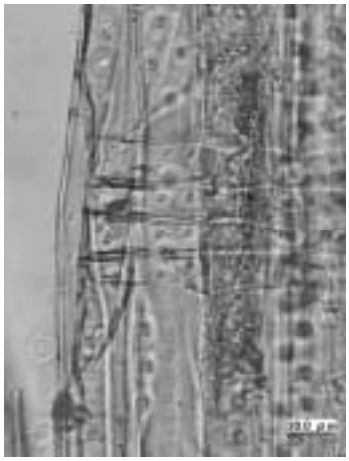

木口面

柾目面


板目面

No.9　木簡　　SE200　　ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endlicher


木口面


柾目面

板目面

の移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に点在する。分野壁孔はヒノキ型で１分野に2個確認できた。放射組織は単列で2～5細胞高である。

№3　柱根　　SB100b

ヒノキ亜科　Subfam. Cupressioideae

ひのき科（Cupressaceae）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は比較的狭い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に散在する。分野壁孔はヒノキ型、スギ型の区別が不明瞭だが小型で、１分野に2個～4個確認できた。放射組織は単列で2～9細胞高である。分野壁孔の特徴からヒノキを除くヒノキ亜科で、サワラ、アスナロなどの樹種である可能性が高い。

№4　柱根　　SB100a

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endlicher

ひのき科（Cupressaceae）ヒノキ属（Chamaecyparis）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に接線状に並ぶ。分野壁孔はヒノキ型で１分野に2個確認できた。放射組織は単列で2～5細胞高である。

№5　柱根　　SA285b

ヒノキ亜科　Subfam. Cupressioideae

ひのき科（Cupressaceae）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅は比較的広い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に接線状に配列する。分野壁孔はヒノキ型、スギ型の区別が不明瞭だが小型で、１分野に2個～4個確認できた。放射組織は単列で2～9細胞高である。分野壁孔の特徴からヒノキを除くヒノキ亜科で、サワラ、アスナロなどの樹種である可能性が高い。

№6　柱根　　SA285a

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endlicher

ひのき科（Cupressaceae）ヒノキ属（Chamaecyparis）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は比較的広い。樹脂細胞は晩材部に点在し、早材から晩材への移行付近にも接線状に並ぶ。分野壁孔はヒノキ型で１分野に1～2個確認できた。放射組織は単列で2～6細胞高である。

№7　井戸枠　　SE230

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endlicher

ひのき科（Cupressaceae）ヒノキ属（Chamaecyparis）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に接線状に配列する。分野壁孔はヒノキ型で１分野に2個確認できた。放射組織は単列で2～13細胞高である。

№8　井戸枠　　SE230

スギ　*Cryptomeria japonica* D. Don

ひのき科（Cupressaceae）スギ属（*Cryptomeria* D. Don）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は急で、晩材の幅は比較的狭い。樹脂細胞は晩材部に接線状に点在する。分野壁孔はスギ型で１分野に2個確認できた。放射組織は単列で2～14細胞高である。

№9　木簡　　SE200

ヒノキ　*Chamaecyparis obtua* Sieb. et Zucc. Endlicher

ひのき科（Cupressaceae）ヒノキ属（Chamaecyparis）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に接線状に並ぶ。分野壁孔はヒノキ型で１分野に2個確認できた。放射組織は単列で2～6細胞高である。

№10　籌木　　SE200

針葉樹

木口面において仮道管が丸味を帯び仮道管壁も厚いなど、あて材の特徴が見られた。あて材は木材組織の形成に異常が生じるため樹種の識別は困難である。本試料では仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞を確認することができ、水平樹脂道、垂直樹脂道は見られない点、仮道管にラセン肥厚が見られない点からヒノキ科の樹種である可能性が高い。

4．小結

樹種同定の結果、SB100の柱穴より出土した柱根はヒノキおよびヒノキ亜科の材であった。ヒノキは平城宮域より出土する柱材に多く見られることが知られている。一方、平城京域より出土した柱材のうち樹種が判明している事例は限られており、左京三条二坊三坪の掘立柱建物SB2990（桁行2間以上、梁行2間以上）[1]、および左京三条四坊十二坪の掘立柱建物SB001（桁行7間、梁行2間）[2] などでヒノキを用いた柱材が確認されている。今回樹種同定を行なった柱材にはヒノキとともにヒノキ亜科の樹種が含まれている点は注意される。前述のようにヒノキ亜科とした№1、№3、№5の分野壁孔はいずれもヒノキ型、スギ型の判別において不明瞭であるものの、大きさが小型で1分野内の数も多いことからサワラ、またはアスナロ属であると考えられる。これらの樹種はヒノキ科、ヒノキ亜科に含まれ、ヒノキと類似した特徴を有するが、前者はヒノキに比して軽軟で強度的にやや劣るとされる[3]。また後者はヒノキと同様に耐朽性が高いが、外観や材質はやや劣るとされる[4]。こうしたヒノキ亜科に含まれる材はヒノキの代用として用いられた可能性もあり、今後、平城京域の建物遺構に伴う柱材の樹種についてさらに調査が行なわれることにより、これらの材が用いられた建物の時期や性格についての検討も可能であると考える。

（注）

(1)『平城京左京三条二坊三坪発掘調査報告』　奈良国立文化財研究所　1984年

(2)『平城京左京三条四坊十二坪』平成18年度発掘調査報告書　（財）元興寺文化財研究所　2007年

(3) 平井信二『木の事典』第1集第6巻　1980年

(4) 平井信二『木の事典』第1集第7巻　1980年

（参考文献）

島地謙・伊東隆夫『図説木材組織』　1982年

北村四郎・村田源『原色日本植物図鑑・木本編』Ⅱ　1979年

島地謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』　1988年

伊東隆夫・島地謙「古代における建造物柱材の使用樹種」『木材研究資料』№49　1979年

5. 総　括

遺構の年代と様相について、上層遺構と下層遺構にわけて記述する。

（1）上層遺構

まず遺構の年代から示すと、SK001・030・080等から出土した瓦器椀は、概ね13世紀前半頃と判断される[(1)]。他の遺構から出土する遺物でこれを大幅に前後するものはなく、上層遺構およびそれに関連する遺構は、ほぼこれらと同時期のものと判断していいだろう。ただ、建物に重複関係が確認されており、他の遺構にも切り合い関係が存在しているため、単純にすべてが同時存在していたということにはならない。ここでは、13世紀前半頃に一部の建物では建替えを行いながら、敷地を維持していたという程度に理解しておきたい。

さて、そうした視点で全体を見渡すと、今次の調査区内で遺構の配置に特徴が見出せる。まず、ピット群が集中している範囲が限定されていることである。それは調査区の北半部であり、座標で示すと、X=-144,618.0付近～X=-144,637.0付近の範囲である。当然のことながらこの範囲には建物遺構が集中し、土坑や祭祀遺構も見出される。まさにここが、当時の生活空間であったと認識できる。

これに対して、より北に寄った地区と南側の大半にはピットはほとんど見出されない。とくに南側では、素掘り小溝が多数検出されているという状況である。最北端はSD110で、これ以北にピット群が集中しているのが理解できるだろう（Fig.4）。また、調査区の西寄りではやや南までピットが延びているようにも見え、建物も１棟復原することが可能である。しかし、大きく見た場合にはやはり南半部の様相とは大きく異なった土地利用をしていたことは明らかである。

このことから、ピット群の集中する範囲を宅地＝生活空間、南半部を農地と理解したい。この傾向は、2003年に当研究所が調査した東側隣地でも同じ傾向にあり、少なくともこの坪における中世の土地利用のあり方は、南半部に農地を構えるものであったと言えるだろう。

さて、ピット群よりも北側の空間についてであるが、ここにはSK001とした大型土坑以外目立った遺構はない。注意したいのはSK001の南に近接してSA008という小さい柱列が存在していることである。宅地と廃棄空間を分離していた可能性がある。ただ、宅地内にも土坑は存在しているので、単純に廃棄空間として存在していたわけではないだろう。

そこは、古代に敷設された一条北大路が存在していたところである。すくなくとも中世のこの時期までは、空閑地として維持されてきた可能性が強い。もちろん、そこは道路として機能していたと思われるが、古代のような厳しく管理された道路ではなく、土坑の存在が示すように、緩やかな共有空間程度であったものとみられる。

さて、この位置（右京一条三坊一坪）は『西大寺敷地之図』（東京大学文学部蔵／鎌倉時代）をみると、「寺領」と記載されていて、鎌倉時代には西大寺の管理地であったことがわかる。今次の調査で、中世西大寺の「寺領」における土地利用形態が明らかになった意義は大きい。

（2）下層遺構

【井戸】

出土土器による年代推定が可能なのは数基の井戸にとどまる。以下に列記すると、SE200は、8世紀中頃～後半の土器が混在して出土している。これは機能停止後に枠を抜き取ったことにより、遺物が混在したのではないかと思われる。したがって、埋没を8世紀後半頃と捉えておくこととしたい。SE280は8世紀後半に埋没したと考えられ、SE210はやや新しい傾向を示し、9世紀末～10世紀初頭に埋没したとみたい。さらにSE230は、井戸枠内の埋没土である暗灰色土層から出土した土器が9世紀後半頃、裏込土の一部と推定している黄灰色土層出土土器は、8世紀末～9世紀初頭頃と考えられる。井戸の開削から埋没まで長期間使用していた可能性があり、興味深い。

以上、井戸のみでの年代推測となるが、井戸は生活に密接に関連する遺構であることを思うと、当該地における土地利用の流れを大筋で理解することになるだろう。したがって当該地は8世紀中頃から後

半に利用が始まり、平城京が長岡京、平安京へ遷都した後も利用され続け、10世紀初頭頃に使用されなくなったと考えておきたい。特に8世紀中頃～後半と考えられるSE200は、掘方の規模が東西5.9m、南北5.2mという大きなもので、食堂院「大炊殿」の東南で検出された井戸SE950（掘方の規模は東西6.6m、南北5.4m）に匹敵するものである。このSE200の廃絶後に作られるた井戸は、すべて規模が著しく小さいものであり、土地利用の様相が8世紀後半頃を境に変容したことを物語っている。

なお、食堂院の調査成果から西隣接地の右京一条三坊八坪の土地利用は、西大寺創建時（天平神護三年／767年）に開始されるが、主要建物や井戸は8世紀末から9世紀半ばまでに廃絶し、「東檜皮厨」の甕も10世紀半ばまでは据え直しが行なわれていたとみられ、他の遺構からもこのあたりが下限となりそうである。

このことから、今次の調査地における井戸の変遷過程と、食堂院地区の変遷はきわめて近似していることが理解でき、両者が有機的な関係を有して存在していたことを示唆するものである。つまり、当該地が西大寺創建の当初から西大寺の寺地として成立し、少なくとも10世紀半ばまでは継続して類似した機能を保有していたものと理解したい（性格については後述）。

なおこれ以降、上層の中世遺構形成までは顕著な遺構は確認されておらず、空白期となる。

【建物】

数多く検出された建物遺構だが、大きく見ると主軸がほぼ南北方向のものと、北で東へ2～3°程度振るものとの二者を指摘することができる。大きく東へ振るものは、SB100・SA120・SA285で、SB100とSA120は直接関連するものであろう。いずれも出土遺物に恵まれず、また他の遺構と切り合い関係も見出せないので、遺構から前後関係を判定する材料がない。ただ、平城京内では東へ大きく振る遺構群はやや古めに位置づけられるようであり、ここでは他のものと同時並存せず、やや先行する建物とみておきたい。

次にほぼ南北を軸とする遺構だが、いくつもの重複があり、同時存在しているものを特定するのは難しい。ここでは強引にその分類を行なうことはしないが、注意したいのは、南半部調査区の中央から西寄りにはこの一群の建物が皆無であるという点である。その中央には井戸SE200があるだけで、広い空間を維持していたと考えられる。その視点で建物群をみると、SB240・250・260・270など南北方向に並ぶ建物は、若干の出入りがあるものの概ね西側柱筋を揃えているように見える。これに対してSB320以北の建物はそれに規制される傾向はなく、調査区を越えて西側へ延びる傾向も見出される。調査範囲に限界があるので結論を導き出すのは難しいが、井戸SE200のある空間を中心にそれをコ字形、あるいは逆L字形に囲むように建物が配置されていたのではないかと推定しておきたい。

また、SB275以北は中世のピット群でかなり撹乱を受けているが、8世紀後半頃の井戸がみられるほかは顕著な建物は見つかっていない。その北側には一条北大路が通っており、大路と建物群との間には若干の空間が維持されていたことをうかがわせる。

なお、建物跡から出土する土器は多くが奈良時代後半のものであり、平安時代に帰属するものは見出せない。ただ、先述した井戸の様相を踏まえると、この中には平安時代まで継続した建物、あるいは平安時代になって建築されたものも含まれていると思われる。切り合い関係で推定できる新しい段階の建物にSB270があり、柱穴も他より小さいことから、時期の下る可能性は高いが、特定することは難しい。

【溝】

まずSD010としたものは、一条北大路南側溝と考えられる。2003年度の調査で確認したSD10821の西側延長部に該当し、溝心もほぼ同じ座標値（X=-144,614）を示している。このことで食堂院跡北側で検出された一条北大路南側溝と考えられる溝とは、真っ直ぐに連続せず、西三坊坊間東小路を境に段差となり、規模が異なっていたということを再確認することができた。

なお、SD010の出土遺物は8世紀後半から9世紀後半に及ぶものであり、埋没の時期をわずかに窺うことができる。

次に、一条北大路南側溝の南側にあるSD365について検討する。この遺構は、一条北大路南側溝から

心々で約4.5m離れて並行する東西方向の溝であり、両者に挟まれる空間には築地の存在が考えられるが、今回の調査ではその痕跡は見出せなかった。ただ、この溝に関して注意したいことは、SD054にかかるあたりで途切れていることである。後述するように、南北溝SD054は、理論上この坪の中央を通過する坪内区画溝と考えられるもので、この付近が当該坪の東西を区分する中心であったことが理解される。この視点でみると、SB300東端柱列が埋没後の溝にかかる以外は、すべての建物はこの溝を跨いでいないし、検出される範囲ではこれを跨ぐ可能性のある建物は見出せていない。

つまり、SD054埋没後もこの付近が坪（敷地）の中心であると認識されていたと思われ、SD365がSD054のすぐ西で終わっていることは、ここが当該敷地の北出入口として機能していたからだと考えたいのである。

では、そのSD054について検討しておくこととする。現場で求めた遺構の任意中点は、X=-144,634、Y=-19,986である。2003年度に調査した西二坊大路がもっとも近接した位置での値が得られるので、この東西両側溝の心々間（東側溝：X=-144,675、Y=-19,912.9、 西側溝：X=-144,675、Y=-19,930.2）の中心が大路の心ということになる。この座標を示すと、X=-144,675、Y=-19,921.55となる。SD054は南北溝のためY値を検討材料とすると、上記した西二坊大路心からSD054心までの距離は、64.45mとなる（各遺構が近接しているので、振れを考慮していない）。

平城京の区画は一辺450尺、1尺を0.2955mとした場合、132.975mとなる。この数値から得られる坪の理論上の中心は、大路の中心から66.4875m≒66.5mとなる。これとSD054の位置を比較すると、理論上の坪中心から約2.05m東へ偏っていることになる。他に坪内を東西に分割するような南北方向の遺構は見出せていないので、ここではSD054を右京一条三坊一坪の坪内区画溝と認定しておきたい。ただし、このずれの意味については、様々な要因を想定することができるが、西三坊坊間東小路の規模が近接地で確定した時に再検討するのが望ましいであろう。

なお、出土した土器の年代は、8世紀前半から中頃と推定されるもので、今次の調査範囲内では最も古く位置付けられるものである。年代推定にはもちろん幅があり、考え方の違いで前後にずれる場合も少なくないが、西大寺創建の頃には埋没していたと理解したい。

【遺跡の性格】

SE230から出土した土師器皿に墨書された「同法所」が検討の対象となる。この3字は、同法＋所で理解する。まず「同法」であるが、仏教語辞典によると「行ないをともにする人。修行を同じくともにしている者。」（中村元1975『佛教語大辞典』東京書籍）とある。また、「所」は場所や機関のことである。つまり「同法所」とは、同じ行い（修行）をする場所、あるいは機関（組織）ということになる。隣接地が西大寺食堂院であることを踏まえると、西大寺に関わる何らかの修行を行なう場所あるいは機関であったことが窺える。

さて、この墨書が書かれた土師器皿は、9世紀後半頃の製品と考えられ、「同法所」もその頃に存在していたことは理解できるが、興味深いのは周辺の調査でも「同法」と記した土器や木器が出土していることである。

まず、奈良文化財研究所の実施した食堂院の調査では、SE950から出土した「同法」と記す曲物底板、須恵器坏B蓋があり、類似するものとして「同」と記すものでは、土師器坏・皿類が7点、須恵器坏B蓋が1点報告されている。SE950出土土器は、平城京土器Ⅳの基準資料となり得ると考えられており、概ね8世紀後半（奈良時代末期～長岡京期）と捉えられている。

また、東側で平成15年度に当研究所が調査した地点では、奈良時代後期の井戸SE20348から「同法」と墨書された須恵器坏Bが出土している。SE20348は右京一条三坊一坪内である。

以上のように、「同法」に関する資料は食堂院の一角から出土している事例が多いが、当該地と同坪内でも出土しており、この付近一帯が「同法」に関わるところであったと推定できる。しかも、周辺で出土した土器はいずれも奈良時代後期に属するものであり、これに注意するならば、奈良時代後期から9世紀後半頃までの約100年間、この付近が「同法」に関わる場所または機関であったことを物語っている。

このように考えると、先述の井戸の年代観から推測した当該地の土地利用のあり方と、隣地である食堂院の盛衰が近似することを踏まえ、奈良時代後半から9世紀後半に至る長い間、「同法」に関する場所または機関であったとのことを加味すると、当該地は、奈良時代後半から10世紀半ば頃までほぼ同じ機能を有しながら存在し続けたことが理解でき、それは西大寺との深い関係の中で成立するものであることを指摘できる。

【喪儀寮について】

第2章でも記したように、当該地点は従来から「喪儀寮」と推定されてきた。それは、『資財帳』縁起坊地第一の中に西大寺の寺地に関する一文があり、そこに「(前略) 在右京一條三四坊東限佐貴路除東北角喪儀寮 (以下略)」とあることから考えられてきたことである。大意は、(西大寺は) 右京一条三坊・四坊に所在し、東限は佐貴路 (佐紀路) と呼ばれる道路をもって示されることを記しているが、その東北角にある喪儀寮は西大寺の寺地からは除かれるということである。これを踏まえると、佐紀路は西二坊大路を指し、右京一条三坊の東北角つまり一坪の場所が喪儀寮であったと理解できることから、今次の調査地点は喪儀寮に該当すると考えられてきたのである。

しかし、西大寺の寺地に関しては、これまで多数の意見が提示されており、その想定される範囲も大きく異なっていて、東北角を喪儀寮としながらもそれを右京一条三坊一坪に求めない意見も存在していた。ここで諸説について云々する余裕はないが、今次の調査結果から言えることは、右京一条三坊一坪の地は奈良時代後半から平安時代中期頃までの期間、同法が集う場であり、そこは西大寺の管理地であったということである。したがって、当該地が喪儀寮である確率はきわめて低いと結論付けられる。

(注)

(1) 本章における土器の年代観は、佐藤亜聖によるものを踏まえているが、文責は狭川にある。

(参考文献)

大林潤ほか　2007『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』奈良文化財研究所

武田和哉　2006「平城京跡 (右京一条三坊八坪) ・西大寺旧境内 (食堂院跡推定地) の調査　第15次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成15年度』奈良市教育委員会

佐藤亜聖ほか　2005『平城京右京北辺』(財) 元興寺文化財研究所

佐藤信編　2005『西大寺古絵図の世界』東京大学出版会

付表　掘立柱建物掘方計測表

下層（古代）の掘立柱建物

アルファベットは柱掘方の番号、その下の数字は調査時のS-番号、数値の単位はm

SB100	a	b	c	d	e	f	g	h
	241	239	238	237	231	228	408	407
東西長	1.10	0.72	0.66	0.37+	0.67	0.84	0.84	0.52
南北長	0.61+	0.61	0.59	0.51	0.70	1.14	0.67	0.61
深さ	0.77	0.67	0.53	-	0.69	0.52	0.76	0.21
底の標高	72.14	72.26	72.38	-	72.25	72.37	72.12	72.29

SA120	a	b	c
	236	234	233
東西長	0.41	0.39	0.62
南北長	0.45	0.71	0.75
深さ	0.12	0.38	0.14
底の標高	72.78	72.51	72.78

SA225	a	b	c
	225a	225b	225c
東西長	0.48	0.33	0.55
南北長	0.19+	0.43	0.37
深さ	0.14	0.19	0.19
底の標高	72.82	72.73	72.73

SB245	a	b	c	d	e	f
	245a	245b	245c	483	484	491
東西長	0.71	0.54	0.70	0.53	0.52	0.58
南北長	0.56	0.65	0.75	0.39+	0.52	-
深さ	0.53	0.78	0.47	0.47	0.48	0.51
底の標高	72.36	72.15	72.40	72.46	72.44	72.49

SB270	a	b	c	d	e	h	i	j
	416	258	262	417	418	413	259	414
東西長	0.27	0.38	0.81	0.39	0.11+	0.48	0.41	0.41
南北長	0.39	0.41	0.85	0.27	0.34	0.33+	0.35	0.24+
深さ	0.30	0.25	0.42	0.24	0.26	0.41	0.32	0.22
底の標高	72.62	72.65	72.48	72.68	72.64	72.52	72.58	72.66

SB240	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
	240a	240b	240c	240d	240e	240f	240g	240h	240i	240j
東西長	0.48	0.52	0.51	0.42	0.61	0.47	0.42	0.42	0.64	0.49
南北長	0.61+	0.72	0.64	0.51	0.55	0.52	0.33+	0.32+	0.59	0.50
深さ	0.29	0.56	0.20	0.25	0.22	0.24	0.44	0.23	0.34	0.44
底の標高	72.66	72.49	72.73	72.65	72.69	72.68	72.44	72.49	72.59	72.51

SB260	a	b	c	d	e	f
	260a	260b	260c	260d	260e	260f
東西長	0.84	0.63	0.46	0.41	0.61	0.52
南北長	0.53	0.58	0.46	0.58	0.58+	0.63
深さ	0.17	0.33	0.24	0.38	0.70	0.49
底の標高	72.82	72.64	72.72	72.59	72.28	72.46

SB250	a	b	c	d	e	f	g	h
	250a	250b	250c	250d	250e	250f	250g	250h
東西長	0.83	0.61	0.59	0.65	0.53	0.46+	0.64	0.65
南北長	0.86	0.73	0.57	0.50	0.55	0.51	0.68	0.60
深さ	0.33	0.28	0.25	0.24	0.26	0.22	0.36	0.37
底の標高	72.24	72.69	72.68	72.72	72.72	72.75	72.60	72.61

SA285	b	a
	286	287
東西長	0.67	0.86
南北長	0.39	0.65
深さ	0.21	0.60
底の標高	72.82	72.42

SB315	a	b	c	e
	453	302/3	296	431
東西長	0.80	0.59	0.75	0.33+
南北長	0.78	0.78	0.65	0.66+
深さ	0.53	0.34	0.40	0.49
底の標高	72.52	72.65	72.60	72.46

SB320	a	b	c	d	e	f
	456	307	308	299	448	449
東西長	0.51	0.65+	0.75	0.51	0.71	0.80
南北長	0.51	0.54	0.62	0.52	0.65	0.73
深さ	0.31	0.65	0.40	0.34	0.39	0.23
底の標高	72.72	72.35	72.62	72.66	72.61	72.75

SB320	g	h	i	k	m	n	o
	293	292	291	289	432	434	435
東西長	0.69	0.69	0.68	0.96	0.57+	0.99	0.32+
南北長	0.72	0.53	0.58	0.58	0.67	0.60	0.56
深さ	0.28	0.23	0.29	0.33	0.17	0.52	0.35
底の標高	72.72	72.77	72.68	72.78	72.78	72.45	72.62

SB300	a	b	c	d	e	f	g
	328	329	331	332	326	327	354
東西長	0.96	0.69	0.60	0.82	0.61	0.74	0.67
南北長	0.92	0.83	1.07	1.09	0.80	0.75	0.55
深さ	0.43	0.29	0.31	0.35	0.17	0.31	0.24
底の標高	72.59	72.79	72.80	72.75	72.85	72.69	72.79

SB300	i	j	k	l	m	n	o	p
	321	322	323	324	316	317	318	319
東西長	0.77	0.74	0.75	0.72	1.23	0.84	0.75	0.85
南北長	0.58	0.67	0.85	0.77	1.03	0.71	0.74	1.02
深さ	0.32	0.25	0.35	0.33	0.35	0.26	0.32	0.36
底の標高	72.75	72.80	72.75	72.75	72.70	72.79	72.83	72.68

SA290	a	b	c	d	e	f	g	h
	481	352	351	466	356	314	459	461
東西長	0.52	0.65	0.54	0.35	0.85+	0.57	0.55	0.65
南北長	0.59	0.48	0.58	0.05+	0.54	0.72	0.54	0.55
深さ	0.21	0.20	0.19	0.18	0.23	0.19	0.20	0.27
底の標高	72.85	72.85	72.86	72.82	72.85	72.86	72.80	72.88

SB050	a	b	c	d	e	f
	50a	50b	50c	50d	50e	50f
東西長	0.45	0.42	0.51	0.48	0.56	0.56
南北長	0.52	0.43	0.57	0.55	0.59	0.49
深さ	0.26	0.13	0.30	0.33	0.56	0.50
底の標高	72.69	72.84	72.70	72.70	72.47	72.46

SB275	a	b	c	f	e	d
	336	337	338	339	341	342
東西長	0.83	0.72	0.57	0.94	0.55	0.60
南北長	0.65	0.55	0.64	0.93	0.54+	0.41+
深さ	0.31	0.21	0.32	0.33	0.27	0.21
底の標高	72.65	72.75	72.71	72.63	72.73	72.79

SB295	b	c	d	a
	25a	25b	25c	443
東西長	0.49	0.58	0.30+	0.3
南北長	0.52	0.52	0.49	0.35
深さ	0.22	0.2	0.16	0.15
底の標高	72.8	72.83	72.81	72.77

上層（中世）の掘立柱建物

SB075	a	b	c	d	e	f	g
	4	11	66	83	89	101	-
東西長	0.31	0.31	0.41	0.48	0.41	0.46	0.40+
南北長	0.29	0.39	0.32	0.27	0.40	0.42	0.30+
深さ	0.12	13.80	0.15	0.26	0.51	0.51	0.15
底の標高	73.06	73.07	73.08	72.94	72.70	72.69	73.06

SB090	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
	34	32	126	129	134	144	-	-	26	-
東西長	0.40	0.31	0.29	0.31	0.34	0.35	0.25	0.24	0.50	0.36
南北長	0.37	0.31	0.39	0.31	0.32	0.33	0.22	0.23+	0.40	0.35
深さ	0.24	0.33	0.35	0.37	0.37	0.29	0.33	0.24	0.21	0.31
底の標高	72.88	72.87	72.87	72.84	72.79	72.85	72.77	72.96	72.90	72.81

SB095	a	b	c	d	e	f	g
	199	12	29	73	88	99	92
東西長	0.32	0.28	0.33	0.35	0.27	0.34	0.36
南北長	0.29	0.29	0.32	0.27	0.23	0.56	0.44
深さ	0.08+	0.22	0.27	0.46	0.28	0.31	0.14
底の標高	73.02	72.95	72.95	72.77	72.94	72.91	73.06

SB105	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
	19	119	68	74	193	392	87	123	132	19
東西長	0.51	0.44	0.51	0.34	0.32	0.43	0.32	0.36	0.41	0.36
南北長	0.45	0.54	0.27	0.41	0.31	0.36	0.44	0.37	0.44	0.34
深さ	0.20	0.37	0.44	0.25	0.29	0.52	0.32	0.45	0.51	0.35
底の標高	73.02	72.85	72.77	72.96	72.92	72.88	73.01	72.77	72.66	72.85

SB115	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
	-	63	154	-	166	162	-	311	57	-
東西長	0.31	0.23	0.31	-	0.29	0.31	0.28	0.24	0.26	0.28
南北長	0.29	0.22	0.29	-	0.25	0.40	0.27	0.27	0.33	0.25
深さ	0.11	0.15	0.43	-	0.25	0.33	0.30	0.30	0.24	0.05
底の標高	72.92	72.91	72.64	-	72.85	72.81	72.80	72.74	72.85	72.93

写真図版

（凡例）

遺物写真の右下に記す番号は、

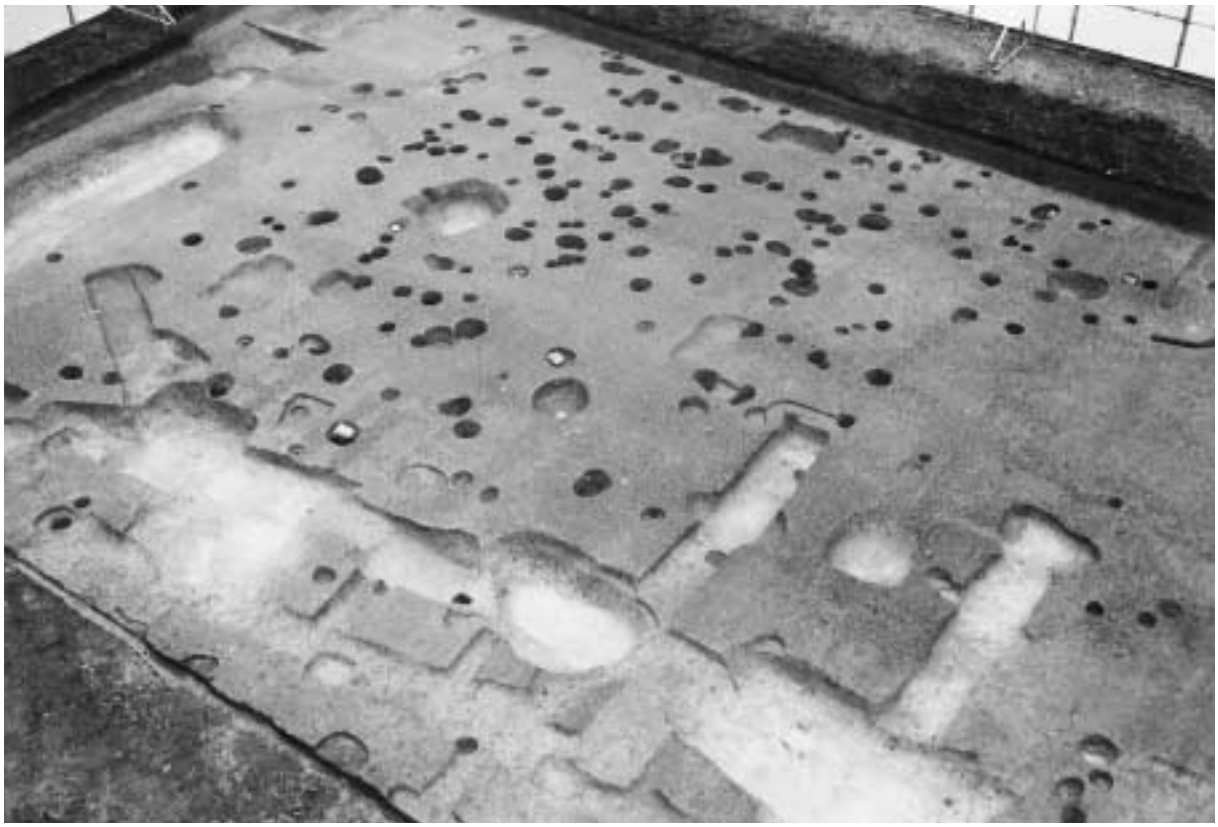
Fig.番号－遺物番号

と理解されたい。

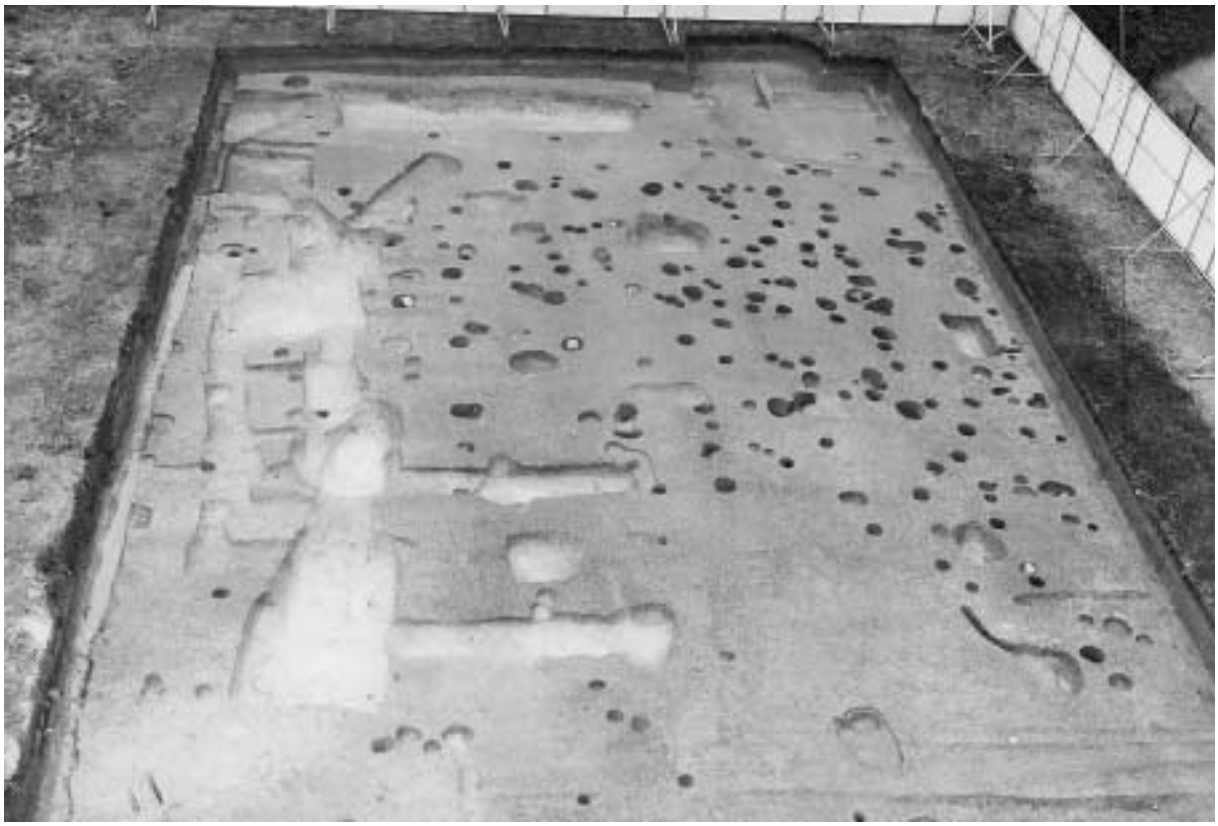
調査区全景（下層遺構面・上が西）

調査区全景（下層遺構面・南西から）

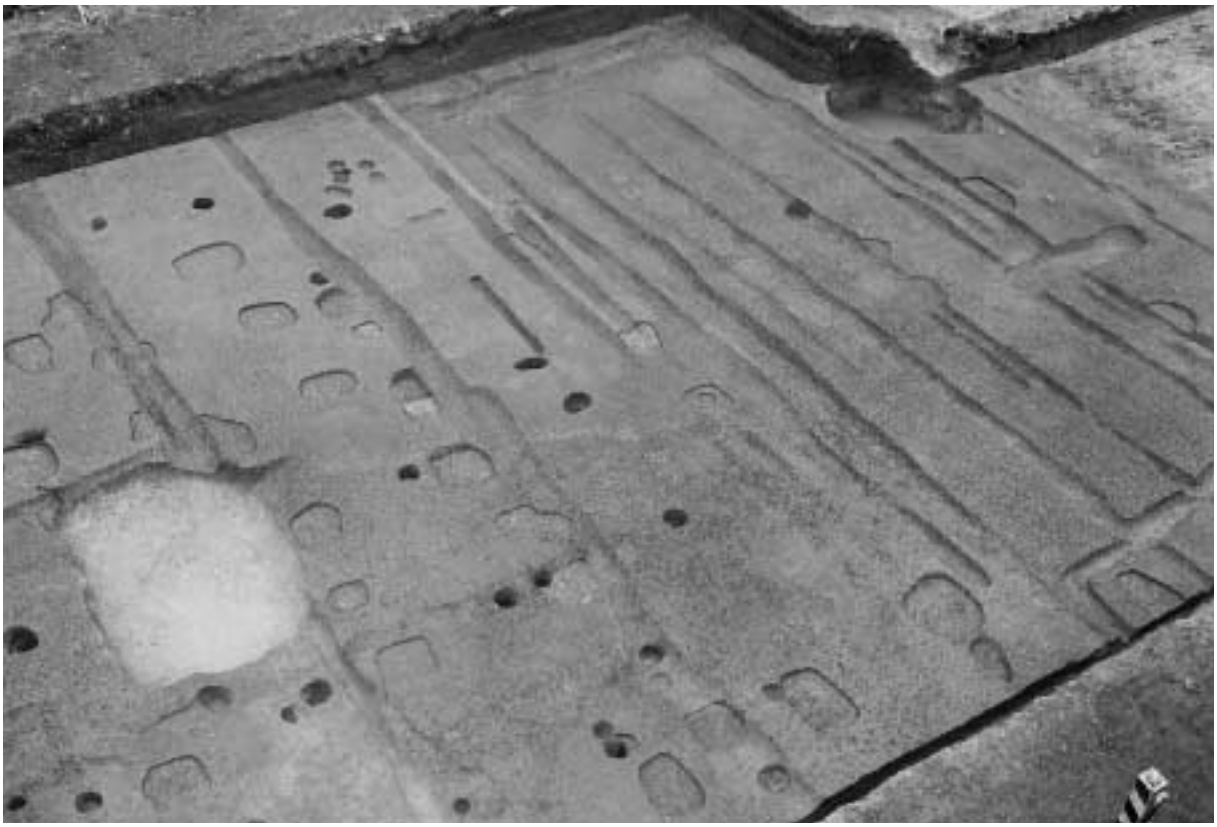
Pla.2



調査区北半部上層遺構検出状況（南西から）



調査区北半部上層遺構検出状況（南から）

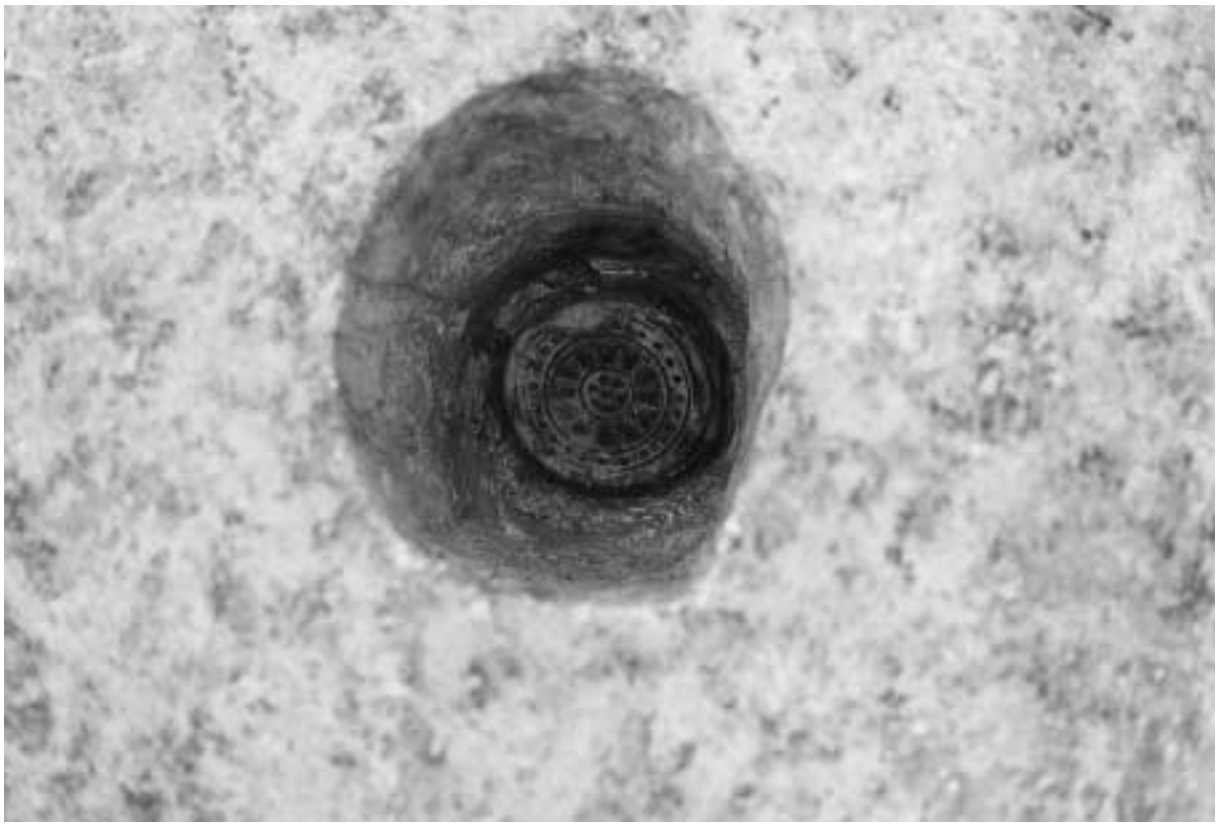


上層素掘り小溝北端部の様相（北西から）

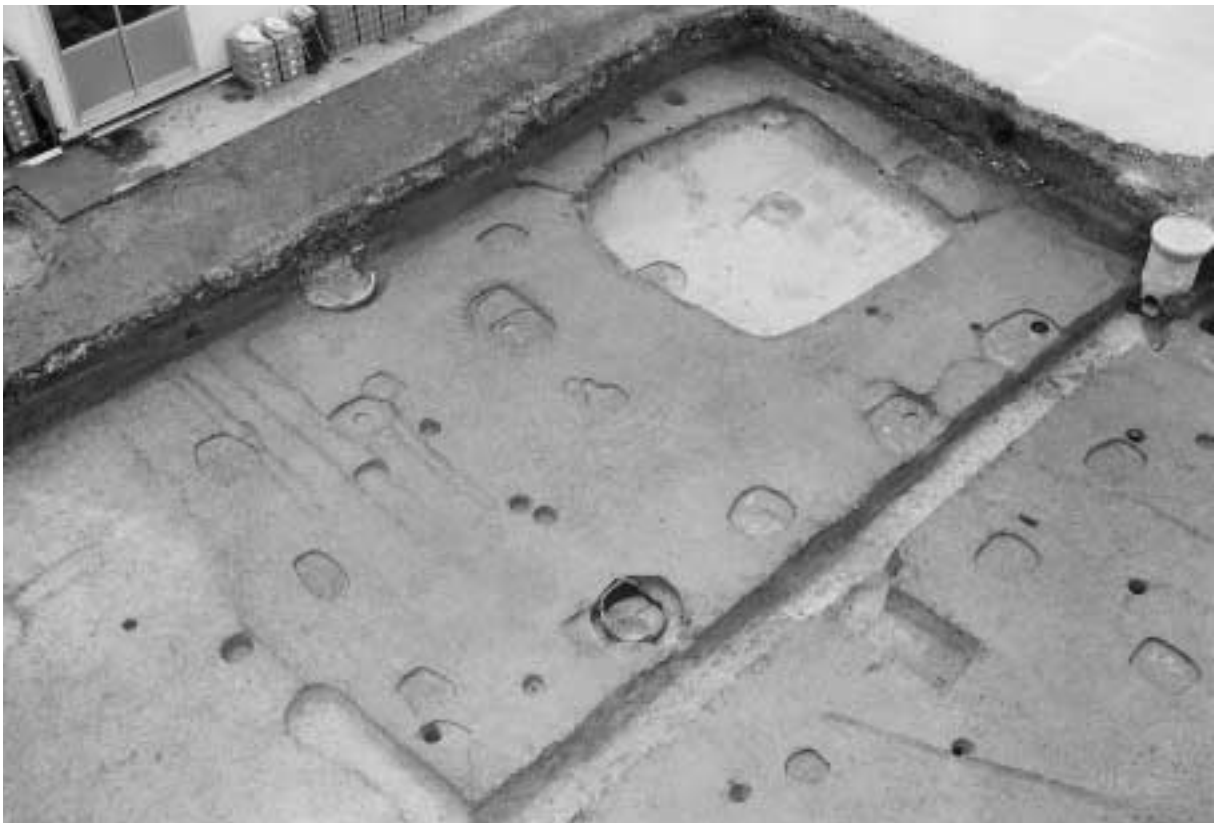
SX020遺物検出状況及び土層観察状況（南から）

Pla.4

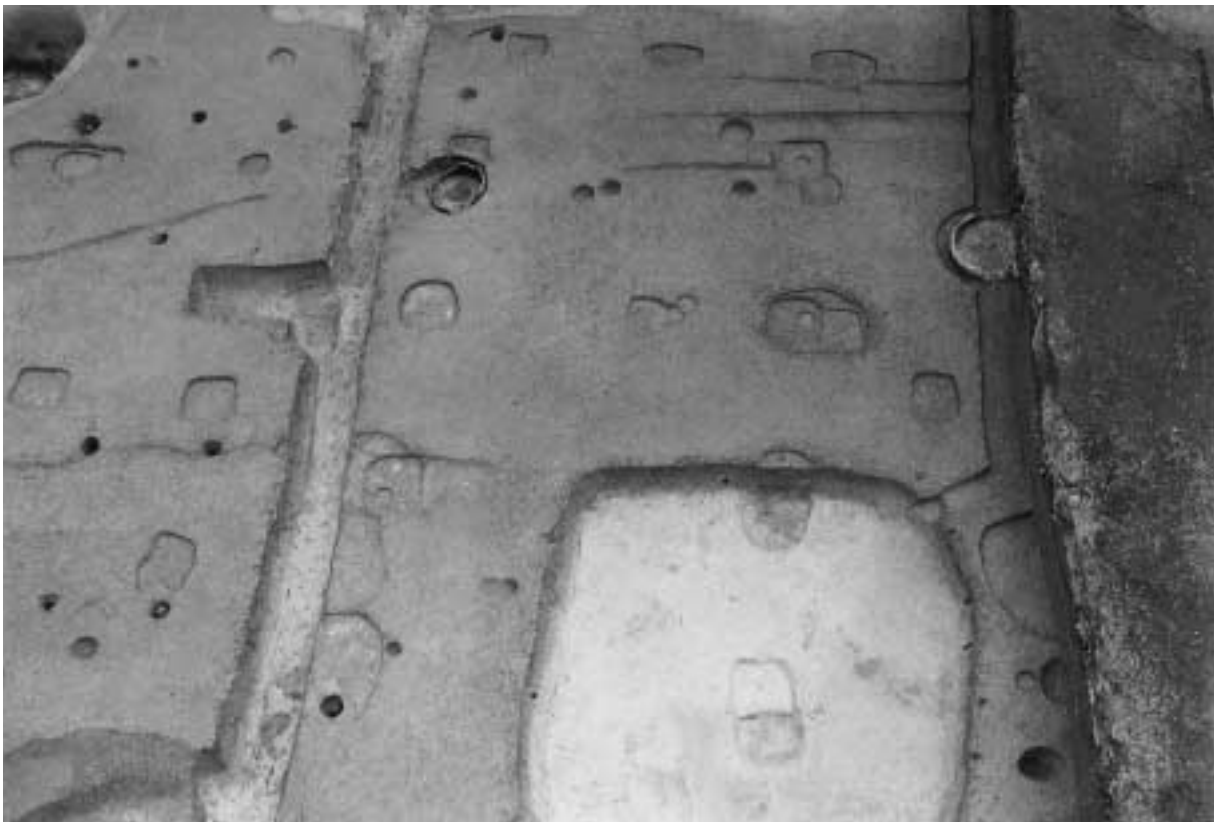
SX040遺物検出状況（南から）



SX016礎板使用の軒丸瓦検出状況（南から）



SB100・SA120検出状況（北東から）



SB100・SA120検出状況（西から）

Pla.6

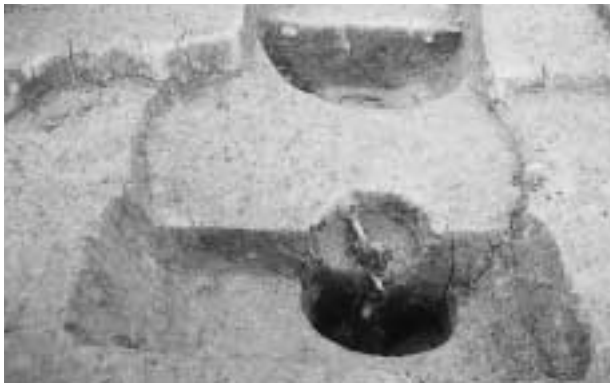
SB100柱掘方a（南から）

SB100柱掘方b（南から）

SB100柱掘方c（南から）

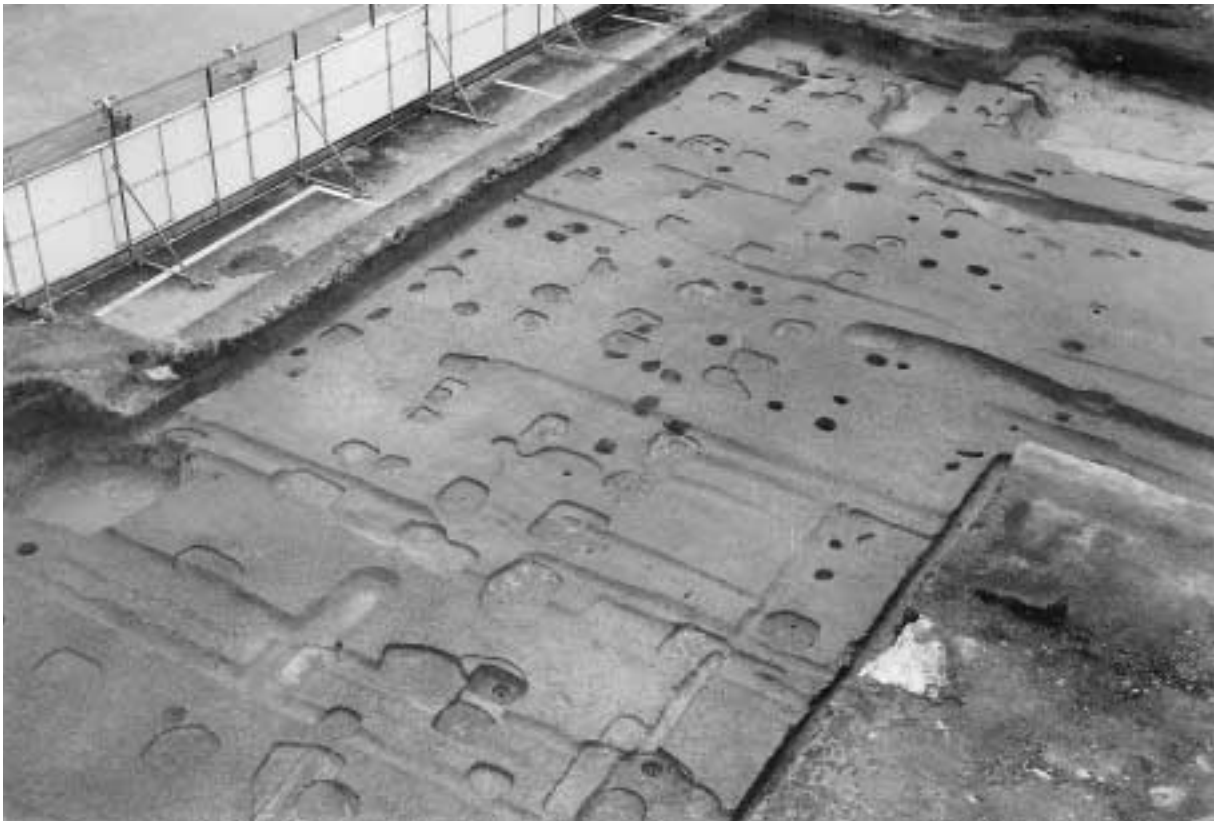
SB100柱掘方f（南から）

SA285柱掘方a（南から）



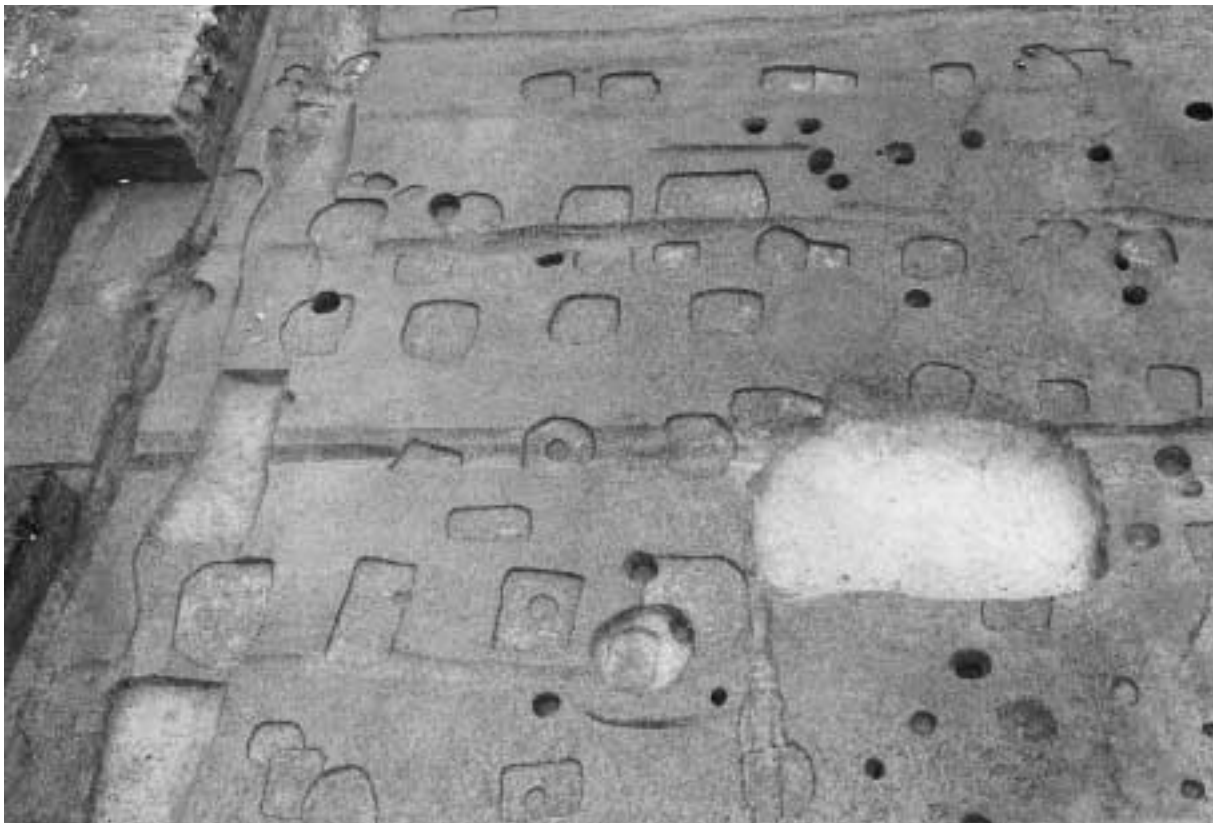
SB001柱掘方h（南から）

下層掘立柱建物群検出状況（北から）



下層掘立柱建物群検出状況（北東から）

Pla.8



下層掘立柱建物SB300周辺検出状況（北から）

下層掘立柱建物SB300周辺検出状況（西から）

SE200・210検出状況（北から）

SE210検出状況（西から）

Pla.10

SE230遺物出土状況（写真右の皿に「同法所」の墨書・南から）

SE230完掘状況（西から）

SE280検出状況（東から）

SE310検出状況（西から）

Pla.12

SD010・054・365・SK001検出状況（西から・ただしSK001は上層遺構）

SD010堆積土層観察状況（東から）

21-1

21-2

21-3

21-4

21-5

21-6

21-7

21-8

21-9

21-10

21-11

21-14

21-15

SK001暗灰色粘土層出土遺物

Pla.14

21-16

21-17

21-18

21-19

21-20

21-21

21-22

21-23

SK001暗灰色粘土層出土遺物

24-1

SX018出土遺物

24-8

24-10

24-11

24-12

24-13

24-14

24-15

24-16

24-17

24-18

24-19

24-20

24-21

SX040出土遺物

Pla.16

26-5

28-13

28-16

28-7

28-11

SE200出土墨書・刻書土器

31-1

31-2

31-3

31-7

31-8

31-9

31-10

31-12

31-4

31-11

SE230暗灰色土層出土遺物

Pla.18

31-18

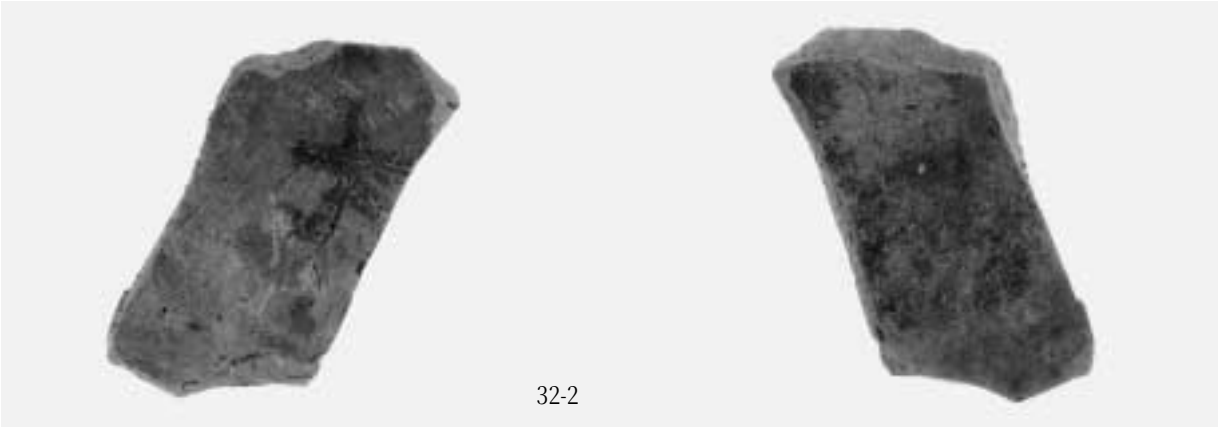
31-15

31-17

31-16

31-21

SE230暗灰色土層出土遺物


32-2

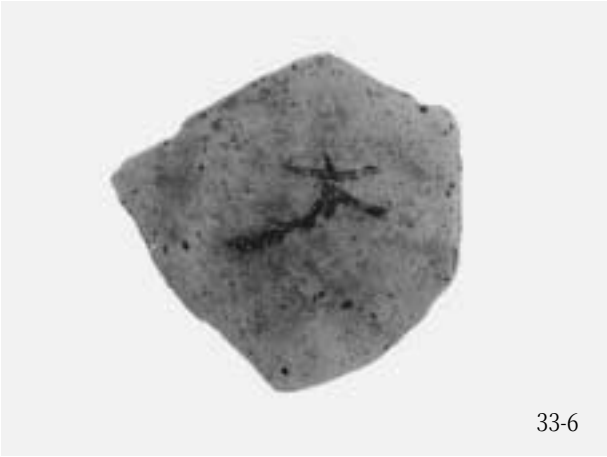
32-3

32-7

32-8

SE230出土墨書土器・土馬

Pla.20



SE230出土墨書土器

文
文
文
勅
勅

日
日

月
月

SE200出土木簡赤外線写真

48-1

48-2

48-7

48-8

調査地出土軒丸瓦

報告書抄録

ふりがな	へいじょうきょう うきょう いちじょう さんぼう いちつぼ
書　　名	平城京右京一条三坊一坪
副 書 名	平成18年度発掘調査報告書
巻　　次	
ｼﾘｰｽﾞ名	
ｼﾘｰｽﾞ番号	
編著者名	北野信彦、木沢直子、佐藤亜聖、狭川真一（編著）
編集機関	（財）元興寺文化財研究所
所 在 地	〒630-8392　奈良県奈良市中院町11番地　Tel 0742-23-1376
発行年月日	平成20（2008）年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
へいじょうきょううきょういちじょう 平城京右京一条 さんぼういちつぼ 三坊一坪	ならけんならし 奈良県奈良市 さいだいじほんまち 西大寺本町187-1他	29201		34度 41分 45秒	135度 46分 54秒	2006 1127 ～ 2007 0323	1,300㎡	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
へいじょうきょううきょういちじょう 平城京右京一条 さんぼういちつぼ 三坊一坪	都城跡 寺院跡	奈良時代 平安時代 鎌倉時代	掘立柱建物 溝、井戸	須恵器、土師器、瓦類 木製品（柱、木簡など）	赤色顔料分析 樹種同定

平城京右京一条三坊一坪

平成18年度発掘調査報告書

平成20（2008）年3月

発行
編集　（財）元興寺文化財研究所

印刷　株式会社　明新社